

ダイアン・フォーチュン著

『あ の 人 は 悪 魔』

江口之隆訳

第一章

巨大な屋敷が立ち並ぶブルームズベリー・スクエア。その一軒の裏庭に、もとは撞球室として建てられた平屋があった。本館とは小回廊によって接続しており、ガラス製のドームを支える壁には窓がない。しかし、現在この部屋を使用している人間たちは、あきらかに上部からの採光を必要としない作業に従事していると思われる。ドームの内側には天井が設けられていたからである。鎧戸仕立ての角燈の背後から換気扇が放つブーンという音を除けば、人の気配は感じられない。窓なしの壁と二重天井がこの部屋の遮光性と防音性を保証していた。

いまこの部屋を使用している人間たちにとって、完璧な遮光と防音は必須の条件であった。突然の光の変化や物音は危険ですらある。また彼らは隣人の好奇心を引くことなど望んでおらず、ゆえに密閉ドームは実に目的にかなったものであった。

その夜は蒸し暑かったが、テーブルの周りに座っている男たちは不快なふうに見えなかった。並んだ顔触れには統一性がなかった。この集会の議長は裕福な実業家といった雰囲気的人物であった。その右にはどう見ても弁護士という男が座っていた。左には白髭の好々爺がいる。対面は新聞記者であった。しかしテーブルの末席にはたやすく正体が判別しそうな人物が座っていた。外交官にも見えるし、探偵にも見える。あるいは上流階級の周辺に出没する偽貴族の山師ともとれる風貌である。

出席者中、彼が一番年少であり、その前におかれた議事録から察するに、集会の秘書らしき人物であった。

集まった顔触れ種々雑多であったが、全員なんらかの共通の訓練を積んできたとおぼしき特徴が見られた。各人とも必要がないかぎりまったく身じろぎもせずに着席しているのである。この自制力はなまなかな鍛練で得られるものではない。また各人とも泰然自若にして豪壮たる気を放っている。そして全員が目になんの表情もたえていなかった。ただし秘書は別であったが、彼とても尋常の目をしていないのである。普通の人間は眼窩周辺の筋肉運動で感情を表現するものだが、秘書は瞳孔の拡散と収縮でその効果を出す。これに接した人は異常な雰囲気を覚えざるをえない。その瞳は緑がかつた光を有する暗褐色であり、皮膚の土気色とあいまって、なんとも不快な印象を与える。しかも顔立ちが整っているぶんだけ、なお無気味であった。こういう顔をした人物は、実に面白く、実に魅力に富み、なんとも得体が知れない場合が多い。

案件を着実に片付けていく点などは、通常の集会と異なりはしなかったが、第七番目のメンバーが長椅子で眠っているとところが尋常ではなかった。しかもこの男に注意を払う者はおらず、ただ秘書のみが筆記の合間に素早く横目で観察しているのである。床に転落するきざしでもあれば、すぐに飛び出していくつもりでいるらしい。

会の運営に関する議論はほとんど小声で行われていた。巨額の決算がコメントもなしに持ち出され、そのまま通過したとき、奇妙な音が室内の静寂を破った。長椅子に寝ている人物から長く尾を引くシ

ユウという音が聞こえてきたのだ。この奇妙な現象に注意を払ったのは秘書のみであった。彼は筆記している用紙の上端に×印をひとつつけた。しばらくたって、委員会がまだ押さえた声で議論をしていると、二度目のシュウという音が睡眠者から発せられた。秘書は二つ目の×をつけた。第三、第四の音が短い間隔で続き、直ちに×がつけられた。第四の×をつけおわると、秘書は指示を仰ぐべく顔をあげた。委員会の他のメンバーたちははじめて眠っている人物に視線を移した。

「もし彼が必要にして十分なトランス状態にあるならば」と議長が言った。「決算は後回しにして、ハウスマン問題を片付けたい」

「第四催眠段階です」と秘書が言った。

「それはよい」という返事があった。そして委員たちは慎重に席を離れ、それまで無視されていた第七のメンバーを中心に囲むよう移動した。

秘書は痩せた茶色の手を伸ばし、ランプシェードの角度を調節して睡眠者の顔に光が当たらないようにした。それから席をたつて長椅子に眠る男の横にすわった。男は身じろぎもなかった。秘書はまえかがみになり、意識のない男の頭の一点を奇妙なリズムで叩いた。するとすぐに、睡眠者はなんら顔面筋肉を緊張させることなく、およそ人間の喉から発せられたことのないなんとも異常な音を放った。類似する音としては、壊れたトランシーバーから出るノイズくらいしか思い当たらない。秘書はそれからまるで普通の電話でも用いているかのように、冷静かつ実務的な態度で、いわば番号を回しはじめた。彼は無意識の男を意志伝達の手段として使用していたのである。

彼が「北五〇、東一四」と数度繰り返す様子は、不可視の交換台を呼び出しているかのようであった。何回か目に眠っている男がドイツ語で応答し、質問者が何者であるかを聞いてきた。

「こちらは三〇、〇」と秘書が答えた。「そちらはプラーグ・ロツジか？」

「さよう」と眠っている男が少し外国訛りの英語でしゃべった。

「ドイツ系アメリカ人、兄弟ヘルマン・ハウスマンの詳細を知りたい。フランス問題に関する団の方針の情報をヴァチカンに売ろうと画策した容疑がある。プラーグを最後に消息が不明」

「彼は五月初旬に当地を去り、スイスに向かった。ジュネーヴ・ロツジを当たられたし」と眠っている男が答えた。

秘書は再び男の頭を叩き、再び電話のベルとフクロウの鳴き声の中間音のような音が聞こえた。

「北四六、東六」と秘書が言うのと、眠っている男が今度はフランス語で誰何してきた。

「三〇、〇」と秘書が再び答え、ヘルマン・ハウスマンの消息を尋ねた。するとハウスマンが五月末にジュネーヴを発ち、ナポリからニューヨークに向かったという情報が得られた。

秘書は再び眠っている男の頭を叩き、奇妙な音を引き出した。

「北四〇、西七四」と数度繰り返している、やっとアメリカ訛りの強い声が応答してきた。再びヘルマン・ハウスマン情報を求めると、ようやく回答があった。

「彼は六月初旬に当地に現れ、民主党の領袖たちと接触していた。われわれがロッジへの出頭命令を出す、彼はパニックを起こして西部へ遁走した。そこで彼に対して『破碎の闇の光』による処刑命令が下された」

テーブルを囲む男たちは落ち着きをなくし、不安気に互いを顔を見やった。

「その結果は？」と質問者が尋ねた。

「彼はバッファローに立ち寄り、車を乗り継いでナイアガラに行き、吊橋に向かった」

「カナダに入ったのか？」

「いや、川に入った」と眠っている男が答えた。その表情のない顔と挑戦的な声の調子はなんとも不釣り合いであった。

薄暗い部屋にいた男たちは顔を見合わせた。新聞記者は肩をすくめた。弁護士はペンと紙をいじりまわしていた。そして秘書の瞳孔は猫科のそれのように開閉していた。沈黙を破ったのは議長の左にすわる長老であった。

「氣にいらぬ」と老人は言った。「まったく氣にいらぬ。こんなやりかたには承服しかねる。生殺与奪はわれらよりも偉大なる叡知にまかせるべきじゃ。これでは私刑も同然ではないか」

「昨今《団》には新しい氣風が生じつつあるが」と議長が深く轟くような声で言った。「行きつく果ては大惨事ではない」そう言うて議長はまるでアメリカ人の死の責任が秘書にあるかのように睨みつけた。秘書の奇妙な目の瞳孔が完全に消え失せ、虹彩はブラック・オパールの炎のような緑色の光に満ちた。しかし弁護に立ったのは新聞記者であった。

「いまは中途半端な手段に頼る時期ではない」と新聞記者が口を開いた。「方針が正しいと確信しているのであれば、突進して、きれいにやり遂げるだけの話だろう。新しい氣風がどうのこうのとおっしゃるが、その氣風が《団》にもたらした結果をご覧いただきたい。古物研究家の集団にすぎなかったわれわれが、いまでは国際政治で一目おかれるファクターとなったではないか」

一同は次々と熱っぽくしゃべったが、秘書は沈黙を守った。直接名指しさせることはなかったものの、彼こそ問題の新氣風の責任者と見なされているようであった。ついに全員が言いたいことを言い終えると、テーブルを支配したものは静寂であった。奇妙な目を有する秘書が、その視線を議長に飛ばした。

「回復させましょうか？」

議長はむつつりと頷いた。秘書の茶色の手が眠っている男の顔をすつと何回も撫であげた。すると男は少し体を動かし、クツションに身を沈ませた。しかし男が仮死に近い受動的状態から通常の睡眠に移行したのは明らかであった。数分後に男は再び身じろぎし、身を起こして長椅子にすわりなおすと、ランプがまぶしいのか、何度もまばたきしていた。秘書が魔法瓶から熱いコーヒーをカップに注いで、男に手渡した。その夜は蒸し暑かったにもかかわらず、男は寒さに震えていたからである。熱い飲み物のおかげで彼はすぐに通常の意識状態に回復した。それから彼はヘルマン・ハウスマンに関する情報が得られたのかどうか、周囲の者に尋ねた。彼の唇から出ていた言葉が、今一度彼に語られた。自殺のくだりになると、彼はひゅうと口笛を吹き、秘書を睨みつけた。

ほどなく散会となり、メンバーたちはそれぞれ数名連れ立って帰路についた。彼らはおよそ世慣れた堅物の男たちであったが、戸口では奇妙な仕草を見せた。彼らは立ち止まり、振り向き、膝を曲げる敬礼をしたのである。教会を去るときのようなものであった。部屋の一番奥の薄暗がりにかすかに輪郭を見せる祭壇があり、赤い光が燃えていたからである。

最後に退出した者たちのなかに白髭の老人がいた。彼は秘書の前で立ち止まり、皺だらけの手を差し出した。秘書は一瞬のためらいを見せたが、肉の薄い茶色の指を皺だらけの手に預けた。

「ルーカスよ」と老人が言った。「おぬしの仕事がどれほど《団》の役にたってきたか、わしほどわかっておる者はおらん。じゃがな、おぬしが身の程をわきまえてくれることを、わしは神に祈っておるよ」

一人その場に残った秘書は、まず換気扇のスイッチを切った。結果として部屋に満ちた静寂は、まるで具体的な質量を持つかのようにであった。彼はスイッチに指をかけたまましばらく立ち止まっていた。なにをなすべきか定かでないように見えた。それから彼はテーブルに向かい、散らばった書類を見下ろしたが、片付けようとはしなかった。その夜の出来事を脳裏に思い浮かべ、その意味を解釈しようと思死に考えていたのである。自分の評判があまりよくないということとは前々から明らかだった。自分の支持者たちですら、擁護論しか吐かない有り様だった。そして敵の多くは《団》の重鎮たちであった。しかも今夜のことで、それまでくすぶっていた不平不満が表面化してしまったのである。ルーカスのやりかたが好まれていない―それが極めて明瞭な形で通告されたのである。やりかたが好まれていないとなれば、彼は行いを改めるしかない。さもなければ深刻なトラブルが待ち受けていることだろう。魔術結社というものは、入るのも大変だが、抜けるとなれば一層ややこしいからだ。

ルーカスは首領たちがいかなる人物であるか、よく知っていた。彼らは至高の理想を唱える人々であるが、同時に極めて峻厳な裁きを下す人々でもある。反乱を起こせば情け容赦なく叩かれるであろう。まずロッジへの出頭命令が下り、申し開きせよと要求される。その申し開きが不十分と見なされれば、すべての儀式用具や記章や文書を《団》の保管庫に返却せよとの命令が下される。また何千年も前から伝わる呪文が唱えられ、このさきオカルト・パワーを用いればその身が破滅するであろうと警告される。かくしてやっとな破門絶縁となるのである。もはや団員との交際も禁じられ、野に放逐される。

しかし、それでも悪行を追求し、《団》で得たパワーを自己の目的に悪用する者がいれば、この世のものではないなにかが処分に当たることになる。そういう人間は、告発もされず、法律にも触れず、悪評すら立たないかも知れないが、それでも身に異変が起こるのである。彼は善行も悪行もできない身の上となり、短い余生を送ることになる。

ルーカスはこの種のことを熟知していた。そしてズボンのポケットに両手を突っ込んだまま、室内をゆっくりと歩き回り、反対の道を選んで場合に逃げられる確率を計算していた。

六年前、ルーカスは前途洋々たるジャーナリストの道を約束されていたながら、突如としてフリート街を去り、比較民俗学研究会の秘書に転身してしまった。報道世界の同僚たちは驚きあきれたものである。その動機は彼らの想像が及ぶところではなく、またルーカスも教えようとはしなかった。

実のところ、ルーカスはある種の管理職として転身していたのである。魔術結社の真の活動領域は星幽界であるが、やはり現世でもなんらかの隠れみの的施設を運営しなければならぬ。ルーカスが秘書として身を投じた研究会も、実は魔術結社の隠れみのであり、彼はこの結社に献身していたのである。

その晩はからずも明言されたとおり、彼は《団》の活動に関係するようになってから、《団》の社会的位置を大幅に上昇させていた。元来《団》では研究のための研究を旨としていたのであるが、ルーカスは団員たちに知識の実地応用法を示したのである。ルーカス以前、《団》は個人の能力発達や新生を扱うことで満足していた。しかし、その技法が国際問題にも応用できることをルーカスは証明

した。彼は幾つかのクーデターに干渉して成功を収め、そのために多数の団員から将来のリーダーと目されるようになった。彼の活動を白眼視する者はほんの少数であったが、その晩明らかになつたように、《団》の長老たちが問題の少数派であつた。そしてルーカスの命運は長老たち次第なのであつた。力の鍵を所持する長老たちが扉を閉ざしてしまえば、いかに多数の支持を集めても無意味であつた。そしてルーカスは最近になつて問題の扉が実際に閉じられていたことを知つたのである。いかに修行を積もうとも、どれほど献身しようとも、心がよがんでいれば《団》で昇進することはできない。口先でごまかそうとしても無駄である。団員の昇進審査を担当するのは修行を積んだ透視家であり、判断基準は昇進候補者の言動でも行動でもなく、オーラの色だからである。そしてこのおしゃべりな放散が真実を語るのである。日曜日、時計の鎖に十字架をぶらさげて、これみよがしに教会に参ろうとも、土曜の晩の放埒な所業を物語るどす黒い赤色のオーラは隠しようがない。いかに外面を飾りたてようとも、より高い位階に参入する準備が整つたことを示す透き通つた鋼青色のオーラをでつちあげることができない。

ルーカスは自分のオーラが神秘的な緑色であることを知っていたが、この緑色は適切な色彩ではなかつた。適切な色彩にするには自分の本質を変えるより手だてはなく、それはつまり過度の野心と身も焦がすほどの力への偏愛を捨て、同胞愛を導入することを意味していた。どちらもルーカスには達成不可能と思われた。彼は仲間を馬鹿にすること甚だしく、軽蔑まじりの憐憫のみしか感じていないほどである。そして力がもたらす成果を捨てるとなれば、なんのための人生なのか？ 彼はそこらの有象無象に親切心を見せることも簡単にできるし、昇進に必要な他の資格事項を物質的に顕現させる

こともできた。しかし、苦勞して力を身につけても、それを自分の利益に用いてはいけぬ、たとえ追いつめられた場合であっても絶対にいけないなど、彼の理解の範疇を越えるものであった。徒弟修行のためならいかなる犠牲をもちとわず、これまでもラケルのために働くヤコブのごとき苦勞をしてきたのであるが、この二年間というもの昇進は見送られており、彼の半分も能力のない連中に追い越されてきた。理論習得を修了した彼に対して、首領たちは不信の念を抱いており、実地応用をやらせる気がまったくないのだ。彼は秘められた人文科学の奥義を学んでいたが、その力を制御するための《力の名前》は知らなかった。これを知らずしては、彼の研究はすべて無意味である。彼は錠前を手に入れているのだが、鍵を所有していないのである。

そういうわけで彼は頭を悩ませながら部屋を歩き回っていた。首領たちが不満を抱いているのは明らかになった。となれば、《団》の活動方針に大幅な軌道修正が行われ、自分の翼もあっさりもぎ取られてしまうだろう。下手をすれば秘書の座からも追われてしまいかねない。この種の不慮の事態に備えるべく、彼は出来るかぎりの手を打っていた。

隣家には老齡の將軍が住んでいる。喘息発作で明日をも知れぬ命である。ルーカスはこの老人に慎重に接近し、面識を得ていた。彼はデルタ位階で授かった知識を応用して、自分に有利な遺言状を書かせるよう老人に影響力を及ぼしていたのである。ゆえにルーカスは、ほどなく大地主にして資産家の仲間入りができるであろうと願っていた。大金持ちになれば、《団》が要求する公德心を保つこともたやすくなるし、それが高位階への早道であると信じていた。唯一の危険性は、遺言状の内容に

異議が申し立てられ、彼の策略が首領の感知するところとなることぐらいであった。首領はつべこべ言うであろうし、それが耳に心地よいはずもないのである。

白魔術師が黒魔術に対してどれほどの嫌悪を抱くか、ルーカスは熟知していた。彼が取った行動は、はた目には黒そのものに見えるであろう。しかし彼自身としては、その金銭で悪を行うつもりなど毛頭なかった。老將軍の遺産は貴重である。どこの馬の骨とも知れぬ甥や姪にばらまくくらいなら、自分が手にしたほうがずっと有効に利用できる——ルーカスはそう考えていた。

とはいえ、ルーカスとて“闇の力”に対しては実に健全な恐怖心を抱いていた。遅かれ早かれ、右手道から外れた者たちはこの力に襲われて破滅するのが相場なのだ。もちろん、この力に免疫になっている者たちも少数ながら存在する。しかし彼らはさんざん修行を積んで高次の世界に到達してから左に移行した連中であるから、“闇の力”を操作する者たちよりも上級であり、しばしば大逆襲に転ずるのである。もちろんこういう個人はまれである。《団》を敵に回して長生きした者はほとんどいない。

そこでルーカスはこの先のことを考えていた。このままではまずい。《力の言葉》を手に入れば、少なくとも対等の立場で戦うことができ、まず見通しは暗かった。その晩明らかになったように、《団》の上層部がそれを許すはずもなかった。となれば、一体全体いかにして嚴重に守られた奥義を手に入ればよいのか？ ルーカスの歩調は懸念の増大と正比例して早くなっていた。前方を凝視しつつ、しかし目にはなにも映っていない。彼は振り子のように部屋を行き来していた。

突如彼の足がとまった。やたらと歩いているうちに、部屋のはしにあつた長椅子のところまで来てしまつていたのだ。オカルト電話の役を果たしていた男が横たわつていた長椅子である。いまだに男が寝ているかのごとく、ルーカスは長椅子を見下ろしていた。トランス状態の男の唇から回答が得られるような気がしたので、その通りだった。ルーカスは突如悟つた。誰であれ十分にトランス状態に入つた人間であれば、魔術儀式を“盗聴”して《力の言葉》を知ることができるはずだ―その度胸があればの話だが！ ルーカスはオカルティストに要求される鋼鉄の神経を有していたが、その彼といえども、それほどの危険を犯す気は起きなかつた。

それでも彼はまだ長椅子を見下ろし、さらなるヒントを求めていた。この線はかなり有望に思えたからである。スペンサーのやつを籠絡して《団》の秘密奪取に一役買わせることができるとしたら？ だがこの案はただだけない。団員たちはすべて選ばれた人間であり、脅迫や買収で落ちるわけがない。それに、スペンサーも自分と同様こんな危険を犯すはずもない。しかしアイデアそのものは悪くない。

どうだろう。どこかでトランス霊媒を見つける。詳しい話を教えなければ怖がりはいらないだろう。これなら自分専用のオカルト電話を持つことができるし、安全に“盗聴”できる。ことが露見すれば、《闇の力》が霊媒を“破壊”してしまうだろうが、霊媒を操っていた人間の正体をつきとめるのはきわめて困難であろう。

ルーカスは慎重に書類をかきあつめ、電灯を消し、就寝した。

第二章

学校が夏休みになれば、学生はそれぞれ帰省するなりなんなりするものである。しかし学生すべてがそんな幸運に恵まれるものではない。とある職業訓練校の秘書科コースを終え、薄暗い校舎内から出てきてまばゆい太陽を浴びた一人の娘にとっては、夏休みはそのまま熾烈な就職運動の開始を意味していた。わき目もふらずに必死の努力を重ねることで、彼女はようやく卒業にこぎつけた。第三学期は食うや食わずの日々であり、おまけに最終試験の緊張も重なって、今や異常な精神衰弱状態になっていた。足取りはどこか頼りなく、周囲の男女は灰色の幽霊に見えるほどであった。

彼女は手に封筒を握っていた。近所の広場の住所が表書きしており、成績証明書と身上書が入っている。この職を得られなかったらどうしようという不安が内心に広がっていた。照りつける舗道を歩いていくと、やはり封筒を抱いた三人の同級生が声をかけてきた。どこに行くのと尋ねられ、答えてみれば目的地は全員いっしょなのである。彼女ははいよいよ落ち込んだ。喉から手が出るほど欲しい職に競争相手が出現したのである。瞬間、少し前に更衣室の鏡で見た自分の顔の映像が心に浮かんだ——顔面蒼白、疲労困憊、目はおちくぼみ、周囲にくまができていく。自分が秘書を雇う立場であれば、ヴェロニカ・メインウェアリングを選びはしない——自分でもそう思うヴェロニカであった。

他の娘たちは楽しそうにおしゃべりをしながら目的地へ歩いていく。職を得ようと得まいとどうでもよかつたのである。夏休みをつぶしてつとめるだけの価値があるかどうか、ひやかしいにいくだけな

のだ。この時期にあたしたちを雇おうっていうのなら、格段の好条件でなけりやお話しにならないわと、ヴェロニカに公言してはばからない連中である。一方ヴェロニカは、がらんとした夏場のロンドンに無職のまま放りだされるくらいなら、どんな雇用条件でも呑もうと決心していた。

彼女たちは無表情の執事の案内で大きな二枚仕立ての玄関から入り、明らかに待合い室とおぼしき部屋に通された。異常な、ほとんど夢遊病ともいえる精神状態のためか、ヴェロニカの内部意識には、その部屋の雰囲気が肉声のように聞き取れた。執事はただの執事ではなく、どこぞの修道会の平信徒のように思える。染みひとつないワイシャツの下には鎖に吊られた十字架があるのではないか、いや、それはなにか奇怪な異教の記章だろうか？ すだれ髪の頭の中はきつと知識の宝庫に違いない。それも、およそ執事業からかけはなれた知識が詰まっているのだろう。この部屋の雰囲気は、奇怪な電気振動に満ちているが、大いなる平安をたたえていて、彼女の過労神経をやすらげるところ大であった。静寂のなかでじつとしていたという思いに駆られた。だが、お目当ての職につける見通しがいいよ暗くなったとの不安も生じた。ロンドン中の秘書派遣業者が大小さまざまの候補者を送り込んでいた模様だったからである。

突如ドアが開き、戸口から一人の男が一同を見回した。中肉中背、牡鹿を思わせる敏捷さ―この男は一瞬でふっと消えてしまうのでは、とヴェロニカに感じさせるものがあつた。慎重かつ無関心を装いつつ、彼は待機している女性たちを一人一人査察していく。ついにヴェロニカの番となつた。男と目が合った。正常な観察眼であり、反感を感じているふうの視線ではなかつたが、まったく突然、そ

れは寧猛なまでに強烈な視線に変わった。それでいて彼女を見ているのではなく、彼女の背後を見透かしているような視線であった。一秒後、彼は普通の表情に戻り、入室以来はじめて口を開いた。

「よろしければ事務所のほうにお越しいただきたい」と彼は言った。「少しお話がしたい」

ヴェロニカは彼のあとに続いてすぐ裏手の部屋に入った。それは広く快適な部屋で、インテリアは事務所風ではなく、応接室風であり、書棚に囲まれたものであった。かすかな甘い香りが漂っている。常時そこで香が焚かれていたかのようだった。金庫の扉と窓向きのデスクの存在だけが、この部屋の業務目的仕様を物語っていた。

男はデスクに座り、ヴェロニカを対面の椅子に座らせた。

「ルーカスといいます。あなたは？」

ヴェロニカは名乗った。それから震える指で成績証明書を手渡した。男はそれを受け取ったが、封筒から中身を出そうともしなかった。

「何才？」というのが次の質問だった。

「二十三です」とヴェロニカは言った。

「職業訓練学校の前には何をなさってました？」

寡婦の母親の看病をしていたが、母親の死後、生活の糧であった年金も打ち切られ、わずかな貯金は学校で手に職をつけるまでしかもたなかった。ヴェロニカはそう語った。

「健康ですか？」と男は尋ねた。「いや、つまり普通のときというか、働き過ぎじゃないときのことで。これまでに大病をなさったことは？」

どちらの質問にも彼女は合格点の答えを出すことができた。

「あなたに来てもらおうと思います」と男が言った。「給料はいかほどお望みで？」

ヴェロニカはこの職を得られると思っていなかったため、給料のことなど考えてもいなかった。そこでいいかげんに、女友達の一人が口にしていた“このくらい貰わなくっちゃ”的金額を思い出し、それを言ってみた。内心、大きなことを言い過ぎて、拒否されるのではびくびくだった。しかし回転椅子に座った男は不快な様子もなく、ただ頷いた。

「そう取り計らいましょう」と彼。「で、いつから始められますか？」

現在自由の身であるから、すぐに始められるとヴェロニカは答えた。

「それは実に結構」と男。「後回しにする理由もないでしょう。始めるなら早いほうがいい。階上に部屋が二つ三つ空いてますから、自由に使ってください。私もここに住んでますが、迷惑はかけません。勤務時間外に会うことは絶対にはありません。ここには多数の男性が入り来りします。執事の細

君がおりますからご心配には及ばないと存じますよ。タクシーを拾って、荷物を取ってすぐに戻ってきてください」

ヴェロニカは了承した。思ってもみない好条件だったのだ。彼女は質問もしなかった。質問する気を起こそうとすらしなかった。いわば、これぞ天の助けとばかりに安息の港へ逃げ込んだといったところであった。ルーカスは自ら彼女を玄関まで送っていき、道を歩いていく姿をしばらく眺めていた。口元はにんまりと笑っている。明らかに彼は買物に満足していた。

ヴェロニカは下宿屋に戻った。職業訓練校で学んでいた数年間、ここをねぐらとしていた。荷造りしようにも、ろくなものがなかった。身の回りの慎ましい品々をまとめると、彼女は家賃の清算をしようとして事務所に行った。

「お手紙の転送先は？」と大家のおばさんが尋ねた。

ヴェロニカは住所を告げた。

「じゃあ、住み込みの職を得たのね。どんな仕事？」

こう尋ねられて、ヴェロニカは仕事の内容すら質問していなかったことに気がついた。自分はどうな仕事に雇われたのだろうか。もつともルーカスとて彼女の能力や身元についてなんの質問もしなかったのだから、同じようなものである。ヴェロニカはなにも知らないと思えざるを得なかった。

「ちよつと待つて、ミス・メインウエアリング、どんな仕事か聞きもしないで就職したなんていうんじゃないでしょうね、しかも住み込みの職を！ きつと、相手が男か女かもご存じないんじゃない」

「男の人です」とヴェロニカは言った。「名前はルーカスで・・・」こう言つてから自分が知つてゐるのは完全にこれだけなのだと思ひ知らされた。勤務時間も知らなければ業務内容も知らない、ルーカスが何を要求しているのか、自分にどんな資格が必要なのか、彼女はまったく知らないのである。おまけに、ルーカスは住み込みの秘書に対して通いの秘書並の給料を払おうとしている。この金銭面での優遇措置から判断しても、なにか例外的な仕事をやらせるのは確実であろう。

「どうも気にいらぬわね」と大家のお婆さんは眉をしかめた。「まあ、この近くなんだから、ちよくちよく寄つて、調子がどうか教えてちょうだい」

ヴェロニカはお婆さんにさよならを言い、わずかな荷物を抱えてもとの広場にタクシーで戻つた。無表情の執事が再び玄関を開けてくれた。再びヴェロニカは教会に入ったような感覚をおぼえた。隔離、静寂、名状しがたい不思議な感覚が彼女の全身を包んだ。愉快な顔をした婦人が階下から現れ、階上にある二部屋へと案内してくれた。どちらの部屋からも、隣家の庭に生えるプラタナスがもろに見えた。彼女がいる屋敷の裏庭は大きな平屋建ての別館に占領されていたからである。

部屋は二間続きで、ともに古風な造作の快適な部屋である。腰掛けられるほどの幅を持つ張り出し窓は分銅式の上下開閉式であり、壁面に収納される分厚い木製の雨戸もある。光も空気も遮断できる仕掛けといえる。ゆつたりとした暖炉は古き良き日々の潤沢を今に伝えている。隣室の扉が開いてい

るため、天鷲絨の天蓋が付いた四柱寝台の羽根布団が見える。これすべて、伝統いまだ絶えることなしと高らかに宣言しているようなものであり、またこの屋敷の現所有者が快適のなんたるかを知っている証であった。（衛生のなんたるかは別の話）

夢心地のヴェロニカを現実に戻したのは執事の声であった。「夕食は七時、ここにお持ちします、お嬢さん。食事はすべてここでお待ちしておりますことになります」

「ミスター・ルーカスは今晚あたしに御用がおりでしょうか？」彼女は尋ねた。

「わかりません、お嬢さん。現在あの方は出ておられます」

用があれば呼び鈴を鳴らすよう指示を受けると、ヴェロニカはただ一人手荷物とともにその場に残された。

荷解きを終えると彼女は幅広の出窓に腰掛け、木の枝にとまっている小鳥を眺めていた。自分が囚人であるような妙な気分である。一見すると自由のように見えるが、放し飼いの動物園にいるライオンのようなもので、見えない障壁に四方をふさがれているのである。大家のおばさんの台詞が心に浮かび、ゆっくりと不安が浸透してくるのだが、彼女はそれを打ち消していた。どうしてほっておいてくれないのかしら。たしかにあたしはミスター・ルーカスの仕事も知らないし、自分の仕事も知らないけれど、だからといってまずいことになるとは限らないじゃない。

執事の妻が夕食の盆を持って上がってきた。そこでヴェロニカは尋問によつて知識の不足を補完しようと決心した。

「こちらはもうお長いのですか？」

「おやおや、ええ、お嬢さん。結婚してすぐにですよ。うちの人は子供の頃からずっと、もう四十年ですか、ずっとここにいます」

「ミスター・ルーカスもお長い？」

「いいえ、ほんの五、六年。ほやほやの新顔ですよ」

「ミスター・ルーカス以外にここにお住みの方は？」

「誰も。お嬢さんとあたしとうちのアシユロットだけ。ただ、殿方がいつも出たり入ったりで、時々お泊まりになるからお世話しなけりやいけませ。あたしがいつも寢床の用意をするんです」

「ミスター・ルーカスのお仕事は？」とヴェロニカが大胆な質問。

「秘書ですよ、お嬢さん」

「まあ！」とヴェロニカ。「で、その殿方たちは？ どういう方々でらっしゃるの？」

「あれまあ」とミセス・アシユロットは言った。「質問なさいますねえ」という謎の発言を残して彼女は去っていった。

十時を回り、ヴェロニカが寝ることを考えていると、扉をノックするものがあつた。どうぞという、ルーカスが入ってきた。

彼女が慌てて立ち上がろうとすると、「ああ、そのままそのまま」とルーカスが言った。彼女の心中に大家のおばさんの疑惑が渦巻いた。

「長くはかかりませんから。お仕事に関して二、三説明しておきたいだけです。仕事は不意にやってくる。しかも二十四時間いつやってくるか、わからないのです。そういうわけで、これから数日間外出を控えていただきたい。いつでも呼び出せるよう、この家の中にいていただきたい。それが終わって、続けて働いていただくとなれば、改めて休日の取り決めをしましょう。仕事そのものは厳しいものじゃないです。おおむねひまになるでしょうが、とにかく必要時はつねに近くにいてもらいたい」

ヴェロニカは彼の話を聞きながら落ち込んでいった。自分の得た職はまだ不安定なものなのか？不安、懸念も重なって、彼女は数日屋敷を一步も出ないという約束をしてしまった。彼はそれから数分間気楽なおしゃべりをしてから去っていった。明らかに彼女を落ち着かせよう、満足してもらおうと希望しているようだった。それ以上に彼の言葉は効力を發揮していたのである。確固たる職を得ていればヴェロニカもいろいろと質問したり批判したりする気になつたであろう。しかし先の不安な彼女は失職を恐れて必死にしがみついてしまったのである。なんとしてもこの職を得て、キャリアと呼

べるくらい長期間勤めていたかった。いわば一言でルーカスは彼女の服従を確たるものにしていたといえる。一週間の間は疑問も発さずになんとも奇妙な命令に服そう、できるだけいい気にさせ、なにも拒まず、なにも文句を言うまいと思っていた。そして一週間というのはルーカスにとって、オカルト電話を設置するに十分な期間であった。

翌朝九時、ヴェロニカは雇用主の到来を待っていた。十時になっても彼は現れなかった。十一時になると、ようやく彼は現れた。石鹸の香りを漂わせ、元気はつらつといった調子である。そしてその日の仕事が始まった。ヴェロニカの仕事は大量の文書を筆写するというものだった。しかもそれがすべて暗号文字で記されているのであるから大変な作業である。わけのわからない文字を一字一字書き写し、突き合わせてチェックするのである。しかし、それが終わると他にすることはないようであった。ルーカス自身は疲れを見せずに働き続けていたが、彼女に他の仕事を任せる気はないように思われた。彼女は手をデスクに置いたまま、ただ彼の曲がった背中を見ていた。時は刻一刻と過ぎていき、彼は作業をしていて、彼女はただ待つだけである。一時になると彼も昼食休憩を宣言し、二時に戻るよう彼女に告げた。しかし彼女がその時刻に戻ってなにをしましうかと尋ねてみると、彼はやや当惑したようであった。そんな質問をされるとは予想だにしていなかったようである。それから漠然とあたりを見回し、なにか彼女に与えるものはないかと捜している風であった。結局なにも見つからず、しようがないので視線をヴェロニカに戻した。彼女にはルーカスが微笑を浮かべまいと努力しているように思われた。

「今のところはやってみようことがない」と彼は言った。「よければ、これでも読んで下さい」そう言うのと彼は椅子に置いてあった朝刊の束を指さした。

ヴェロニカが世界の破局や大惨事の記事を読んでいると、やがて五時となった。それまで一心不乱に仕事をしていたルーカスが立ち上がり、背伸びをし、外出しなければならぬと宣言した。

「今夜もわたしに御用がおりますか？」とヴェロニカが聞いた。

彼は首を振った。「帰りは遅くなるから」

「でしたら、わたくし、下宿までちよつと行ってきてよろしいでしょうか？　すぐそこなんです。大家のおばさんが顔を出しなさいって」

しゃべりながら視線を合わせてみると、驚いたことに彼の瞳孔が完全に消え失せていた。二つの緑茶色の円盤が彼女を見つめている。感情のかけらもない、非人間的な悪意に満ちた恐ろしいものだった。人間の特徴が突如消え失せた容顔ほど邪悪なものとは想像もつかない。ヴェロニカは視線をそらすこともできず、その場に立ちつくしていたが、恐怖の金縛りを破ったものはルーカスの声であった。

「前に申し上げたように、今のところは外出を控えていただきたい」と彼は言った。「電話がかかってくるかも知れませんか」と説明ばい台詞が加えられた。彼の瞳孔は徐々に通常の比率に戻っていった。彼はヴェロニカの狼狽を見てとると、強い調子で言い放った。

「なにか問題がありますか？」

「ありません」とヴェロニカが答えた。あなたの顔が怖くて口がきけなかったのだとは、とうてい言えなかった。彼はまだヴェロニカの顔をじっと見ていたが、その目は好奇心剥き出しの不快な凝視ではなく、まったく無関心な観察眼であった。明らかに観察結果に不満だったらしく、彼は一歩踏み出してきた。本能的にヴェロニカは一歩退いた。ルーカスがさらに一歩進み、ヴェロニカがまた一歩退く。もはやデスクにつきあたって後ろに下がれず、そこへルーカスがやってきて彼女の目を覗きこんだ。彼女は視線をそらすこともできず、ただ力なく相手の目を覗きかえし、魅惑されてしまった。彼は背の高い男ではなく、顔の位置は彼女のそれとほぼ等しかった。しかし彼から発せられる力感のために彼女は金縛りにあってしまった。ただ見つめつけ、目をそらすことを望まなくなっていた。ルーカスの目からほとぼる生命力は強烈な磁力であり、強制力を伴っていた。ヴェロニカは見つめつづけた。

ルーカスが解放してくれなければ、ヴェロニカはその場で石になるまで立ちつくしていたかも知れない。彼の目のなかで何かが閉じられ、力が遮断された。そして彼女は普通の人間の顔を覗きこんでいた。皮膚はオリーブ色で、目鼻立ちは整った、およそ不快感を与えない顔である。彼への恐れは去り、その場に残ったのは奇怪な魅力のみであった。この人は次になにをする気かしら？ それを知りたかった。彼女の視線が彼の一挙手一投足を追っていた。彼はあたしが見ていることを知っている。それを予期していて、決して怒ってはいないのだ。彼が出ていこうとしているのが残念なくらい。い

なくなつてしまつたら、なにもかもつまらなくなつてしまう。彼が顔を上げた。目が合つた。ほほ笑んだ。顔をそむける気なんて起きるわけがない。

「自分の部屋にお戻りなさい」と彼が言った。「ミセス・アシュロットが夕食を運んでくるでしょう。なんの心配もいらない」

彼女がおとなしく戸口に向かうと、彼が扉を開けてやった。彼女は階上が上がつていった。踊り場で振り返ると、彼がまだ見送つてゐるのがわかつた。その目はなにか秘められた喜びにきらめいてゐた。なにが嬉しいのだろうと彼女も思ったが、そのとき彼女の精神は機能を停止してゐて、役に立たなかつた。彼女は部屋に行き、寝台に身を投げ、深い眠りに落ちた。目が覚めたのは二時間後、アシュロット夫人が夕食の盆を持って現れたときであつた。

おなかはずいていながつたのだが、彼女はアシュロット夫人に気兼ねして、夕食を食べるふりをした。夕食が片付けられると、彼女は出窓に座り、日没を眺めていた。不安はきれいに消え失せていた。ヴェロニカは心おだやかにして満ち足りており、なにも考えていながつた。ロンドンの濃密な大気に力を奪われ、表情を失つた巨大な赤い球体を眺めていた。それはゆっくりと沈んでいった。縁が地平線に触れた。徐々にそれは消えていった。夕陽がなくなつてしまふと、変化が生じた。蒸し暑い八月だというのに、部屋は突然冷えきつてしまつたのだ。ヴェロニカは身を起こし、少し震えながら体を縮めた。なんなの？ どうしたというの？ するとルーカスの目の恐怖が怒涛のように押しよせてきた。彼女は慌てて立ち上がった。あたしがいるこの家はなんなの？ アシュロット夫妻、ルーカス、

それに謎めいた“殿方”？　どこの何物なの？　そして、あたしは―あたしは罫にはまったのかしら？　あの人、あたしを解放する気がないのかしら？　もしそうなら、あたしをどうする気なの？　動機はなに？　これは現実、それとも悪夢？　はつきりしているのは一つだけ、こんな恐ろしい場所には一秒だつていられない。なんとしても逃げ出さなければ。どんなことをしてでも。

彼女は帽子をかぶり、財布を握りしめた。身の回りのものなど構わない。あとで人を取りにやればよい。通路をつま先立ちで急ぐ。分厚い絨毯のために足音はしない。しかし壁面に設けられたくぼみのところに長椅子がおいてあり、そこで本を読んでいる男がいた。ルーカスであった。

「そんなことだろうと思っていた」と彼は顔も上げずに言った。

ヴェロニカは必死だった。一瞬身も凍り、足が止まったが、すぐに駆け出した。分厚い絨毯のためにルーカスにはなにも聞こえなかった。彼が気付いたときには、ヴェロニカはすでに十二歩近く階段を下つていた。足に翼がついたかの勢いで駆け下り、踊り場では手擦りを利用して身をひるがえし、次の階段を駆け下りようとした。背後でドサツという音がした。ルーカスが階段を一飛びして通路に着地したのだ。彼女は後ろから抱きつかれ、両肘が腰のところを釘付けにされた。金切り声をあげたが、口をふさがれた。彼女は必死でもがいたが、体に回った腕がさらに締め付けを増したため、息もできず、身動きもできなくなった。そのまま二人は動かずにいた。

ヴェロニカにとつて、男性と儀礼的握手以上に接触したのはこれが最初だった。彼女が得た最初の感覚はまったくの驚愕であった。彼の力は予想をはるかに越える強さであったのだ。また彼の体は驚

くほど堅かった。骨張った前腕部でがっしりと抱き締められたため、それがよくわかった。パイプ煙草と石鹼の匂いがある。嗅いだことのない、女性的でない匂い。ヴェロニカは思わず知らず観察に気を取られて、おびえるのを忘れていた。するとルーカスが彼女の胸から腰に腕の位置を変え、一息ふんばると、彼を抱えて階段を下っていった。ヴェロニカは事務所のソファのクッションの間に不作法に放り出された。

彼は一步下がって彼女を子細に眺め、乱れた髪を直し、呼吸を整え、笑った。ヴェロニカはスカートトの乱れを直し、威厳のかけらなりとも保とうとした。

「やめたいんです」と彼女は言った。

「そう？」とルーカス。彼はネクタイの端をチョッキのなかに押し込んでいた。「残念ながら手放すわけにはいかない」

「どうして？」

「きみは役に立つ」

「他の秘書を雇えばいいでしょう」

「秘書など必要じゃない」

「なら—どうしてあたしを？」

「教えたってわかりやしないさ、お嬢ちゃん、説明するだけむだだ」

彼はめくれたチョッキを直し、カフを整え、カラーを調整した。こういった準備が終わると、彼は不断の視線をヴェロニカに注ぎだした。数秒間二人は互いに見つめあっていた。それからルーカスが肉の薄い茶色の人差し指を伸ばし、ヴェロニカの柔らかい喉に触った。

「きみの喉のまわりになにかがある」と彼はいった。

思わずヴェロニカの手が喉のあたりを触った。

「ほら」と彼が言う。「鋼鉄の首輪だ」

その言葉が呼び出したイメージが彼女の心に閃光のごとく浮かびあがった。同時に彼女のは指の下に冷たい金属を感じた。

「首輪には鋼鉄の鎖がつながっている」男の柔らかい平板な声が続いた。「細い鎖だ。どこにつながっているか触ってごらん」

彼はヴェロニカの手を取って自分のほうに引きよせた。彼女は指のあいだで鎖の輪をひとつひとつ感じた。

「そして鎖の端はぼくが持っている」と彼は意味ありげに付け加えた。「人を呼ぼうとしたり、こちの都合の悪いことを言おうとすれば、首輪が締まってきみを窒息させるだろう。ほら、いま締まっている」

ヴェロニカは喉のあたりになにか硬質の力を感じた。圧力が一定の速度で強くなっていく。気管が閉じられていくため、彼女は呼吸しようと必死で喘いだ。そのときルーカスが彼女の額に触った。

「もうゆるんでいる」と彼は言った。「だが、覚えておけ。ぼくを裏切ろうとすれば、いつだってこうなるんだ」

ヴェロニカは胸いっぱい空気を吸い、立ち上がった。混乱の極みにあったため、恐怖すら感じなかった。ルーカスは満足げにほほ笑んだ。

「さあ、おやすみ」とルーカス。「ぐっすりと、いい夢を。明日の仕事は十時からだよ」

第三章

ヴェロニカは部屋に戻ったが、眠るとなると別の話であった。たいして優秀でもない速記者兼タイピストを無理やり手元に置いておくルーカスの動機はいったいなんだろう？ 色恋ざたではない。触られこそしたが、およそ愛撫とは言いがたい触り方で、まるで強情な子犬を扱うようなやり口だった。ヴェロニカは喉元に加わったあの絞殺されるような圧力をはつきりと覚えていた。ルーカスから逃げようとすれば、本当にああなるのだろうか？ 他人に助けを求めれば、あの締め付けを、呼吸困難を感じるのだろうか？ もしそうなら、事実上罠にはまったも同然である。

まったく途方に暮れたまま彼女は寝台に座り、開け放たれた大窓越しに暖かい夏の夜を見つめていた。いまとなつては再度逃亡を試みるにも時刻が遅かった。しかしヴェロニカは夜明けに起床して家中がまだ寝ているうちに抜け出そうと決心していた。こう考えると気分も落ち着く。ヴェロニカは服を脱ぎはじめ、ふと手をとめた。彼が言ったことが本当だったら——自分が目に見えない鎖につながれていて、従わなかったら首が締まるのだとしたら——自分は体も心も彼の手中に落ちたも同然ではないか。逃げることもできず、叫ぶこともできず、それでいて自分を縛る鎖は自分以外の誰の目にも見えず、他人に告げたとところで信じてもらえない。たとえ告げようとしても、ルーカスの魔力が働いて、自分を締めあげる。息もできずにあがくのだ。ヴェロニカは寝台にすわったまま、目に見えない牢獄の恐怖に駆られて金切り声をあげようとする自分を抑えていた。

実際、彼女は檻のなかにいたのである。鉄棒の見えない檻であった。隣人の助けも同情も得ることができない。別の惑星に移されたも同然の孤独であった。アシユロットなら理解してくれるかと思つたが、助けてはくれないだろうと思つた。でも、警官や下宿のおばさんに助けを求めても、気違ひと思われるだけだろう。それでも、首輪と鎖は自分を窒息させる現実なのだ。どう解決したらいいのか、見当もつかない。絶望したまま彼女は枕に身を埋め、夜明けを待った。

階下の事務所ではルーカスが日記を書いていた。緑色の笠のランプがデスクに明るい光の輪を投射しているだけで、部屋は真つ暗だった。その日の出来事は明らかに彼の好むところ大であつたらしい。書きすすむにつれ、唇に微笑が浮かんでいたのである。

「午後、事態は急転回」と活字のように小さく整つた文字が眼前の日記帳に刻まれていった。「予想より早く手の内をさらけだす。しかしV・Mは極めて暗示にかかりやすく、簡単に籠絡。トランス状態に入らせるになんの困難もない模様。体の調子さえ良ければ、彼女は十分に役に立つであらうが、現在は虚弱であり、また過労気味。アシユロット夫人に命じてたらふく食わせるよう取り計らう。A夫人、思いやりに心打たれた様子。V・M、逃亡を企てる。階段まで追いかけて事務所に連れ込み、首輪と鎖の暗示をかける。暗示の効果大。しゃべれば首輪が締まると告げると、窒息しかける。極めて興味深し。喘息と同じメカニズム。本当に窒息させないよう注意が必要」

ルーカスは日記帳に鍵をかけ、個人用の金庫にしまった。そう、一日の作業としては十分に満足いくものであると信ずるに足る理由があつた。彼は透視力の助けを借りて秘書派遣業者が送りつけて

きた雑多な女性たちのなかから霊能力の素質を有する一人を選びだしたのだ。しかもそれが正解だったようである。たしかにヴェロニカ・メインウエアリングは非常に感受性が高いが、問題はただひとつ、十分な体力を持つているだろうか？ トランス作業は恐るべき緊張を伴うものである。ロτζジでオカルト電話役をつとめる男たちでさえ、いつもぐったり疲れていたものであった。とはいえ、彼女はなんとかもつだろう。こちらの欲しいものは《力の言葉》だけなのだ。状況は明らかに上向きの上である。ともあれ天宮図を見て運勢を調べることにする。

ルーカスは大宇宙（本当の宇宙）が小宇宙（人間）に及ぼす影響というものを経験から学んでいた。そして星回りが悪いとなれば、できるならかくも重要な冒険に着手したくないというのが本音であった。

「たしかに人間は自分の生まれ星を支配することもできる。しかし、ちよつと待っていれば波に乗れるときに、無理して流れに逆らう必要がどこにある？」というのが彼の持論であった。そこで彼は天の潮流を調べ、それを味方にするコースを決定した。

今夜知ったことは実に満足すべきものであった。オカルトの星海王星が富貴の室で吉座相をとり、戦士たる火星に後押しされている。あやしげな座相は金星だけで、かなり悪く、しかも死の室に入っていた。

ルーカスは天宮図を慎重に検討した。「なるほど」と彼はようやく口を開いた。「なにもかもというのは無理か。ともあれ、金星にはこれまで困らされたことはない」そう言うと彼もまた床についた。

アシユロット夫妻は七時前に起きることはない、ヴェロニカは考えた。そこで目覚ましを五時に合
わせた。二時間あれば、わずかな所持品をスーツケース二個にまとめ、誰にも気づかれずに屋敷を抜
け出して下宿に行けると思われた。下宿のおばさんは心配していてくれたから、きつと助けてくれる
だろう。首輪と鎖の話を持ち出せば、話の真偽を疑われる可能性が強いけれど、ルーカスが階段まで
追いかけてきて、腕づくで屋敷から出さなかった話だけでも十分だろう。

不安なまままどろみ、睡眠と覚醒のはざまを行き来するが、無意識が忍びよると彼女は恐怖を覚え
てはつきり目がさめる。全神経が震え、全筋肉がこわばり、魂全体が身構えるのである。

ほどなく夜空に灰色が忍びこんだように思われた。そして物の輪郭が見えるくらいに明るくなると、
すぐに彼女は起き上がって荷造りを始めた。六時前に抜き足差し足廊下を歩く。今度もきつと思っ
ていたが、ルーカスは長椅子に横たわっていなかった。彼女の前進を妨げるものはなにもなかった。

広間は換気の悪い家に有りがちなかび臭さに満ちていた。しかし大きな玄関は簡単に開く。アシユ
ロット夫人の言う“殿方”が二十四時間いつでも出入りするために、門は通されたことがなく、旋錠
式の鍵しかかかっていなかったからである。玄関は音もなく開いた。ヴェロニカはガチャリという音
を恐れたため、あえて扉を閉めようとしなかった。しばらくのあいだ、彼女は幅広の石段に立ちつく
した。あの不思議な鎖が締まるのだろうか？ 窒息するのだろうか？ しかしなにも起きなかった。
次の瞬間、彼女は道を急いでいた——自由の身だ！

五分後、彼女は下宿屋に回りこんだ。おばさんは寝巻に身を包んではいたが、しっかり目覚めており、不審の入り混じった驚愕の眼でヴェロニカを眺めた。

「こんな朝早くに何事なの？」おばさんは尋ねた。

ヴェロニカは息が切れてろくに返事ができなかった。そしておばさんはなにやら一悶着ありそうだと見てとって、詮索好きの掃除婦の目にとまらないよう、ヴェロニカを事務所に連れていった。おばさんは鋭い眼差しで娘を眺め、説明を待った。世間様というものは、無邪気な少女が畏にはまるのを防ぐためならどんな助言も警告も惜しみなく与えるが、実際に面倒が生じたとなれば話は別であり、いかにして巻き込まれるのを防ぐか考えはじめるものである。

「その、職場でちよつと不愉快なことがあって」とヴェロニカはおずおずと話しはじめた。「ルーカーカスって人の下で働いていたんですけど・・・その人が取り乱したっていうか・・・もみあいになつて・・・もう戻りたくないんです。ここに置いていただけますか？ あたしの部屋はまだ空いてますか？」

「まだ貸してませんよ」とおばさんがいささかぶつきらぼうに答えた。「ええ、そうしたいっていうのなら、ここに泊まってもしよござんすけどね、面倒はお断りですよ。ややこしい話はまっぴら。荷物はポーターに取りにやらせましょう。職を世話されたときに騙されたのね」

おばさんはそう言うと、ヴェロニカを詮索するように眺めた。「そのルーカーカスって人はどんな人？」ついに質問が飛んだ。

「とつても変な人なんです」とヴェロニカがゆっくりと口を開いた。「あんな変な人ははじめて」

そうしゃべるうちに、忌まわしい記憶がルーカスの姿を眼前に呼び出してしまった。なめらかなオリブ色の皮膚、鋭い鼻、薄いくちびる、しっかりと顎の線、奇妙な緑茶色の瞳。逃げたとわかったら、どうするって言ってたかしら？ ヴェロニカはおばさんの存在も忘れて口ごもり、眼前に生じた鮮烈なルーカスの姿に圧倒されてしまった。しかし恐怖のなかの恐怖といおうか、彼の姿はもはや単なる記憶画像ではなくなろうとしていた。それは生命を帯び、実際に動きはじめたのだ！ 肉の薄い茶色の手が前夜のようにゆっくりと自分のほうに伸びてくる。声が聞こえる。（おばさんにも聞こえるはずよ！）「きみの首の回りに鋼鉄の首輪がある。これ以上一言でもしゃべれば、息ができなくなるぞ。首輪には鋼鉄の鎖がついている。その端はぼくが握っているんだ。さあ、戻ってこい。グイと引かれる。ヴェロニカは扉のほうによろよると二歩踏み出した。再びグイと引かれる。再び二歩進む。

「なにしてるの？」とおばさんが疑惑の眼差しで尋ねた。

「あ、あたし―気が変わったの」とヴェロニカが言った。「やっぱり戻らなくちゃ」

おばさんはフンと鼻を鳴らした。「もう二度と来なくて結構だよ」と言うと、ヴェロニカの鼻先で扉をボタンと閉めてしまった。

ヴェロニカは戸口に立ちすくんだまま、最後の逃げ場所もだめになったことを悟った。前にもましてルーカスの手中に落ちてしまったのだ。なけなしの数シリングが入った財布は階段でのみあいでなくしていた。彼女にはなすすべがなかった。鋼鉄の鎖に引かれるまでもなく、ただ広場の屋敷に帰るしかなかった。

戻ってみると、アシユロット夫人が石段を掃き清めていた。恥を忍んで呼び鈴をならさずにすんだ。

「朝のお散歩？」と気の良い夫人が笑顔で言った。「若いお嬢さんの早起きは見えていて気持ちのいいもんですよ。きょうびはお目にかかれませんものねえ。あたしたちの若いころは早起きだったんですよ。すぐに朝食をお持ちします。おなががすいてらっしゃるでしょう」

ヴェロニカは涙があふれそうに返答もできなかった。バケツの横を抜けて階段をはいあがった。

部屋に戻って寝台に身を投げ出し、死んだように眠る。次の間でアシユロット夫人が食事の準備をしている音で目が覚めた。

ヴェロニカは朝食をとりながら状況を振り返った。まったくの一文無し、妙な行動を見せたために下宿のおばさんからも愛想をつかされた。ルーカスはこれ以上ないと言えるくらいに彼女を押しさえてしまった。

その幸運な男はシャワーを浴びながら陽気に歌をうたっていた。人生これ満足なりといった様子である。実際、満足そのものといえた。

ヴェロニカは十時に雇用主の到来を待っていたが、一晚タイルの上で寝ていたような顔色だと言われてしまった。気分転換にリージェント・パークを散歩したほうがいいと命令された。

「もちろん紐付きでね」とルーカスは茶目気たつぶりに言った。「いい子にしていたら、首輪にすてきな青リボンをつけてあげよう。それにベルはいかがかな？ 首輪にベルをつけてあげようか、ミス・メインウェアリング」

ヴェロニカはあわてて数歩退いた。ルーカスという人間の恐ろしい点の一つは、筆舌につくしがたいことを愉快気にとやつのけることであった。それに彼の両眼―瞳孔が針の一点と化すときの両眼。ヴェロニカはたいして人生経験を積んでいなかった。彼女にとっては、悪漢は悪漢らしい外見を呈しているはずであった。そしてルーカスは、悪漢の主要特徴たる黒髪を有してはいるが、およそ悪漢には見えなかった。彼女を階段まで追いかけたメロドラマのような瞬間を除けば、彼は悪漢らしい振る舞いも見せなかった。しかもその後の屈託ない振る舞いのために、そのときの印象すら薄れがちだったのである。

ヴェロニカが散歩から戻ると、ルーカスからの伝言が待っていた。夕刻に用があるから、たつぷり睡眠をとって気分を一新しておくようにとの命令である。伝言の前半部を読めば、後半部は不可能となるのは明らかであった。彼女は部屋に行ったが、眠るためではなかった。寝台の上で輾転反側しつつ、どんな要求をされるのだろうかと考えていた。

ヴェロニカは年も若く、年の割にも若かった。学校を出てから家がなくなるまで、サリー州の村の小さな田舎屋で、母親と二人暮らしをしていた。庭、教会、母娘と同様に慎ましく暮らす近所の婦人たち相手の茶会―これではヴェロニカの視野が広がるわけもなかった。

彼女は生れつき愛らしい気立てだった。やさしいのである。やさしさ以外は何にもいらぬような人生を送ってきたからである。それに愛情こまやかだった。彼女はキリスト教の美徳を旨とする躰を受けてきたが、それ以外には人生に対処する術を学んでいなかった。静かな村の生活を越えた人生など想定していなかったからである。

いまやルーカスの手中に落ちてしまい、彼女はどうしようもなかった。どうしてよいか、右も左もわからなかった。下宿のおばさんにそっぽを向かれてしまったとなつては、彼女の頼り先も底をついた。ルーカスが怖かったが、同時に魅力も覚えていた。彼女は暗示の心理学も知らなかったし、催眠状態での性の微妙な反応も知らなかった。彼女にわかっていることは、ルーカスの支配力には魅力が伴っていて、それが自分でも説明がつかないということくらいであった。

ルーカスに会う時刻が迫ってくると、彼女はくしゃくしゃのジャンパーとスカートを脱ぎ、かわいいグレーのドレスに着替えた。サリーの庭の木陰の茶会で着て以来、日の目を見ていなかった服である。波打つ茶色の髪にブラシを通し、リボンでたばねる。するとヴェロニカは、泣いていたため目こそ赤いが、はじめてこの屋敷に来たときの痩せ衰えた生物とはまったく異なる娘になっていた。

九時、ルーカスはアシュロットを迎えによこした。不安に心臓が喉までせりあがるのを感じつつ、ヴェロニカは執事のあとについて分厚く絨毯を敷きつめた階段をおり、ルーカスの専用区画である事務所兼書斎に入った。食後のパイプをふかすルーカスがいた。彼は歓迎代わりにパイプを振った。実に明晰かつ人生を謳歌している様子だった。以前から気がついていたことだが、ルーカスはいつも夕方になるとしゃつきりしてくるようだった。しかし今夜は特に元気がよかった。ヴェロニカは無言のまま彼が指さす椅子に腰掛けた。それは巨大な肘掛け椅子で、小柄な彼女はすっぽり沈んでしまい、眼前に立ってパイプをくゆらしながら自分をしげしげと眺めるルーカスを見上げた。

「いい子にしてたかな？　ぐっすり眠れた？」と彼は聞いた。

ヴェロニカは小声ではいと答えた。

「それはいい。アシュロットには邪魔をしないよう言っておいたけど、ドアに鍵をかけておいたほうがいい。おやおや、そういう目で見てはいけない。きみを絞め殺そうというんじゃないから。トランス状態のときに突然誰かに起こされでもしたら、それはもう大変なショックを被るんだよ」

ルーカスは鍵をかけに行つた。続いてパイプの灰を払い、それをしまつた。ヴェロニカは椅子に釘付けになつたように身じろぎもせず、彼の行動をじつと見つめていた。奇怪な魅力があつたのだ。彼の素早く音もない足取り、機敏にして優雅な物腰は、彼女がかつて目にしたことがないものであつた。ルーカスは有り余るほど生命力に満ちあふれており、他の人間たちはみな無機質、平板、無味乾燥に見えるほどであつた。奇怪な輝きを放つ緑の瞳、学生のような細い腕と茶色の長い指、当惑したときにかきあげる鴉の濡羽色の黒髪、いつも彼女をさかんに人知れず冗談を楽しんでいるかのような微笑を浮かべた薄いくちびる、それでいて目は笑っていない―これすべてヴェロニカの目には鮮烈な人格の証と映つていた。その両眼さえなければルーカスは愉快な人物という印象を与えたであらう。だが、両眼になにかおかしい点があるのだ。人間世界の住人でないかのような、一種隔絶したものがある。ヴェロニカは彼を観察して、人間の慈悲などは彼にとつて何の意味もないだらうと思つた。

ルーカスは部屋をうろうろしていた。明らかに日没を待つていた。ヴェロニカは目で彼を追つた。最後の陽の名残が消えると彼はヴェロニカのもとにやつてきた。彼は真剣な面持ちで彼女のまえに膝をつき、顔の高さを彼女のそれと合わせた。

「ミス・メインウェアリング、ぼくの目をまっすぐ覗きこむんだ」と彼は言つた。

ヴェロニカは恐怖を抱きつつも魅了され、命じられたとおりに覗きこんだ。瞳孔が奇妙な内側の光を放ちつつ収縮を繰り返している。まるでルーカスの頭蓋骨の内部に脳髄ではなく燃え盛る炎があるみたいで、その光が眼球のレンズを通して輝いているようだった。一旦目が合つてしまうと、もはや

視線をそらすことはできなかつた。炎はますます輝きを増し、男の顔は消え失せ、彼女は炉心を直視しているも同然だつた。男の姿はただのスクリーンと化していた。彼女は炎を越えて背後にあるなにかへ移つていくような気がした。それから突然、足下から大地が去り、無限の青い闇へと真つ逆さまに落ちていった。惑星の軌道上を離れて外宇宙へと落ちていく感覚だつた。それから彼女の軌道が上向きになつた。まるで潜水夫が水面に戻るように、青が輝きを増し、夜明け前の薄いサファイア色になる。彼女は薔薇色の暁の雲を突き破り、椅子のなかで目覚めた。

ルーカスはシャツ姿で彼女の前に立つていた。窓のそとはまだ薄闇だつたが、緑のデスクライトが点けられていた。

「さて」と彼は言った。「無事帰還したわけだ。そう悪くなかつただろう」

空中に放り出されるような恐ろしい感覚をのぞけば、正直なところ悪かつたとは言えなかつた。ヴェロニカはそう認めた。

ルーカスは安堵の溜め息を漏らし、続いてあくびをし、手足を伸ばすと、こわばつた筋肉をほぐすかのように部屋を歩いていった。窓から冷たい風が忍びこみ、デスク上に置いてあつた文書の山を飛ばした。すべてルーカスの筆になる文書だつた。どこから取り出したのかしら、とヴェロニカは怪訝に思った。さつき目を閉じたとき、文書などなかつたのだ。冷たい外気がルーカスを震えさせていた。彼は床に落ちていたコートをつまみあげ、袖を通した。その様子を見ていたヴェロニカは、自分もまた骨の髄まで凍えていることに気づいた。まるで外宇宙の冷氣といおうか、痙攣のような悪寒が全身

を襲っていた。ルーカスは予期していたように微笑を浮かべ、デスク上に置いてあった小さな魔法瓶を手にした。蓋を開けると一条の湯気が立ちのぼった。

「寒いかい？」と彼は言った。「トランスの後はいつもそうなる。熱いコーヒーを飲みたまえ」そういって手近のカップに瓶の内容物を注いだ。

ヴェロニカはコーヒーを啜りながら、部屋がだんだん明るくなっていることに気がついた。一方、デスクライトは明度を失いつつある。窓から明るい光が入ってくる。つたのあいだから聞こえるさえずりは雀の起床を物語っている。ヴェロニカは驚愕し、どうして雀が夜の今頃騒いでいるのか、不思議に思った。ルーカスがデスクライトを消した。部屋が冷たい灰色の光に満ちていることがヴェロニカにもわかった。薄闇は次第に薄れつつあるのであって、暗くなっているのではない。彼女は突然悟った。自分の人生から七時間が、どういうわけかすっぽり欠落していたのだ。彼女は夕闇から払暁へと移行しており、その間自分の身になにが起きたのか、まったくわからなかった。ルーカスはとても疲れた様子だったが、まったく正常かつ実地的な態度だった。明らかに大量の文書は問題の七時間で作製されたものであろうが、その内容に関して彼女はまったく無知だった。

彼女はルーカスをじっと見つめた。睨みつけることで真実が引き出せるかのような凝視だった。

「あたしが――眠っているあいだになにが起きたのですか？」

「きみは出ていったんだ」

「出ていった。どういうことでしょう？」

「きみの肉体からだ。魂が肉体から出ていたのさ。ぼくがきみを押し出したわけだ」

「でも、なぜ。なんのために？」

「きみの体を電話として用いたかったからだよ。きみがきみの体のなかにいるとき、きみの精神の衝動がきみの声をコントロールし、きみはしゃべるわけだ。しかしきみが体から出てしまえば、他人の精神がきみの声をコントロールすることが可能となり、しゃべるのは他人となる。きみはドイツ語を知ってるかい？ 知らない？ どっこいきみは一晩中べらべらドイツ語をしゃべって、ぼくが知りたいことをたっぷり教えてくれたよ。きみが役に立つてのはこういうことさ、お嬢ちゃん。だから手元に置いておきたいわけだ。きみはどこに行ってもいいし、好きなだけ時間も与えよう。きみの感受性が損なわれない限りという条件つきでね。ただし、ここを去るのはだめだ」ルーカスは近づいてきて彼女の目をじっと覗きこんだ。「つまり、鎖の長さ分はどこに行ってもいいが、それより遠くには行けない。わかったかい？」

ヴェロニカはことの重大性がわからないまま彼の説明を聞いていた。彼女の理解力の限界をあまりに越えた話だったため、ほとんど意味すらとれなかったのだ。彼女にわかったことといえはルーカスが自分を奇妙な形で利用した。自分は道具としてかなり貴長視されている。自分は家畜のように飼われることになる。それも最高の待遇で。しかし、それは主人の目的のためなのだ。恐怖がヴェロニカを圧倒した。やり口すべてが人の道から外れている。ルーカスは自分を人間と見なさず、ただの道

具と見ているのだ。彼の目的は人間的なものではない。その動機は肉欲でも食欲でもなく、およそ地上の生活とは掛け離れた超・人間的あるいは外・人間的な目標である。彼がなにをやる気なのかかわらない。しかし自分の魂に危害を加えているのだと彼女は確信していた。陽気と愉快を装ってはいるが、彼は物理的でない方法で彼女に危害を加えているのであり、それは彼女にとっていかなる肉体的危害よりもはるかに危険であった。彼女は悪寒と恐怖に震えていた。肉体の恐怖ではなく、魂の恐怖だった。地上の人為の邪悪に対する恐怖ではなく、外宇宙の非人間的邪悪に対する恐怖である。そしてルーカス自身もあまり人間らしくなかった。デスクに腰掛け、足をぶらぶらさせながら紅茶茶碗からビールを飲んでいるルーカス―彼はまったく人間的であり、まったく普通の男に見えるが、そうではないとヴェロニカは知っていた。彼をじっと見つめ、謎を解こうと頑張ってみた。彼の人間でない部分はなんだろうか？ それは手であり、目であり、滑稽なことに、足であった。どうして彼の足が人間的でないのか、ヴェロニカにはわからなかった。しかしそう思ったのである。

ルーカスは顔を上げ、彼女と視線が合ったので、茶碗越しにほほ笑んだ。

「もうお休みなさい、ミス・メインウェアリング」とルーカス。

「眠くありません」とヴェロニカは答えた。

「そりやそうだ、忘れてた。きみはたっぷり七時間熟睡していたんだ。しかしきみはともかく、ぼくのほうは眠いわけだね、だからおやすみ。いや、おはようか、まあどっちでもいいが」

第四章

世俗的観点から見れば、自分の生活は安穩である。ヴェロニカはそう思っていた。タイプや帳簿であくせく苦勞することもない。一日中好きなだけ読書、裁縫、編み物、公園散歩、映画、疲れないかぎりなにをしてもいいのである。ルーカスは彼女が過勞気味になることだけを嫌っていた。

週に三、四夜、アシユロット経由で事務所への呼び出しがかかる。そこでルーカスが彼女の目の奥底を覗きこみ、魂を宇宙へ押し出し、残った体を利用するのである。彼女は夜明けにからっぽの肉体に戻り、おびえ、くらみ、こごえるのであった。しかし、最初のトランス時のようにまったく記憶が欠落することはなかった。意識の糸がかすかに残っているのである。ときには軌道を下っていく際にさまざまな顔がしかめつつらしているのを意識した。すると彼女はおびえた小鳥のように夜明けの雲をめざして上方に飛翔するのである。ある晩、決して忘れられないほど恐ろしい経験をした。しかもつつらが惑星軌道内まで彼女を追いかけたのだ。そのため彼女は予定よりずっと早く覚醒してしまい、恐怖のあまり悲鳴をあげてしまった。ふと気がつくとルーカスが驚きつつも不機嫌な様子で、彼女をしつかりと椅子に押さえつけていた。悪鬼のような顔のこと、自分を追ってきた鉤爪のことを話してみたが、ルーカスは肩をすぼめただけであり、感想も説明もしなかった。しかし彼女は内心、しばらく仕事はないだろうと感じていた。

ヴェロニカがこの奇妙な屋敷に来てからすでに三週間がたっていた。そして蒸し暑い八月は灼熱の九月に変わった。するとルーカスが鍵を手に彼女のもとにやってきた。

「もつと前に思いつくべきだったんだが、これは広場の庭園の鍵だ。ぼくが不在のときは、あそこで夕涼みするといい。ぼくはこれから週末のお遊びとしゃれるよ」そう付け加えるルーカスだった。

少したつて、ヴェロニカはライダー・スーツ姿のルーカスを見かけた。どうやら休日をおートバイですつ飛ばして過ごす気らしい。彼女は透き通った風鳴りと新鮮な大気を思い、うらやましかつた。ブルームズベリーはロンドンでも楽しい一面とはいえず、夏場ともなれば猫以外は誰もよりつかない耐え難い場所なのである。ヴェロニカは広場に行き、木陰に座った。庭園は思いもよらぬ天の恵みといえた。色あせたとはいえ、いまだ緑を残す樹木もあるし、ともかく四方が壁でないだけありがたいがたかつた。

一方ルーカスはロンドンの雑踏を抜け、北部を目指して突っ走っていた。彼もまた煉瓦と漆喰から解放されて自由を満喫していた。ひさしぶりにオートバイを外に出したのである。ヴェロニカ・メイソウエアリング相手に時間の大半を費やし、その結果として日常業務が押し寄せとなってしまい、結果として週末をつぶして帳尻を合わせなければならなかった。しかしそれだけの値打ちがあった。あれだけの霊媒にはそうそうお目にかかれない。打てば響くように情報が伝達されてくる。現在ルーカスは断片的情報を集積・総合しつつあった。彼は所属する《団》の高位階儀式をつなぎあわせていたのである。ルーカスは自分の個人用金庫の収蔵物を思い出しては一人笑いをしていた。

疾風が耳元でうなりをあげる。血が騒ぐ。男であり、若いからである。魔術研究に全身全霊を捧げているとはいえ、男にはちがいない。ときどき自問する。果たしてやるだけの価値があるのか。禁欲して修行を積み、他の男たちが人生の楽しみとしていた事を犠牲にしてまで。前後には他のオートバイが走っており、なかには女を後ろに乗せているやつもいる。女なんか乗せたことはない。たまたま緊急時に団員を乗せたことはあったが、女は一度もない。女は自分の人生に入ってきたことがない。自分の《団》は女の参入を認めていないし、記者時代につきあった女たちも、入団と同時にどこかに消えていた。

ルーカスは道路沿いの喫茶店で一服することにした。店の張り出し窓のところ若い男女が卵焼きとクレソンを食べながらおしゃべりに興じている。ルーカスは隠者ではなかった。その膚が物語るとおり、彼にはラテンの血が流れていて、気性は南方の血気に満ちている。彼はカップルを眺め、感じるところがあった。生意気な十代を過ぎて以来、はじめて彼は女というものを本気で考えはじめた。女を連れて外出するのは楽しいかもしれない。もちろん彼には仕事がある。仕事が全面的に優先されるべきなのだが、だからといって世の楽しみから隔離される必要があるのか？ ガレー船の奴隷よろしく毎日必死で働いて、ようやく力と独立を勝ち得たとき、もはや孤独な老いぼれに成り果てて、浮世のお楽しみとはさよならバイバイよーなが面白くというのだ？ ルーカスは思索をめぐらしながら紅茶を飲みおえた。新しい考えが心中に生じ、それを査定しているのである。いままで無視していた要素を生活に導入した場合、いかなる影響が生じるのであろうか？ 彼は偉大な《団》の修行者にして召し使いである。その《団》によって完璧な自己統御を仕込まれたため、女とそれにまつわるこ

たごたを人生から放逐するのになんの困難もなかった。全身全霊を研究に捧げていたから、女がいなくて寂しいとすら思わなかったし、自分の生活がどれほど常軌を逸しているかもわからなかった。しかし彼は自分の隠遁生活に雑念を生む要素を導入していた。最初に出会ったときのヴェロニカ・メイ・ウエアリングは、痩せ衰えたみすぼらしい代物で、およそ誘惑の対象ではなかった。実際の話、彼はヴェロニカを人間と見なしておらず、タイプライターや電話と同じように、目的を達するための道具と見ていた。しかしヴェロニカは運のないことに、屋敷に入ってきたときの状態のままではいられなかった。ルーカスは道具としての効率を確保するために、彼女にたつぷりと栄養を与えて世話をしってしまった。その結果は霊能以外の面に顕著に出ってしまったのである。荒れた肌はつややかになり、くぼんだ目は輝き、虚弱な体はみるみるうちに回復した。そして生気を取り戻すと、彼女の霊的な特質にも変化が生じたのである。彼女の生命は微妙な振動となって体外にまで溢れだし、雰囲気に敏感なルーカスはすぐにそれを感知したのである。

ヴェロニカがルーカスに対して抱く気持ちは、小鳥が猫に対して抱く気持ちと同じであったから、そこの女がやるような色仕掛けなど、彼女が行うはずもなかった。しかし彼女の背後にある民族の血の圧力が勝手に流れ出していた。そういつた民族の呼び声すべてを慎重に避けてきたルーカスは、気がつくひまもないまま、足元に潮が満ちていたことを知ったのであった。

ヴェロニカの存在が彼の自意識を強め、生命力の隆起を後押ししていたといえる。彼女がいると、人生が鮮烈な色彩を帯びているように思える。彼女は刺激であり、彼女がいないと人生は平板、無味乾燥、不毛に思われるのであった。

とはいえ、こういったことはまだルーカスの意識に突出しておらず、彼はただ重量級のオートバイを道路まで押していた。やがて立ち止まり、熟考を始めた。彼にわかつていたことは唯一、自分がおもしろそうなのかを気にしているということであり、またそれを手に入れるために骨を折る値打ちがあるか、考えていた。しかし《自然》とは老獪な女であり、自分のやりかたを遂行するにあたっては実に抜け目ない。彼は耳のなかに響く呼び声の意味すら悟ることがなかった。《自然》はその子供たちに対して、自分の意に反する行動を取らせはしないのである。

オカルト・パワーを得るには二つの方法がある。ひとつは自らを進化の先頭に置く方法である。ここではいまだ形相にとらわれていない力が横たわっており、それに回路を開けば、自由に力が流れこむのである。いまひとつは、民族の最後部にまで退く方法であり、ここでも吸収されていない力が手に入る。ルーカスは後者の方法を採用していた。彼は現代の人類の特質をすべて兼ね備えつつ、慎重に進化の最初期段階にまで逆行し、宇宙が虚無にして形相を得つつある時にまで遡上していた。ルーカスは人付き合いを好まず、孤独、ゆえに自由であったが、その彼が進化の流れに引き寄せられつつあったのだ。彼は民族を治めようと乗り出し、達成途上にあっただが、いまや髪を切られたサムソンであった。彼の力の源泉は同民族に対する義務からの完全な解放にあっただけであり、ゆえに躊躇も悔悟もなく、両者に対して義務感を負っている者に対しては、大いに有利な立場にいたのであった。

オートバイを道路に出し、ハンドルを南に向けた時点で、彼の知らないうちに、終わりが始まりつつあった。《自然》がルーカスを捕らえていたのである。

その日、少年時代を終えていらはじめてルーカスは自分の自我以外のことを考えていたのであつた―彼はヴェロニカに庭園の鍵を渡していた。かくして《自然》は彼を畏にかけていたのである。人が邪悪に対して「我が善なれ」と言うとき、二心は許されない。彼の神はあらゆる神のなかでもっとも嫉妬深いのであり、また暗黒への忠誠心からわずかでも心をそらせば、人間としての性が彼を裏切るであろう。宇宙の潮流に逆らつて泳ごうと望む者は、最強者中の最強者だけである。

陽はすでに沈み、ロンドンの煙突群を照らす光も薄れつつあつた。しかしヴェロニカはまだブルームズベリー・スクエアのみすばらしい庭園に座つていた。サリーの田舎を出て以来、木の下でのんびり座つたことはなかつた。あの頃のこととは、すでに別の存在と思えるほど遠い記憶となつていた。倦怠と無気力。陰鬱にして濃密な大気が彼女の周囲に停滞している。彼女の心はほとんど空白といえた。ルーカスの術のために心理機構が遅延気味になつていたからである。そして恐怖がいまだ根底に横たわつているものの、彼女はもはや逃走計画すら持つていなかった。自分でも、どうしようもない、完全にルーカスの手中にはまつたと思つていたからである。看守に一泡吹かせようという気すら起こらず、ただ漠然と、もっとやさしく取り扱つてもらえるかもしれない、はかない望みを抱くのみであつた。

鉄柵の背後に男がたたずんで、庭を囲む生け垣のわずかな隙間から覗いていた。しかし彼女は気づかなかつた。物思いに沈んでいると、ロンドンの広場は消えていき、彼女は再びサリー州の丘に戻つ

ていた。むかしよく見た白昼夢が小画像となって心に浮かんでいた。結局現れたことのない白馬の子様が、雲の宮殿から登場し、竜殺しの仕事にかかるのである（竜はルーカス）。それから彼女は鳩のように飛び去り、安樂に暮らしたとき。自分のために雲のなかの宮殿を構築する気は起きなかつた。彼女の疲れた小さな魂はサリーの丘だけで十分満足していた。蔓薔薇、梨の木、小さな庭に生える背の高い青豆の木、それに乳母兼家政婦の老女がお茶を入れてくれて、竈の前の敷物の上には喉を鳴らす猫。一方男は鉄柵越しに彼女をじっと眺めていた。

ヴェロニカは立ち上がり、放り出していた刺繍を拾いあげると、ゆっくりと枯れた芝生を歩んで門へ向かった。かび臭い夕暮れは蒸し暑い街の息切れと化しており、広場の隅にある街灯すら暗闇の安らぎを奪っているといえた。門に近づくと、彼女は二つの目を覗きこんでいる自分に気がついた。覚醒夢のまま歩いていた彼女にとつて、それはただ目という存在でしかなかった。いかなる顔からも独立した目。しかし声が放たれ、彼女の夢想は破られた。

「門はしまっているよ。外に出るなら、鍵を開けなければ」。それで彼女はルーカスと対面している自分に気がついた。

彼女は衝撃とともに我に帰った。鍵をさがすという行為が、ルーカスの目から視線をそらす言い訳になった。一旦目を合わせてしまうと、そらすのは難しいのである。彼女はいつもルーカスの瞳孔の収縮に見入ってしまうからだ。しかし有り難いことに、いまのところ、瞳孔はまったく正常だった。錆びついた鍵はなかなか開こうとしなかったが、ようやく彼女は舗道に立つ男のそばに出た。二人は

しやべることなく道路を横切った。ルーカスは沈黙考しているようだったが、きつと自分をくまなく観察しているのだとヴェロニカは考えていた。沈黙したまま彼は屋敷の玄関を開けて彼女をなかに通した。暗い広間に電灯がともった。ヴェロニカは彼を見ることなくまっすぐ階段に向かい、肩越しに神経質な小声でおやすみなさいと言ってみたが、返事はなかった。踊り場で振り返ってみると、彼がその場に立ったまま、こちらを見ているのがわかった。彼の顔も服も道端の埃のために灰色である。彼女はあわてて階段をあがり、二階の闇のなかに避難した。奇妙な視線から逃れられて、ありがたかった。どうして急に戻ってきたのかしら？ どうしてあんな目であたしを見るのかしら、まるではじめて見るみたいに？ どちらの問いにも答えが見つからずじまいだった。不確実は安心をもたらしものではなく、彼女が不安な眠りに落ちたのは灰色の夜明けも近いころであった。

日曜の朝、ヴェロニカが遅い朝食を食べ終えたとき、扉が開き、ルーカスが来訪を告げた。

「悪いことはいわない」と彼が言う。「なんでもいいからスカート風の汚れてもいいやつを着なさい。それでもって、良い子にしてたらちよつと遠足に連れてってあげよう」

ヴェロニカはまじまじと彼を見つめた。なんのことかわからなかった。彼が考えている新しい心靈実験はどんなものなのかしら？ ルーカスは楽しそうな微笑を浮かべて彼女を観察していた。

「ちよつと休日ってのもいいんじゃないかい？」とルーカス。「オートバイの後部座席に乗ったことはある？ 楽しいよ。二人でブライトンまで走って、お昼を食べて、コンサートを聞かなくたって、それで涼しい夕暮れのなかを戻ってくるって寸法だ」

ヴェロニカは返事もせず、ただ見つめつづけていた。彼の顔が曇った。

「ぼくがなにををすると思っっているんだ？ きみの喉を切るとか？」彼は鋭く尋ねてきた。

「いえ、そんなことは」とヴェロニカが返答した。「ただ、あたし——まったくわからなかったんです」

「なるほど、いまはわかったわけだ。さあ、準備をしておいで」そう言うのと彼は踵を返して部屋を出ていった。

ルーカスはなにかまずいという気分だった。こんなふうには第一歩を踏み出すはずじゃなかった。遠足にも始まり方というものがあるはずだ。そして十分後、ヴェロニカが鉛のような足取りで、いやいやながら階段を降りてきたとき、彼の気分はいやます落ち込んだ。彼女は黙りこくったまま、彼の指示するままにオートバイの後部に我が身をとまらせた。腰のベルトをしつかり握るように何度もいわれた。

「しつかりつかまってないと、最初のコーナーで振り落とされるぞ」と怒りっぽく言い放ち、マシンを始動させると、命令の意味を悟らせるべく派手にエンジンを吹かした。ヴェロニカは必死で彼にしがみつき、目を閉じた。二人は幹線道路のまっただなかに飛び出していった。

ロンドンを背後に残し、海岸線を目指して南に疾走するまで沈黙は続いた。

「気分はどうだい？」ルーカスは肩越しに叫んだが、ヴェロニカは耳元でなる風のために彼の声が聞こえなかった。しかし彼は沈黙も故意の所業と考えた。そこで下り坂でマシンを吹かし、排気音も高らかにすつ飛んでいった。永劫の彼方への道行きのようだった。

ルーカスは坂が終わるとマシンを止め、シートから降りると、道の真ん中に立ち、ヴェロニカと向き合った。彼の目は燃えていた。

「一日中そんな調子でいくつもりか？」彼は言った。

ヴェロニカは見つめかえした。これはかつて出会ったことのないルーカスであり、まったく怖くないルーカスだった。このルーカスは人間なのだ。

「おっしゃることがわかりません」

「つまり、一日中すねてるつもりなのか？」

ヴェロニカは二人の頭上にある木の枝を見上げ、その向こうにある青空を見やった。彼女には希望がなく、最後の避難所もなく、そして奇妙なことに、恐怖もまたなくなっていたのである。

「あなたがなにをなさろうと気にしません」と彼女は言った。「なんでもお好きになさってください。あたしは殺されても、もうどうでもいいんです」

「ぼくが嫌いか？」

「ええ」

「なぜ？」

「あたしになさっていることのためです。口でうまくいえないけれど、あたしの言いたいことはよくおわかりでしょう」

「ぼくがなにをしてるといふんだ？」

「わかりません。あたしにはわからない。なにをなさってらっしゃるのか。だけど、まったくまちがったことです。あなたには、そんなことをする権利はないはずですよ」

「だが、きみはぼくの動機を知らない。なぜやってるのか」

彼女は驚きながら彼を見ていた。ルーカスからこんな口調を聞いたことがなかった。

「いいかい、ヴェロニカ。ぼくはでかいことを追っかけている。あんまりでかいんで、きみにはわからないんだ。それはぼくにとつてすべてでね、しかもこれしか方法がない。ぼくと一緒に来てほしい。そして見届けてごらん。後悔するようなことは絶対はない」

これではまったく立場が反対ではないか。いと高きルーカス、専制君主たるルーカスが自分の助力を求めており、それを差し出すも出さないもこちらの思うままなのだ！ どうしてあたしの頭はこうものんびりしているのだろう。答えることができない。

そのときルーカスが再び口を開いた。「聞いてくれ、ぼくがなにを追っているか教えよう。ぼくは知識を追っているんだよ、ヴェロニカ。世界を変えることができる知識なんだ。その知識さえ手に入れば、ぼくは世界中を武装解除することもできるし、社会改革のための立法府を設立することもだってできる。なんだってできるんだ。すでに少しやってみただよーそしたら、この知識を保持している馬鹿どもが、それを利用しようともせず、おまけにぼくに与えようともしない。だから盗んでいるんだよ、ヴェロニカ。ぼくなら有効利用できるし、連中にはできないからだ」

「なにをおっしゃってるのか、あたしにはわかりません」とヴェロニカは言った。「それに、あなたが欲しがってらっしゃるものがなんなのかわかりません。だけど、その人たちがあなたにそれを与えないというのは、まったく正しいと思います。あたしだって、あなたにはなににも託そうとはしないでしよう」

ルーカスは口をあんぐりあけた。彼はたやすく我を忘れるような性格ではなかったのだが、この逆襲は、いつもネズミのようにおろおろしているヴェロニカの口から発された分だけ、息を呑むほどのものであった。

「どういうことだ？ どうしてぼくを信用しない？ きみがそんなことを言うなんて、いったいぼくがなにをしたというんだ？」

「あたしにないをなさってるのか、あたしにはわかりません。でも、それが害を与えるものであると、あなたもあたしもわかってはいるはず。でも、あなたがなにをなさってらっしゃるのか、あたしがうまく言葉でいえないから、あたしがなにも疑ってはいないと思ってるのじゃないでしょうか」

「どういうことだ？ どれくらい知ってるんだ？」

「なにも知りません。知ってるつもりもしません。ただ、あなたがあたしたちとは違うと感ずるんです」

「知らないうちに多くの真実が語られるものだ。じゃあ、ぼくがきみたちと違うとすれば、ぼくはなにもものなんだ？」

「わかりません。あなたが違うとわかっているだけです。誰かほかの人に“あなたはあたしを傷つけている”と言えば、その人はやめるでしょう。でも、あなたに言ってみても、あなたはきつと“やかましい”というだけ。あなたはあたしたちと感じ方が違うんです。あなたは別の道に進んでいると思います」

ルーカスはうつろな目で遠い森の陰を見やっていた。長い沈黙があった。

「そう、まさにそのとおり。ぼくは別の道を進んでいて、べらぼうに孤独なんだ。これまで考えたこともなかった。いつだって、それが問題だった。ぼくがやるうとしていることを理解する人間は一人もいない。話し相手すらいない。この先もまったく孤独だろう。でも、いくら左手道を歩んでいるとはいえ、仲間くらいは欲しいものさ。だから、仲間を作ってやる！」彼はヴェロニカの腕をつかんだ。「きみも来るんだ、ヴェロニカ。きみには可能性がある。きみの本質は原始的といつてもいいくらいに素朴だ。きみを牧神のもとまで押し戻してやるう。きみを《緑の光》に乗せてやる。薄い自然の緑色をしたきみと、暗いオカルトの緑のぼくなら、一人のあいだで完璧な《緑の光》を作り出せる。ヴェロニカ、来てくれるかい？ 来れば力が、生命が手に入る。文明にがんじがらめになった哀れな存在じゃなく、自由きままに、異教徒のように生きるんだ！」

ルーカスの顔は輝き、広がった瞳孔はきらめく黒の深淵と化した。浅黒い皮膚は赤らんだ。ヴェロニカは彼の目を見つめかえし、いつものように魅了された。しかし今回は恐怖感覚がなく、ただ力の奔流を感じる。それが彼女のなかの生命を躍動させ、応答するように彼のほうに流れ出していくのであった。彼がしゃべるにつれ、緑の森の薄闇が黄金の光線に照射されていくようだった。もはや薄い影のような緑はなく、輝く緑があった。かすかな遠い笛の音が彼女の耳に聞こえてきた。牧神の名前によって引き起こされたイメージのために、そう思うのだろうか？ なにか、人間でない裸体で、しかしこれ以上ないというほど生命に満ち溢れたものが、彼女の背後の藪から藪へすり抜けながら、だんだん近づいてきた。小さな笛の音のはつきり聞こえてきた。するどい蹄の音が落ち葉に鳴り、緑の光線とともに光がきらめいた。オパールの中かの炎みたいだった。なにかが肘のすぐ後ろまで来てい

て、彼女に呼びかけている。呼びかけ、呼びかけて、その瞬間にも彼女はついていってしまっただけだ。妖精にさらわれ、緑の森に消え、二度と再び戻らないかもしれない。揺り籠を見張っていないと妖精が赤子を盗んでしまうという昔話を乳母から聞かされていた。だから赤子に洗礼を施す必要がある。そうすれば妖精には盗めない。しかしあたしはすでに洗礼を施されていたから、妖精は連れていけないはずだ。スカートをひっぱっている小さな牧神みたいなものはなんだろう？ 彼らは仲間じゃない。なんの関係もない。あたしは洗礼を受けている。お祈りも教わった。竈の前の敷物にひざまづいて、お祈りを唱えている自分の姿が目には浮かぶ。最初に習ったお祈りならまだ覚えている。こんなふうに。「いつくしみぶかきイエスさま、おさなごをおまもりください」

ヴェロニカは水面に戻った水泳選手のように一息あえいだ。すると自分が道路の真ん中に立っていることに気づいた。足の下には堅固なほこりっぽい道路があり、頭上には木々が聳え、一陣の秋風とともに葉を散らしていた。眼前には男が立っていた。その顔色は奇妙な灰色であり、額から汗が吹き出していた。

「これを持って」と彼は言い、巨大なオートバイのハンドルを彼女の手のなかに押しつけた。それから彼はよろめきながら道路脇に移動し、座り込むと、両手で顔を覆った。

ヴェロニカは不格好なマシンを扱いかね、その場に立ちつくしていた。ルーカスの身になにが起きたのだろうかという怪訝に思っていた。彼はなにか手ひどい衝撃を被ったかのように見えたからだ。彼女自

身は不思議なほど落ち着いていた。精神はかつてなかったほど明晰だった。ルーカスが作業を始めて以来空白になっていた精神機能が、彼女に戻ってきたみたいだった。

ほどなく彼は頭をもたげ、彼女を見た。

「きみが保護下にあるとは知らなかった」と彼は言った。「きみはこれまでその片鱗すら見せたことがなかった」

彼は立ち上がり、どこかおぼつかない足取りで近づくと、彼女の手からオートバイを受け取り、スタンドを立てた。

「こつちにきて座りたまえ」と彼は言い、彼女を道路脇の芝生の上に連れていった。「じきに出発するから」

長いあいだ二人は黙りこくっていた。それからルーカスが彼女のほうを向かずに口を開いた。「きみがぼくになにをしたか、知ってるか？」

ヴェロニカは首を横に振った。

「そうか、なにも知らないんだな、そうだろう？　だが、ぼくは見抜いたよ。きみは、きみが想像する以上にいろんなことを知っているんだ」

再び沈黙が二人のあいだに訪れた。

それからルーカスが再度口を開いたが、やはり彼女のほうを見てはいなかった。

「ひとつお話しをしてあげよう。ローマに一人の男がいた。古代ローマだ。その男は少年時代、城壁の外側にある叔父の小屋に住んでいた。孤児だったからだ。彼は従妹と婚約していた。ずいぶんと年下の少女だった。彼の人生にはかなり暗い部分があったけれど、彼はいつも城壁の外の小屋に戻ってきた。少女が大好きだったからだ。少女の年ではわからないほど愛していた。当時はとても若いときに結婚していたからね。彼は《密儀》の修行者だった。そしてある日、彼はエレウシスまで秘儀を授かりに行った。帰ったあかつきには結婚しようと思っていた。帰ってみると、少女はキリスト教徒になっていて、新しい教えを受けていたため、彼を悪人を見なすようになり、結婚しようとしなかった。

「そういうわけで、彼にとって人生最高のものが失われてしまった。いわば彼をつなぎとめていた錨がなくなったのだ。そして彼は《密儀》の暗い側に顔を向けてしまった。彼は《邪悪》に対して“我が善たれ”と言ってしまった、邪悪はその言葉通りに彼をとらえてしまった」

再び沈黙。今度はヴェロニカが口を開いた。

「少女はどうなったの？」

「当時は尼僧というものがなかった。でなければ、きっと尼僧になっていたことだろう。しかし、彼女は貧しいキリスト教徒たちの面倒を見てやり、多くの魂を救った。しかし彼の魂は救えなかった。失ってしまったのだ。きみはぼくに借りがあるんだよ、ヴェロニカ」

第五章

しばらくたつて、ルーカスはようやく身動きできるくらいに回復した。しかし神経はまだおぼつかない様子であった。いつもよりずっと慎重に運転していた。そういうわけで、ルーカスとヴェロニカがブライトンに到着したときは予定より遅れていた。昼食を食べおえると、埠頭に駆け込んで船上コンサートにぎりぎり間に合うというタイミングだった。

二人が座った場所から水平線に数隻の汽船が見えた。混雑では世界一の英仏海峡を急がしく航行している。ルーカスは音楽などほとんど耳に入らず、うつろな眼で彼方にかすむ大船団の影を見やっていた。横に座る娘のことは、物理的実体としては忘れていた。彼はヴェロニカを単なる魂として捉えていた。彼女は魂であり、時を越え、自ら選んだなんらかの目的地に向かって航海している。彼女はある道を歩んでいて、彼の干渉にもかかわらずその道筋から外れることがなかった。彼女は自分の民族の道を歩んでいた。同胞の宗教信条という柵で仕切られ、幾世代にもわたって踏み締められたその道を思うとき、彼の頭には小峡谷を歩む羊の群れという比喻がいつも浮かんだ。毛だらけの背中にも鈍な眼、辛抱強く進む小さな蹄が、パタ、パタ、パタと荒れた道を進み、行き着く果ては屠殺小屋なのだ。彼にしてみれば、自分はイシユマエルの山羊であり、《闇の主人》とともに山々を自由に駆け回っているのである。しかし、眼下の群れから目をつけたかわいい雌羊をかつさらおうとしたら、巨大な《振れ杖》に張り倒されたのであった。

干渉してきたあの力はなんなのか？ 時に応じて用いられる《団》の懲罰の光のことはよく知っていたが、あれは異なる種類の力であり、彼の知らない性質のものであった。その一撃のために彼は神経を揺さぶられ、いまとなつては自分の歩み道すらおぼつかず、目標に対してすら疑念を抱きかねなかった。隣に座る娘をちらりと見る。英国娘によく見られるやさしい丸顔だが、そこに浮かんでいる表情はありふれたものではない。完璧な安らぎがもたらす静けさである。顔自体は深い眠りから覚めたばかりの顔であった。ここ数週間いつも浮かんでいた緊張したやつれ顔は払拭されており、かわりに大いなる安息があった。ルーカスはその表情をじつと眺め、秘密を探り出そうとした。どれほど尋問したところでヴェロニカは答えを教えてくれないだろう。教えたくないのではなく、教えられないのだ。彼女は思うところを言葉にするのが苦手である。感覚派であり、理屈派ではないのだ。

ルーカスは視線を外し、再び考えこんだ。彼女は理想的な道具であり、失うにはあまりに惜しい。しかし彼女を取り扱うにあたって支障が生じてしまった。この女は思いのままになると信じていたら、突如、不可視の力の怒濤が押し寄せてきて、ルーカスはボクシングの選手がみぞおちに一発食らったようにKOされてしまったのである。

それがどういう意味か、彼はよくわかっていた。あらゆるオカルトの修行者と同様、彼も転生論者であった。オカルトの道を志す者は遅かれ早かれどこかの偉大なるオカルト結社に参入し、何度生まれ変わっても常にその結社のもとに戻るのである。なぜならば“ひとたび参入者となれば、つねに参入者”であるからだ。そしてルーカスが結社の保有する力を利用できるように、ヴェロニカもまた危機一髪の際に自分を守る力を発見したのである。しかもそれは彼の知らない力であった。彼は心を過

去に飛ばし、光明の手掛かりを得ようと試みた。ある程度の秘儀を授かったオカルティストならば誰でも前世を想起できる。ルーカスもまた前世を思い出すことができた。それは一般人が幼少期を思い出すようなもので、遠くかすんだ記憶になってしまいが、しかし十分に現実的なものである。しかし子供と同様、はるか昔に出会った人々を思い出すことはできるが、年月とともに変貌を遂げたその人々が再登場した場合、いつも識別できるとはかぎらないのであった。

危険に満ちた冒険のための道具として、部屋一杯の女たちのなかから、よりよって彼女を選んできましたのだ。理性的判断以上のなにかが働いていたにちがいない。それを悟れなかった自分が腹立たしいルーカスであった。

彼は以前にも記憶のなかでローマ時代の前世を繰り返して生きてきた。白壁の小屋を見て、そこに住むやさしい少女と語らった。さらに記憶の糸をたぐれば、二人は司祭と女司祭として生を送っており、それぞれさまざまな土地や時代の密儀にかかわり、その源は古代アトランティスの太陽崇拜に見られる知識のおぼろな夜明けなのである。明らかに二人を結ぶ絆は時代をへたものであり、無視されるべきものではない。この原因から生じて現世で花開く結果は一般人が夢想だにしないものとなるであろう。この力の価値評価が可能であれば、現状認識も明確になるし、問題解決の糸口もつかめるのである。しかし自分が所持していた知識では、因縁に巻き込まれるのを防げなかった。ルーカスはそれが腹立たしかった。彼はもつとも危険にして重要な実験の途上にいるのだが、忘却の彼方にあったローマ時代の夏の力が蘇生してきて、すべてをややこしくしようとしているのである。

ルーカスは精神を遠い過去から最近にまで移行させ、転生中に起きた事件を見ようと躍起になっていた。それがわかれば現世での傾向にも推測がつくからだ。当初彼はヴェロニカのなかに繰り返し接触してきた魂の存在を認識していなかった。その魂には魁偉の要素があったはずなのだが、ヴェロニカにはまったく偉大なところがなく、彼女は子供以外のなにもでもなかった。

ルーカスは椅子のなかでいらついていた。もし彼女が過去に協同作業を行った女であるとするれば、計画はどれほど異なったものになっただろうか。しかしローマ時代の転生でどこか齟齬が生じてしまい、その手掛かりもつかめないため、彼は当惑していた。

彼はヴェロニカの腕に触れた。

「もう音楽は十分だろう。お茶を飲んでから家に帰ろう」

彼女は頷いた。いつものように、これといった反応のない受動的な同意であった。それから二人は、というよりルーカスがヴェロニカはただついてくるだけである――喫茶店を探した。こういう気分よきのヴェロニカほどルーカスをいらつかせるものはなかった。もつとしゃっきりさせようと怒鳴ってみても、彼女はもつと落ち込むだけである。だからといって、励ますのはいよいよ不可能だった。

しかしヴェロニカの心は彼が思うほど受動的ではなかった。彼女は道路脇での出来事について熟考していた。彼がしてくれた話はささいなものであったが、それなりに深い印象を残しており、そこから浮かんだイメージがずっと心につきまといついたのである。白壁の小屋、亜熱帯植物の庭、井戸汲

みに使役される牛、葡萄畑を耕す奴隷たち―彼女の心中にそういった映像が、まるでサリー州の田舎家を見るように、細部まで生き生きと映し出されていた。もちろん少女が恋人を拒んだのは当然である。ほかにしようがないではないか？ 二人の人生は異なる方向に進んでいて、ともに歩むのは不可能だった。しかし少女は彼を忘れはしなかった―ヴェロニカはそう確信していた。そう、彼女は思い出す。都に入れてもらえない賤民のあいだで彼女が奉仕していたとき、黒髪のローマの貴族だった彼。人の世の単位ではわずか一マイルしか離れていないのに、異なる道に向かっていたために、決して会うことのなかった二人。

彼を避けることで誘惑に対処した彼女は正しかったのだろうか？ 当時の義人の全般的風潮は、罪深い俗世を離れて汚濁にまみれることを避けるというものであったが、そのために世界はさらに極端な邪悪になりがちだったのではないか？ 生まれてはじめてヴェロニカは、感じるのではなく、考えていた。その不慣れな経験は驚きをもたらした。彼女はルーカスのほうを向いた。彼の実務的な落ち着いた態度を見れば自分も落ち着くと思っただ。しかし、目を向けてみると、彼の目もこちらを向いているのがわかった。彼女は心に芽生えていた疑問をすつと口に出してしまった。

「彼の名前はなんていったの？」

すると回答も同じようにすつと彼の口を出た。

「ジュステイニアヌス。父親が仕えていた将軍にちなんでつけられた名前だ」

「彼女は？」

「ヴェロニカ。きみと同じだ」（どうして気付かなかったんだ、馬鹿）彼は息の下でつぶやいた。

「二人は―それからどうなりました？」

「彼は当代一流の黒魔術師たちとともに研鑽を積み、肉体がだめになると、かなり早くだめになったんだが、とにかく別の肉体に移って修行を続けた。その後、彼は魔女狩り華やかなりしころのアイニヨンに転生し、同地でその他大勢とともに広場で火あぶりにされた」

「それは彼女が尼僧だったころの話ですか？」

「どうして彼女が尼僧だったと知ってる？」

「そうおっしゃったでしょう？」

「そんなことは一言も言っていない。庭で別れて以来、彼女の消息はまったくわからないんだ」

「ごめんなさい。彼女が尼僧になったと思っただんです。でも、彼はどうなったのですか？」

「魔女狩りで火あぶりになったと言っただろう」

ルーカスは知りたいたいことを知ってしまうと、巧妙に話題を別方向に転換していった。

その日以来、ルーカスとヴェロニカの関係は大いに変化した。どちらの身にも、いまだ昔日の力が蘇ったわけではなかったが、力は彼らの睡眠中に動くようになったのである。ヴェロニカは気がついてみると、直感的にルーカスの目的と動機を理解するようになっていた。もはや彼は理解の範疇をまったく越えた存在ではなくなった。そして敵意が弱まることはなかったが、彼に対する恐怖はおおよそ消えてしまい、理解から生まれた共感が、彼女自身気づかないうちに心の奥底でかすかに広がりつつあった。

ルーカスのほうは事態の推移を懸念をもって観察していた。過去の因縁が活性化しようとしているのであるが、それがいつどのように具体化するのか、彼にはわからなかった。そして彼は現在邪魔をされては困る一連の作業に従事しているのである。調査を続行し、因縁が機能し始める前にトランス作業を終えるしかなかった。さもないとどんな面倒がからんでくるかわかったものではない。さらに、彼は道路上でヴェロニカのために干渉していきたくわかっていなかった。

ゆえに彼はトランス作業を押し進め、四夜連続ヴェロニカを星幽界旅行に向かわせた。以前ならこれほど危険な真似を彼女に強いることはなかったのだが、因縁が動き出したとあっては待ったなしである。彼女には肉体から出ていってもらう。それで帰ってこなかったなら、それはそれで結構、ともあれ今回の転生では昔のごたごたから自由の身になれるのである。

連続トランス作業は当然ヴェロニカの身に影響を与えずにはいらなかった。識閥を越えて入り込んでいく不思議な世界に彼女はだんだん慣れていき、その世界の記憶が通常意識と連結するようになっていた。

道路上の経験以来、彼女は恐れおのきながら体外に出ることはまったくなかった。なぜならば、入り口をちよつと行つたところに、いつもある《存在》が彼女を迎えに来ていて、帰還するまで一緒にいてくれるからである。その《存在》の正体がなんなのか、彼女はほとんどわからなかった。しかし彼女が《存在》に対して抱く気持ちは、生徒が怖いけれど大好きな先生に対して抱く気持ちと同じだった。

不可視の領域へ最初に遠征したときの記憶はまったくなかったが、その後の遠征の記憶は回を重ねるごとにはつきりしたものになっていった。最初は断片でしかなかった記憶が、次第に組み合わされはじめ、ついには全体像が明らかになり出したのである。自分が偉大な儀式の模様を耳にしていることはわかっていたが、その儀式は彼女が知るいかなる教会儀式とも大いに異なつたものであった。

遠征は毎回異なるものであったが、すべてに共通する一種のパターンがあつた。まず、青黒い空間を通過したあと、遠くで光がぼうつと照り映えるのが見える。彼女の魂はその方角に向かうようセツトされているらしく、ゆつくりと一定の速度で近づいていく。するとその光がある種の柵あるいは囲いのなかから発しているのがわかる。囲いは障壁によって守られている。しかしこんな障壁は現実世界ではお目にかかれない。この壁は固定されたものではなく、回転しているのである。どちらかとい

えば帯鋸に似ていて、高速回転する表面が光をぎらぎら反射している。あの回転する圏内に魂を投射するなど無理だと彼女は思っていたが、しばしば痙攣的な力が彼女の足元で生じ、てこ運動というか棒高跳びの要領で障壁を越えて内側に落ちるのである。そこでは彼女は夢を見ているように漂っている自分を知る。かすかな声のはるかかなたから耳元に響く。それから妙なことが起きる。まるで魂とルーカスのもとに残した体が長い銀の紐でつながっているみたいであり、その紐を通して魂が得た印象が伝達されていくのである。彼女の魂が聞いた言葉は遠くにある喉の声帯を動かし、儀式の主要執行者の所作は抜け殻の肉体によって模倣されるのであった。

しかし彼女の夢の精神にも変化が生じるようになっていた。経験を積むことで事物の秘められた側面が次第に身近に感じられるようになり、また道路上の出来事や《存在》の到来により、徐々に体外に出ても独立独行できるようになっていた。彼女はもはや宇宙の風に翻弄される木の葉ではなく、自分で飛行できる力を備えはじめた。すると当然好奇心がわき、眼前に繰り広げられる不可思議な光景に意識を集中するようになる。そのため時がたつにつれ、彼女の人格は障壁をよじのぼっていく自分の姿を追うようになり、ついには連続トランス作業の第五夜目に、夢の光景が突如彼女の眼前で具体化した。彼女は広い板石敷きの舗道の上において、周囲には頭巾で顔を隠した人物たちがいる。そして彼女は祭壇の背後にしつらえられた台座にすわる人物の目をまっすぐ覗きこんでしまった。両者ともこの遭遇に驚愕したまま、しばらく互いに目を合わせていたが、頭巾姿の人物がついに台座から立ち上がり、彼女を指さした。すると奇妙な振動値を有する《言葉》が儀式全体に響きわたった。すぐに一千の地震の如き衝突音が轟いた。雷鳴、暴風、稲妻が彼女に焦点を合わせて解放された。暗黒の津

波めいたものが彼女をとらえ、濁流に浮かぶ藁のように流し去った。暗闇に溺れ、あえぎつつ、そばについていてくれる《存在》に目を、否、心を向ける。すると直ちに彼女は抱きとめられたように感じた。抱き上げられ、大渦巻きから連れ出され、土手の上に引き上げられた。彼女の耳のなかで声が響いていた。

「戻れ、わが娘よ、われら汝の後にて門を閉じん。ふたたび召喚するまで訪れるべからず」

彼女の魂は下へ下へと急降下を続け、激突一閃、一気に肉体へ飛び込み、意識を回復した。彼女の背後でギロチンと落とし門の中間のようなものがガチャンと降りてきた。そして巨大な《手》がそれに《十字》を記したのを見た、というよりも感じた。

ヴェロニカは床に仰向けになっていて、ルーカスが彼女の胸に膝を置き、両手首をつかんでいた。

「やれやれ、きみはなんて力なんだ！　もう押さえきれないかと思った。なにが起きたんだ？」とルーカス。

ヴェロニカは青じみのできた手首を気にしてから、ばらばらになった理性をかき集め、覚えているかぎりのことをルーカスに話した。そうするうちに、彼の顔が灰色になっていくのがわかった。

「きみを睨んだという男、きみの顔を覚えていると思うか？」

「しつかり睨んでいたから、きつと」とヴェロニカ。

「となれば、きみはすぐさまずらかるしかない。アシユロットたちがあれこれしゃべるかどうかは運次第だ」

ルーカスは口をつぐみ、それから自問自答するように続けた。

「さて彼女をどうするか？ これっきり手放すわけにもいかない。それはできない」。沈黙。「そうだ。將軍の釣り小屋があった。あそこに置こう。番人が面倒を見てくれる。まったく口がきけないしな。言われた通りに働き、質問なし。好都合。ぼくが將軍のために動いているのは知ってるし。金をやれば静かにしてるさ。いま何時だ？ 十二時十五分。もう汽車はない。明日は日曜か、くそ！ とすれば、あの僻地行きは汽車はないわけだ。自前で行くしかない。百二十マイルあるな。明日の集会は十時からか。出ないわけにはいかん」彼は黙想から覚めた。部屋の隅の戸棚に行き、下のほうの棚をあさる。埃だらけの雑嚢を取り出した。

「ほらヴェロニカ、これに詰め込めるだけ詰め込むんだ。寝巻と櫛と洗面道具、数日やつてられるくらいのを。ほかのものは後で送ってやる。さあ急げ！」

「でもミスター・ルーカス、どういうことですか？ あたしをどうなさるおつもり？」

「問答無用、急げ！」と言うや彼女の肩をつかんで部屋から放り出す。「一番あったかいコートを着てくるんだぞ」とうしろから怒鳴った。

彼の慌てぶりが伝染したのか、彼女は命令を遂行するのにたいした時間をかけなかった。しかし彼はすでにライダー・スーツ姿に変身していて、広間でもどかしそうに待っていた。

「それが一番分厚いのか？」彼はヴェロニカが着てきた薄いうわっぱりを見るや驚いて叫んだ。「ほら、これを着て」と言い、広間のスタンドに常時掛けてあるよれよれのトレンチコートをつかみ、彼女にかぶせて子供相手のようにボタンをかけてやった。それは男のコートならではの汚れたおした代物であり、パイプタバコの香りがしみこんでいる。ヴェロニカは踵から目のあたりまですっぱり覆われてしまい、妙な話だが、ルーカスの人格に包みこまれてしまったような気がした。

彼女は黙ったままルーカスのあとについて蒸し暑いロンドンの夜へと出ていった。コートが肩にずしりと重い。二人は早足で歩き、ヴェロニカはコートの重さで半分息が詰まりそうだった。オートバイを格納している小屋に着くと、錆びついた扉を開け、マシンを外に出す。始動時の騒音が周囲に反響するので、ルーカスは荒々しく罵る。それからヴェロニカに後ろに乗れと命ずるや、彼女がバランスをとるひまもないほどの勢いで庭から飛び出していった。深夜の街路の閑散を切り裂くように疾走していくと、驚くべき短時間でヴェロニカは顔に新鮮な空気を感ずるようになり、ほどなく左手にハロー丘陵がほの見えた。

煉瓦だらけの街を抜けると風が涼やかに吹きはじめ、丘陵地帯に入れば風はナイフも同然であった。

二人はひたすら爆走していく。ヴェロニカの足首のあたりでフルスロットルのエグゾーストが唸りあげる。舗装路の段差がマシンのサスを歪ませるとヴェロニカの魂は凍えた。しだいに暗黒が薄れは

じめ、はるか前方に巨大な影が現れる。ルーカスはヘッドライトを消し、なにか奇怪な忌まわしさをたたえる陰鬱な薄闇を飛ばしていった。

太陽が昇ってしまうと、二人は霧の毛布をかけた谷を見下ろす丘の頂にいた。無鉄砲な爆走を開始して以来、はじめてルーカスが沈黙を破った。

「あれがベツカリングだ」と彼は言い、谷底めがけて森を下っていった。

二人はまだ目覚めていない寒村を通過し、浅い川にかかる眼鏡橋を渡った。それから轍だけの脇道に曲がりこみ、川沿いの土手道をくねくね一マイルほど進んでいった。手入れされていない森が生い茂り、道のあちこちで土手が崩れており、危険きわまりない。交通量は無に等しいのである。すぐに道はただの馬車道となり、地面を覆うすべりやすい草のため、タイヤはグリップを失いがちであった。

しかし不意に道がひらけ、左手に煉瓦の柱が一組、それに付属した錆びだらけの鉄扉が現れた。

オートバイはぎっしりと苔に覆われた緑の天鵞絨のような車寄せを進んでいった。一軒の廃屋らしき建物の前でオートバイは停止した。ようやくヴェロニカはこわばった手足を伸ばすことを許された。ルーカスは扉をドンドン叩いていた。

呼び鈴は見事なまでに錆びついていて機能を果たさなかった。そこでルーカスはノックカーを爆撃のようにガンガン鳴らしてみたが、ただ周囲に反響するのみである。彼はヴェロニカをオートバイの横に残したまま、番人を求めて草ぼうぼうの灌木をかきわけていった。

およそ三十分後。ヴェロニカは疲れはて、おびえ、周囲の湿気と老朽に言い知れぬ恐怖を覚えていた。物音ひとつしなかつた家のなかでなにか近づいてくる音が聞こえた。次に門をいじるすさまじい音が響き、扉が開くとルーカスの顔が見えた。彼の肩越しに老婆の顔も覗いていた。

革製のレーシング・ヘルメットを着用し、大理石の門柱のあいだに立っているので、ルーカスはエジプトの司祭そのものに見える。彼のそばでちぢこまる人物は魔法の技で呼び出した奇怪な使い魔のようである。

信じられないほど汚れたピンクのネルの寝巻の上に、慌ててはおつたと見える泥だらけの深紅のガウン―かくも見苦しい風体となった理由は、老婆をまどろみから覚ましたものは、寝室の窓から投げ込まれた煉瓦であったからだ。

老婆は額にかかる灰色の前髪越しにヴェロニカを盗み見し、彼女を“嬢や”と呼ぶと、なにやぶつぶつ言いはじめた。それは明らかに小屋と庭の現状に関する謝罪であつたらしいが、なにせ齒のない老婆の繰り言であるから、一言も判別できなかつた。

ルーカスは老婆を脇に押しやることで歓迎演説を終わらせ、もう失神寸前というヴェロニカを抱きかかえて家に入った。

「おいで」と彼は言う。「こんな廃屋にもまともな部屋がひとつある。火をたけば少しは元気が出るだろう」

しりごみする娘をせきたてて長い通路を歩いていくと、撞球室とおぼしき部屋に出た。もつとも、撞球台はなかった。敷物が磨きあげられた床を覆っており、背の低い書棚が四面の壁下半分を囲んでいる。天井付近にはニスに固められた巨大な剥製魚が闖入者を睨みつけている。銃架に収まる猟銃もある。各種釣り道具が部屋のここかしこに飾ってあった。

ヴェロニカを巨大な革張肘掛け椅子に座らせると、ルーカスは雨戸を開いて朝方の陽光を室内に入れた。一方老婆は年に似合わずネズミのようにちよこまか動き、柴の束を持ってくると、巨大な暖炉に火をおこした。するとこの場所はとうてい陰鬱とはいえなくなった。ヴィクトリア朝風の象嵌を施された楕円形のマホガニー製テーブルが窓辺にあり、それをルーカスと老婆が暖炉のそばまで運んできた。あつという間に紅茶とベーコン・エッグがテーブル上に並べられた。そしてこの陰鬱な家に入ってかほとんど互いに口をきかなかった二人は、ここに至り歓迎食事会の席だったのである。

両者は通常の食事時の会話しか交わさなかった。本題はルーカスが食後の一服としてパイプに火を入れたときに始まった。

「よく聞いてくれ、ヴェロニカ」と彼は言った。「目を開けていられるなら、ぼくの話を最後まで聞いたほうがいい。大事な話だ。ぼくたちは現在とてもまずい境遇にある。うまく逃げられるかもしれないが、そういかな場合も考えられる。だから危険に備える必要があるわけだ。情勢はすぐにかわる。きみがすべきことは、ここにとどまって完全に息をひそめることだけだ。この老婦人に話しかけてはいけない。まあ、どのみち耳が聞こえないからむだだがね。また、誰にも話しかけてはいけない。友だちと連絡を取るのもだめだ。特にアシユロットはいけない。いいかい、これが一番重要なんだよ。きみの身の安全は一重に誰にもきみの存在を知らせないことにかかっている。よく理解してほしい、ヴェロニカ、ぼくたち二人は重大な危機に直面している。本当に重大な危機なんだ」

ヴェロニカは彼の緊張した顔を見るだけで、真実を語っているんだとわかった。無論、それは彼が真実と信じているだけかもしれない。しかしヴェロニカは驚く気分にはならなかった。この家や状況に対して恐怖を抱いたかもしれないが、自分の身の安全に対してはなんの不安も感じなかった。しかし彼女の連れは異なる状況判断を抱いているようだった。

ルーカスは二分おきに腕時計をちらりと見て、自分に三十分の休息しか許さず、すぐにロンドンへ帰還すると宣言した。彼は一息深呼吸すると肱掛け椅子から身を起こし、立ち上がってヴェロニカを眺めた。彼女の側にもなんらかの行動を期待しているようだった。しかし彼女はいつものようにぼんやりと彼を見ているだけで、なにを期待されているのかわからなかった。

「ぼくを見送りに来ないのか？」と彼は言った。

ヴェロニカは言われるままに立ち上がり、例によって犬のごとく彼のあとについてタイル敷きの広間を横切り、玄關まで足を運んだ。ポーチで彼は立ちどまり、横にいる娘をじっと見つめた。それから突然彼女をつかんで引き寄せた。

「ヴェロニカ、きみが頼るべき人間はぼくしかない。ぼくもきみしか頼る相手がいない。ぼくたちはいつしよにいるしかない」

ヴェロニカのやさしい心は簡単に感動してしまった。緊張、疲労、懸念を浮かべたルーカスの顔がそばにあった。彼の以前の仕打ちはみんな忘れられた。いま彼女の前に立っているルーカスは、変貌してやさしくなった別人のルーカスだった。思わず知らず彼女はほほ笑みかえた。ルーカスははじめて彼女が笑うのを見た。彼女の表情がまったく変わってしまった、同じ娘とは思えないほどだった。彼女に回した腕に力がこもり、はっと気がつけばルーカスはヴェロニカにキスしていた。

いやいやながら彼女から腕をほどく。振り向く。オートバイのシートに半分腰掛けたとき、彼は動きをとめ、再びヴェロニカを見た。それから彼女のほうに身を乗り出した。

「戻ってくるよ」と彼は言った。「なにがあろうと戻ってくる。待っていてくれ、ヴェロニカ」

第六章

ブルームズベリー・スクエアの巨大な屋敷の広間で物音がする。委員会のメンバーたちが会合のために集まっているのである。平信徒でもある執事がメンバーの身元を確認する。彼らは一人ずつ長いタイル張りの廊下を歩んで裏庭の別館に消えていく。もとは撞球室として建てられたものであったが、いまでは魔術結社のロッジとなっていた。

事務所では同結社の秘書が討議予定懸案の書類をまとめていた。綿密に観察すれば、彼の浅黒い顔の皺が深くなっており、およそ十才ほど老けてみえることに気がつくだろう。また彼の面はおちくぼみ、瞼もやや腫れている。そういった外見と、慌てて丸めて部屋隅に放り出した埃だらけのライダースーツを除けば、彼が一晩で二百マイル以上の距離を突っ走ったことを示すものはなにもなかった。

書類を整えると、ふと立ちどまり、金庫脇の戸棚を開け、ウイスキーを取り出す。たつぷりグラス半分を水もなしにストレートで飲み干す。撞球室に続く廊下を歩いていくころには、顔の皺も消えていた。

委員会のメンバーはすでに集合しており、秘書の入室が着席と開会の合図であった。会合宣言がなされ、いつもどおり議事が進行していった。それから議長が「他に懸案はありませんか？」と言って、

席上の面々を見渡した。各々首を横に振り、テーブル脇に控える秘書はひそかに安堵の溜め息をもらそうとしていた。すると議長が沈黙を破った。

「兄弟たちよ、諸君に聞いていただき、助言を仰ぎたい一件があるのだ。」

「昨夜このロッジで儀式が執行されていた。第七位階の儀式だ。私がハイエロファントをつとめていた。すると突然、ロッジの床にある姿が物質化したのを感じた。他の兄弟数名も同様に感知したのだ。《力の言葉》によってそれを追難することができたので、われわれは儀式を続行したのだが、この部屋の封印を突破できる部外者がいるとなると、これは深刻な問題だ」

一同は真剣な表情でこの声明を聞いていた。どれほど深刻な問題か、よくわかっていた。魔術結社が秘密を保護するにあたっては、物理的な手段だけでなく、集会場に霊的な封印を施すという手段も採用しているのである。そして西半球で最古最強を謳われるこの結社は、部外者が最高位階の儀式作業に侵入することに成功したという事実には直面していた。

議長の左に座る白髭の老人が最初に口を開いた。

「それが部外者だというのは確かかな？ これまでにもあったことじゃが、急死した団員が自分が肉体を離れたのも忘れて、いつもの癖でロッジに現れたという可能性は？」

ここに集う男たちは体を離れて行動するのに慣れていた。死者が戻ってきたのではという意見を笑う者はいなかった。何百年も前に死んだ人間や、大陸の向こう側にいる人間と同席して会議することはよくあった。彼らを当惑させていたことは、入場資格を持たない人間が集会場の封印を突破したという事実であった。そして議長が老人に返答した。「あれが団員であるわけがない。女だった」

ルーカスは息をこらしたまま待っていた。侵入者の身元が判明するほど明瞭に物質化されていたのか、それが知りたかった。しかし質問するわけにもいかなかった。彼の瞳孔は収縮して針の先端のようになり、顔は仮面のようにこわばっていた。

数分のあいだ、議論はあちらこちらを方向を変え、ようやく意見の一致を見たところは、どうやらかなりのオカルト知識を備えた部外者が封印突破に成功し、侵入したらしいという現状認識であった。こんな事態は十六世紀に一度起きたただけであった。当時パリのロッジが似たような方法で侵入されたことがあり、二十世紀の魔術師たちは当時の対処法を先例として今回の処理にあたることになった。

彼らの《団》は内懐に《破碎の闇の光》という秘術を有していた。この術の使用は、《団》の奥義が非参入者の手に渡る危険性がある場合（幸いにして希有）に許可されていた。団員たちが血に飢えた人間だというわけではない。彼らに手に託された知識は恐るべき力を持つものであり、それが不適合な者の手に渡れば、冗談ごとでない非常に深刻な事態になるからである。ふさわしくない者の手にオカルト知識が渡ってしまった場合、その管理責任者が知識の行使と伝播を防ぐ任にあたる。もしある個人が《団》の秘密をスパイしようとしたら、その個人がその後起きる事態の責任を取ること

なる。知識は《団》に託されたものであるから団員が気ままに伝達することはできないし、また団員には侵入の罪科を免除する権利もないのである。侵入者が女性であると思われる事実（しかし議長はこの点で確信を有していなかった）に鑑み、数名の団員は作戦行動に賛成票を投じることをためらっていた。しかし、《破碎の闇の光》の発動を議題とする件に反対する者はいなかったが、二名が棄権したため、決定は残る五名でなされることになった。

彼らは機密保持遂行に関して重大な責任を負っていた。誰かが秘密を知ってしまったのであり、なんとしてもその人物の口を効果的にふさがなければならぬ。そうしてはじめて彼らの責務が達成されるのである。

ルーカス自身はまったく安全だった。団員たちには侵入者とルーカスを結びつける手掛かりすらなかった。彼女が、彼女だけが《闇の光》に撃たれるであろう。彼は再びロンドンの秘書派遣業者に電話して彼女にかわる感受性豊かな人間を取り寄せるだけでいい。それでも彼は催眠術にかかった人間のように議長を凝視していた。魂は恐怖に凍えていた。議論に熱中していて、誰も秘書に目もくれなかった。ちらりとでも見ていれば、その顔色からすべてが明るみに出たであろう。ルーカスは自分のことを善悪を超越した存在であると考えていて、いかなる感情にも左右されないと信じていたのであるが、実は人間化されており、その人間性が彼を裏切っていた。左手道を歩む者は隔絶のなかに力を見いだす。しかしルーカスは絆を作ってしまった、邪悪へのまったき忠誠から道を外れていた。彼のなかにある善の火花は風にあおられ炎と燃え上がり、彼を破滅させようとしていた。

団員たちは方法と手段を論じていた。作戦責任者を誰にするか、《闇の光》を解放するための集団瞑想の日時と場所決めをどうするかを話し合っていて、予期せざるものが起きようとしていることを知らなかった。テーブル脇でゴトゴトという椅子の引かれる音がした。彼らの視線はそちらへ移った。

ルーカスが立ち上がっていた。顔色は奇妙な灰白色で、まったく血の気がなかった。しばらくのあいだテーブルの周囲に座る男たちが彼を凝視していた。彼の表情に気を取られていたのだ。ルーカスは声の出し方を忘れたかのように見えたが、ようやく言葉が口について出た。

「お話したいことがあります」と彼は言った。

議長が続けると手で合図した。ここしばらくのあいだルーカスは疑惑の対象となっていたから、現在問題となっている事件に彼がからんでいるとしたところで、出席者はたいして驚きもしなかった。彼らはルーカスがしゃべりだすのを待っていた。ほどなく彼は口を開いた。

「この事件はみなさんが考えてらっしゃるようなものとは全然ちがいます」

再び沈黙。ルーカスは言葉を探していたが、見つからなかった。周囲の男たちはランプシェードが作り出す影のなかで身じろぎもしなかった。彼らの視線は秘書に向けられていた。誰も助け舟を出さなかった。

今一度力を振り絞り、ルーカスが続ける。

「ロτζジで目撃された人物はこの件と直接の関係があるません。彼女はまったく受け身でした。実のところ、トランス霊媒です。彼女はこの件になんの責任もないのです」

「では」と議長が言った。「女に責任がないのなら、誰の責任なのだ？」

「私です」とルーカス。「私が彼女を操っていたのです」

「どのようにして？」

「催眠術をかけました」

「その女は起きたことを覚えているか？」

「いえ、覚えていません。それは誓えます。彼女は道具にすぎません。ペンが署名の名前を覚えていないのと同じです。誰かを抹殺するというのなら、私を抹殺なさるがいい。私が責めを負う」

奇妙な光景であった。薄暗いブルームズベリーの一室で、死を志願した男が顔をこわばらせ、ひとり直立不動の姿勢をとっている。周囲に座る男たちの顔はライトの陰に入ってぼんやりとしか見ええない。彼らの背後には祭壇があり、その上で《常盤の炎》が燃えていた。

どんな判決が出るか、誰も疑問を抱いていなかった。ずいぶんと前から首領たちはルーカスが団員に不適格であると思っていた。最近、彼が首領たちに対して陰謀を企てたという疑惑はほぼ確信とな

っていた。そして彼は現場を押さえられたのである。外陣のメンバーである彼が、内陣の秘密、しかも第七位階の秘密を手に入れていた。彼らはこの窃盗に腹を立てていたのみならず、こんな窃盗が可能だったのかと肝をつぶしていた。その驚きゆえに彼らは無慈悲になっていた。

議長が口を開いた。「資格なき位階の秘密を得た者に対しては二つの扱い方がある。その位階の誓いを立てさせるか―口を封じるかだ。ここにいるわれらの兄弟に誓いを立てさせようと思う者は？」

議長は一人ずつ顔を覗きこんでいったが、男たちは一様に首を横に振った。「となれば」と議長、「われわれには後者の手段しか残されていない」

議長はこの件を投票で決めようとはしなかった。全員棄権する可能性を見てとったのだ。彼らが通過させようとしている議案は死刑宣告であり、たとえ全員腹は固まっても、首を縦に振るのは容易ではなかった。そして動議は反対者なしで可決されようとしていたが、白髭の老人がついに沈黙を破った。

「位階の誓いを立てさせるのは無理としても、ほかに方法はないのか―《闇の光》の解放以外の方法は？」

「どういう方法を提案されるおつもりか？」と議長が聞き返した。

「他言無用を誓わせて、放逐するとか」

「諸君はこの提案をどう思われる？」と議長は言い、集まった男たちを見回した。

長い沈黙があった。誰も全員の心にある考えを口に出す責任を負いたくはなかった。裁判にかかられている男は弓の弦のように直立しており、獣のように鼻孔を震わせていた。両眼は大理石のようにつややかで、暗い水溜まりのようになっていた。

ついに新聞記者が沈黙を破った。「危険すぎる。信用できない」と彼は言い、一同は判決を口にする責務を逃れて安堵の溜め息をもらした。

「それが結論か？」と議長は言い放った。一同はそれぞれ頷いたり、短い言葉で同意を示した。ただ老人は別であり、その言葉が再度一同に降りかかった。

「前々からこの男の正体はわかっておった」と老人は言った。「邪悪への奉仕に献身している男、左手道の修行者、黒魔術師じゃ。そしてわしとて、昨日ならば諸君らと同じ判決を下したじやろう。じゃが、今となつては、この男が全身全霊を悪の道に、すなわち隔絶の道に捧げておると言えるじやろうか？ 思い出してもらいたい、きみたちは自白した男を裁いておる。彼が自白せなんだら、わたしにはわからなかったじやろう。なのに、彼は罪なき者が苦しむよりはと、自ら立ち上がったのじや」

「恋する男はなんだってやる」と新聞記者が言った。ルーカスは焼けた鉄を押しつけられたようにビクリとした。その言葉、いや、その嘲るような口調がルーカスを発奮させ、行動させたらしい。彼

は一瞬、飛翔前に身構えるがごとくその場に立ちすくみ、それから尻ポケットに手をやった。そして一同は拳銃を目にすることになった。

「用があるなら捕まえにきな」とルーカスは唸った。「喧嘩ってのは二人でやる遊びだぜ」
そう言うのとルーカスはゆっくり扉のほうへ後ずさり、一同に輝く銃身をぎらつかせた。

「武器はしまっておいたほうがいいぞ、ルーカス」と議長が冷たく言い放った。「われわれは物理的力は使わない」

ルーカスは後ろ手で扉を閉め、鍵をかけた。ロッジ専用室は本館やアシユロットの地下室から離れている。団員たちは脱出に少々は手間取るだろう。彼は長いタイル敷きの廊下を突っ走って事務所に入り、個人用金庫から私文書をつかみ出してから寝室に駆け上がっていった。彼は手近にあった私物を雑嚢に突っ込み、再び階段を駆け降りた。

タイル敷きの廊下の向こうでドアをぶち破る音が響く。ぎりぎりで間に合った。ルーカスは玄関マットの上に落ちている郵便物を拾いあげると、人生と仕事の大半を過ごしたブルームズベリーの屋敷を後にした。彼の眼前には新しい人生設計が開けていた。自分を待ち受けているものがなんなのか、彼にはわからなかった。これほど完璧に背水の陣を敷いた男も珍しいであろう。

ほどなく彼はオートバイにまたがって疾走していた。一連の冒険のために気分は高揚しており、疲労など感じなかった。しかしロンドンの喧噪を抜け、田舎満ちに出て、ようやく考える余裕が生じたとき、現状認識が脳裏に浮かんだ。まず、失職。再就職の見込みほとんど無し。彼は一文無しではなかった。若干ながら銀行に預金があったが、それで二人が食える日には目に見えていた。ヴェロニカは身につけている着物以上の財産を有していないし、彼とても同様だった。二人はたぶん將軍の釣り小屋に永遠に身を潜めているしかないだろう。ルーカスは文筆で少しばかり稼げるかもしれないが、この方面はせいぜいうまくいって不安定収入である。

ルーカスは内省的な人間ではなかった。よく考えてみれば、二人ではなくて一人ならば、倍の時間長持ちすると気づいたであろう。彼は二度とヴェロニカを使う気がなかったのだから、彼女を捨てて悪い理由はなかった。不必要な秘書を雇っておく義理はないのだ。それでもなお、彼女を捨てるなど思いつきもしなかった。生まれてはじめて、彼の不思議な性格が絆というものを形成していた。彼はまだじつくりと自分の気持ちを分析するひまがなかったが、新聞記者の言葉を聞いた瞬間に一種の真情吐露を得ていた。「恋する男はなんだってやる」。自分はヴェロニカに恋していたのか？ この質問を考えてみる気すら起きなかった。彼にわかっていたのは、伝書鳩よろしく彼女のもとへマシンの許すかぎり早く帰ろうとしている自分だけだった。異質な敵意に満ちた世界で彼が唯一接触した存在、それが彼女だった。ヴェロニカを無くしたら彼は本当に天涯孤独になってしまう。

長距離走行の疲労が彼にのしかかりつつあった。昼過ぎ、ようやくベツカリングの谷を見下ろす丘の上についたとき、彼はくたくただった。川沿いなのでこぼこ道に到着したとき、マシンの安定をはか

るのが精一杯だった。呼び鈴など鳴らしてもむだだとわかっていたから、彼は灌木を抜けて家の裏手に回った。お茶を飲んでいたヴェロニカは、ふと顔を上げると、芝生をよるけながら歩いてくるルーカーカスを目にした。彼はフランス窓を叩いてなかに入れると意思表示した。彼女はすぐに飛び出している、彼を入れてやった。ルーカーカスは一言も発することなく敷居をまたぎ、テーブル脇の椅子に身を投げ出した。彼女はなにも質問しなかった。質問する気が起きないのである。彼は遠く離れた不可解な存在であり、縁もゆかりもないのであるが、女の本能とは恐ろしいものである。ヴェロニカは紅茶をいれてやり、彼が飲むさまを見ながら満足していた。顔も衣服も埃まみれだったため、彼は前にもまして忘れられた墳墓のエジプト王の像みたいに見えた。

彼の“感じ”が奇妙に変化していた。もはや彼は力感と崇高を伝えてくる存在ではなかった。彼がいつも発していた謎の力が消えていた。ここにいるのは単に疲労困憊した男子一名であり、いわゆるいがたいことながら、以前よりずっと彼女に接近していた。彼は飲むだけで、食べようとしなかった。三杯目の紅茶が埃だらけのくちびるを過ぎると、彼は大儀な様子で立ち上がり、ヴェロニカの肩に手を置いた。

「もう寝る。完全にくたばっちゃまった。ぼくを見ていてくれ。一人にしないでほしい」。そして埃まみれの服のまま、彼は暖炉脇にあった幅広の革張りソファに身を投げ出した。

どうして眠っているあいだ、そばにいてほしいのか、ルーカスは説明しなかった。彼としても、説明をつけるのが難しかったであろう。しかし彼は、ひとりぼっちにされるのがなんとしてもいやだったのである。

ヴェロニカは黄金の午後が黄昏に薄れゆくさまを眺めていた。それから廊下でガサゴソと音がして、番人の老婆が夕食とともに到来したことを告げた。老婆はソファに眠るルーカスを見ると、なにやらわけのわからないことをつぶやき、皿をもう一枚取りに行つた。自分が世話を任されている家に、突然二人が現れたことを、老婆は当然のことと思つていようだった。

老婆がたてる物音でルーカスは目を覚まし、立ち上がると泥埃を落とすに出た。ライダー・スーツを脱いでいると、ポケットになにやら分厚いものがある。引き出してみると、それは屋敷を出る際に拾ってきた一束の郵便物であつた。二通はアシュロット宛であり、残りは《団》宛、しかし一通は彼個人宛だつた。アシュロット宛の手紙は破つて暖炉にたたきこんだ。回送してやる義理はない。彼の身の安全は大部分《団》が彼の所在を知らない点にかかつていゝ。いかに神秘の力とはいへ、発射すべき方角くらいは知つておかないと、効果を発するのがきわめてむづかしいからである。《団》宛の手紙は純粹な好奇心からざつと目を通した。差出人に返事が届く日は遠いであろう。それから自分宛の手紙を開封した。それは前置きなしの簡にして要を得たものであり、前日未明ソウベリー將軍がウオキングの自宅で平安のうちに他界した旨と、ルーカスが筆頭相続人である旨を記していた。ルーカスはヒュウと口笛を吹いた。なんとという驚くべき幸運、まさに必要なときに。この先もこんな幸

運が続くなら、なんとか体勢を立て直せるだろう。彼は手紙をポケットにしまい、夕食の席に向かった。テーブルにつく際には、実に友愛の情をこめてヴェロニカの背中をポンとたたいてやった。

夕食後、パイプをくゆらせ、ヴェロニカが読書している様子をひそかに眺めながら、ルーカスは再び我が身の幸運を祝していた。妙ちくりんなおんぼろには違いないが、彼はこの家の主なのだ。新しく入手した資産とともにひとりぼっち、これほどよい話はなかった。

これで《団》さえほっておいてくれたら！ おそらく彼らの視界から完全に消えてしまえば、そのうちに自分のことなど忘れてしまおう。少なくとも怒りはおさまるかもしれない。彼は《闇の光》とその威力のことは考えたくなかった。瞑想の対象としては愉快な代物ではない。《闇の光》の力にさらされるよりナイアガラ瀑布への投身自殺を選んだドイツ系アメリカ人のことを思い出す。ヴェロニカさえいなかったら、彼も同じ道を選んだことだろう。しかしヴェロニカがいる。ランプの明かりのために顎から喉にかけての柔らかい線が浮き出ている彼女がいる。微妙な、不思議な方法で彼の気をひく彼女がいる。彼女からなんらかの反応が欲しくてならなかった。ロンドンに発つ寸前に見せてくれた微笑がもう一度見たい。彼は煙草にけむる薄明かりの部屋に座ったまま、彼女を眺め、あのかちびるにもう一度ほほ笑みをもたらすにはどうすればいいのか、一生懸命考えていた。犬のようにおじけづくヴェロニカには用がない。彼が欲しいのは自分の自由意志でこちらにきてくれるヴェロニカ、とりわけほほ笑んでくれるヴェロニカだった。

あのほほ笑みを忘れることができなかつた。女性がその方面を見せてくれたのはあれが初めてだつた。また、彼がそれを求めるのも初めてだったのである。ああいったほほ笑みは、かつての彼がそうなるうと修行していた冷笑かつ冷血の人間に与えられるものではない。しかし根本的に見れば、ルーカスは冷笑的でもなければ冷血でもなく、直情径行の熱血漢だったのである。彼は愛もしがらみもない人間がもつとも民族に奉仕できると信じていて、愛されたことのない人間は愛し方を知らないということを忘れていた。

そしていま、ルーカスは新しい修行を得つつあつた。推測通り、彼とヴェロニカは多くの転生を通して《秘儀参入の道》を歩んでいたのであり、彼が道を踏み外して以来、二人の道は分かれてしまつていたのである。しかしいまや彼の人生に彼女が再登場してきた。いにしへの力が再び影響力を行使しつつある。彼はゆつくりと以前の道に引き戻されつつあるのだ。

ヴェロニカに対する彼の忠誠は、彼女の幸せと考へた結果というよりも、むしろ彼女を失いたくないという恐れに触発されたものであつた。しかしそれは愛であり、いまだ花開かずといえども、芽をふいた種子であるといえた。

第七章

翌朝ルーカスはヴェロニカを連れて自分のささやかな不動産を探検しに出かけた。家の前にある芝生をのぞけば、地所はおおむね灌木と雑木林からなっており、それも手入れされていないボウボウの代物だった。月桂樹はあたりにはびこって木のごとき太さになっいるし、オークは伸び放題生え放題でからみあっている始末である。オーク本来の威厳は失われ、自ら作り出す木陰に不吉な薄闇をたたえている。ルーカスにはこの区域を再開発する意図などなかったが、自分の資産を調べるのは楽しかった。

川と土地のあいだには馬車道があるだけで、境界線は錆びてたるんだ針金一本で仕切られているだけであるから、土地区分は実情に即したのではなく、単に法的な存在にすぎなかった。川幅が狭い箇所では、多数の倒れた樹木が緑の薄闇のなかでゆっくりと朽ちている。川の流れはしばしば天然の丸木橋の下を流れていった。ときおりハタネズミが川にどぶんと落ちる。ときおりカワセミが一条の青い閃光のように川に飛びこんでいく。そしてルーカスは人生一般について語り、特に自分の半生を語った。

ヴェロニカは話し上手ではなかったが、素晴らしい聞き上手であった。物分りがとてもよく、初耳のことでもすぐに意味を把握できたからである。ルーカスが語る人物や物事の知識を、彼女は将来に備えて蓄えていた。魂の不滅の教義が論理的帰結をもって語られるのを聞いたのは、彼女としても

はじめてだった。ルーカスは前世と前世が現世に及ぼす影響をもっともらしく語っていた。慣れた語り口から判断しても、彼の意識にその種のこと常態に存在しているのは明らかだった。彼にとって、死は移住に等しいのである。心の貧しい者にとっては深刻な作業であろうが、知識に富む者にとっては興味と興奮の冒険である。しかし、時ならぬ死は彼の嫌うところであった。死を恐れているからではなく、新しい肉体を訓練するのに時間がかかるからであった。

ヴェロニカは新しい生命価値観に直面する自分を見いだした。肉体も世界も安っぽいものとされ、単に目的を達するための手段とされているのであるが、その目的に関してはなんのヒントも与えられていないのである。実際、ルーカスは“肉体”とは言わず、“肉の体”と言う。まるで肉で出来ていない体も存在すると言わんばかりである。またルーカスにとっては、世界は結果に過ぎず、それ自体原因にはなり得ないものであった。つまり、現実世界で起きることはすべて余波なのであり、実際の闘争、実際の出来事はより精妙な領域でまえもって起きていると考える。ヴェロニカは語られる概念を次のごとく把握した。偶然的存在と思えるわれわれの複雑な出来事の背後では、偉大な法則に支配された偉大な諸力が機能しているのである。その法則の性質を発見して諸力を互いに均衡させてしまえば、たとえ比較にならないほどちっぽけな人間の意志といえども、天秤を片方に傾けることができるはずだ。そしてこれがルーカスの生涯の目標なのである。

さてヴェロニカは、しゃべることも理屈づけすることもしないが、けっして馬鹿ではなかった。すぐに彼女は気がついた。ルーカスがオカルト・パワーやそれを手に入れる法のことばかりしゃべっていて、手に入れたらどう使うつもりかヒントすら語らないのである。それでは彼の究極の目的はなん

なのか、彼女なりに推論してみたが、すぐに目的など持っていないことを発見してしまった。彼は諸力をもてあそんでいるだけなのである。子供がメカノ・キットで遊んでいるようなもので、機械原理を見事に体現した模型を組み立てて、計算通りに動いたと喜んで、その原理を応用すべき大なる目標など考えてもいないのである。彼が《秘学》を学ぶのは、部分部分が組み合わされて、神秘が解明されるのを見るのが楽しいからである。この偉大な、むしろ宗教に近い学問は、彼にとってジグソーパズル以上のものではなかった。

ルーカスは自分のおしゃべりに熱中していて、聞き手の態度に注意を払っていなかった。しかし、言葉をさがして舌をとめたとき、自分が妙によそよそしい視線を浴びていることに気がついた。どうも自分がひとりほしやぎしている馬鹿になったような気分である。彼女の態度を確かめたくて、彼は質問を放った。この朝最初の質問である。

「どう？ どう思う？」

ヴェロニカは思慮深げに頷いた。「おっしゃりたいことはわかったように思います。あることがあ
ることを引き起こすので、その理由がわかれば、それを引き起こせるといふことでしょう」

「そんなところだ」とルーカス。「正確に言えば、因果律の制御というんだ」

「でも、それがわかったら、どうなさるおつもりですか？」

「なんでも好きにできる。なんだって手にはいるんだ」

「でも、そんなにたくさんは必要ないでしょう」

「おいおい、すごい財産を思いのままにしたくないとでもいうのか？」

「あたしもある程度は欲しいです」とヴェロニカが注意深く言った。「でも、たくさんはいりません。面倒見るのが大変ですもの。それに、力のバランスをとっている最中に、かたつぽの手がすべつたらどうなるんですか？」

「まさにそれが起きたんだよ」とルーカスは独り言のようにつぶやいた。数分沈黙が続いた。それから彼は暗い気分を振り捨てて、再び口を開いた。「世界中の財産が手に入ったら、きみはどうしたい？」

「服でしょ、本でしょ、それに絵が欲しいです。それから、犬。そう、絶対に犬を飼いたい」

「それだけじゃ世界中の財産は使いきれないよ。残りはどうする？」

ヴェロニカはしばらく考えていた。「あたしひとりじゃ世界中のパンは食べきれないから、必要な人にはちゃんと手に入り、欲張りな人があまりたくさん独り占めしないようにしたい。いまはそんな人ばかりでしょう。ミスター・ルーカス、どうしてそれをお考えにならなかったのですか？」

「そう言われてもねえ。それがぼくとなんの関係があるんだ？」

「なんの関係って、誰かが飢え死にしているのを知ってて、幸せになれます？」

「なれるとも。そりゃそいつらの勝手だ。人間は自分の足で立たなくちゃいけない。いちいち気にしていたらどこにも行けやしない。文明は犠牲の上に成立しているんだ。選べるものなら、文明の側に回りたい。犠牲になるのは御免こうむる」

このロジックに反論するのは難しかった。ヴェロニカも反論しようとは思わなかった。彼女は単に首を横に振り、こう言った。「それでも、本当はいやでらっしゃると思います。いつもなにかを追ってらして、それが手に入れば次のものが欲しくなる。それじゃまるでアリスのお話にあるキチガイ帽子屋みたい。昨日はジャム、あしたもジャム、だけど今日はなし。あたしは行くだけじゃなくて、楽しみたいです」

ルーカスは大いに楽しんでいた。ヴェロニカは目覚めつつあり、彼女の意外な思慮深さを知り、ウイットに富むコメントを聞くのがまったくおもしろかった。彼が予想していた以上のものが彼女にはあった。彼女の心は能力がなくて空っぽなのではなく、ただ素材がないだけだった。彼はヴェロニカを教育しているのだと思っていた。ヴェロニカが彼を教育しているのだとは思ってもいなかった。彼女同様、彼もまた新しい考え方に直面していた。彼女の素朴な言い草を退けるのは簡単であった。しかし、それが奇妙にも当たっていて、彼女が異常なほどこちらの弱い点を突くこつを心得ているという事実は無視できなかった。おそらく彼女の意見にも聞くべき点はあるのだろう。彼自身、この小

娘となかよくなることで、かつてないほどの喜びを得ていた。力を得ることとはまったく異なった感覚であった。もちろん他人を操ることには独特の魅力があるが、新味がなくなってしまうえばそれまでである。しかし、他人を操ったり動かしたりするのではなくて、反応を引き出すことができるとなれば、引き出した側も刺激を受け、より高いレベルへと上昇するのである。二者の間で起きる作用と反作用により、新しい視野が開け、新しい可能性が生まれる。一者の単独作業ではこうはいかない。しかし、この相互作用を達成するには、相手の自発的協同を得る必要があるのだ。

彼女の心にどう働きかけるつもりなのか、彼女の性を目覚めさせて子供から女へと拡張させ、反応させるにはどうすればいいのか、彼は正確に知っていた。すでに彼女の性格はわかった（と彼は思いこんでいた）。もっともおだやかなる者の性のうちにすら潜む力、それを解放する秘密のスイッチに触れる方法を彼は正確に知っていたのである。

番人の老婆が夕食の準備を終えており、ヴェロニカがすでにテーブルについていたとき、遅れてルーカスが入ってきた。食事はお祝いのものであった。ルーカスは新しい探求に熱中していて特に陽気な気分だったし、ヴェロニカは彼への恐怖が急速に薄れつつあったため、よろこんで会話に参加していた。

しかしある程度、ヴェロニカがルーカスの性を誘導していたのであって、彼の側の主導ではなかった。封印を解かれつつあったのは彼という存在の源泉であり、一方ヴェロニカは処女の魂のみが持て

る崇高を保ちつつ、怖さ半分魅力半分で、自分が引き出した力を眺めていたのである。しかし彼女も女であるから、この状況を実に楽しんでた。彼女にとつて、ルーカスはつねに奇怪な魅力を有する存在であったが、どういうわけかその魅力が、もう彼が怖くないという事実のために、いつそう増大していた。そのため、食事が終わる頃になると、ヴェロニカは再びルーカスにほほ笑んでしまった。

そして、そのほほ笑みが彼の破滅を完璧なものにした。モナ・リザのほほ笑みのようにゆっくりと浮かんだそれは、一瞬女の持つ可能性をすべて明らかにし、それから突然、自分の無謀に驚いたように消えていった。ルーカスの側からしかけたゲームではあったが、いまや彼は大いなる深みにはまっていた。この種のほほ笑みを得るために王国を放り出した男は数知れない。そしてルーカスは自分の魂を放り出していた。現在直面している危機を切り抜ける唯一のチャンスは、隔絶を法とする《闇の主人》に忠誠を誓うことである。そうしてはじめて敵の攻撃に立ち向かうに十分な力が得られるのである。

隔絶は力を意味するが、幸福は結合のなかにある。そして結合は愛を通じてのみ到来するのである。ルーカスは愛を味わってしまった。もう他になにも欲しくなかった。

食事が終わった頃には月が出ていた。こういった状況下での食事は緩慢に進行するからである。月は玲瓏として芝を白く照らし、灌木は墨の如き陰をかもす。盆地の夏の夜は日中と同様の暑さであり、二人はフランス窓を抜けてテラスに出た。それからそぞろ歩く。ルーカスはヴェロニカの腕に自分の

腕をすつとからませた。細長い褐色の指が娘の白い肌と鮮烈な対比をなした。そして半分子供で半分女であるヴェロニカは、その腕の位置に満足していた。

そういうわけで二人はそぞろ歩き、向き合い、そぞろ歩き、向き合いながら、お互いの人生を語り合っていた。彼女の聞いたところでは、ルーカスは高名な某政治家の庶出子として生まれたという。それから小売商の一家に育てられ、その後、家を飛び出した。四角い棒が丸い穴に押し込まれたようなものだったが、弾けたのは穴のほうだったというわけである。それからのルーカスは反抗的な手に負えない若者であった。母親ゆずりの南国の血が騒ぐのか、職を転々とした。しかしほどなく父親から受け継いだ知性が優勢となり、自ら棒に振った普通教育の穴を埋めるべく、夜学で苦闘の日々を送った。

そうこうするうちに、彼はある老人が営む古物商の店員となっていた。埃だらけのこの店に、ある日奇妙な品が舞い込んだ。それは白い、というよりも灰色がかった黄色の家具覆いであり、一辺三ヤード見当の四角い代物で、その上に直径四フィートほどの円が描いてあった。円の内側にはなんの模様もなかったが、その周縁にはなんとも奇妙な象形文字と生き物らしき絵がごちゃごちゃ並んでいた。店主は物品を額面通りに受け取る人物であった。店主にとっては、家具覆いは家具覆いであり、家具を覆う以外に用途を見いだすことがなかった。

しかし利発な青年の好奇心は簡単に満たされはしなかった。夜に家具覆いを広げるたびに、彼は象形文字を見てあれこれ想像し、朝しきるときには新たな探求心が生まれるといった具合だった。そ

れからある日、客がろくに来ないので、彼は店内の本を物色していた。そしてある本のなかの素朴な木版画に謎の回答を見いだした。問題の家具覆いの模様は明らかにここから模写されたものだったのだ。期待に胸を踊らせつつ読み進めば、謎の家具覆いが、実は魔術師がある種の精霊を召喚する際に用いた床敷きだったと知れた。術者は魔法円の中央に立ち、周囲の象徴を保護として、布の四隅に記された印の上に、この世のものならぬ存在を呼び出すのである。

閉店時間になると、若き店員は部屋に内側から鍵をかけ、魔法の家具覆いを広げると、円の中央に立ち、部屋の暗がりに向かって本に記されていた呪文を高らかに唱えた。それから待っていた。

まったくくなくも起きなかった。すべてがあほくさくさだったので、彼は帰宅し、就寝した。しかし、まどろんでいると、室内になにかがいて感じて目が覚めた。明かりをつけるべくと手を伸ばそうとしたが、金縛りになっていた。顔に息吹を、胸に重みを感じた。なにかが喉のところにいる。だが動けない。それから、あらんかぎりの力を振り絞り、なんとか身を起こしたが、部屋はまったくくからっぽだった。店のときと同様に。

彼は健全な神経の持ち主であったから、すぐに落ち着き、再び寝た。翌朝、床の上にナメクジの大群が這っていったようなネバネバの跡を見なかったなら、すべては悪夢として片付けていたであろう。なんともいやらしい跡は窓から寝台へ、再び窓へと続いていた。よく調べてみると、窓枠もネバネバで覆われていた。この跡を残した化け物が、換気用にかけてあった窓の上端六インチの隙間から入り込んだのは明らかだった。

その後ながらく青年は窓を閉めて寝ていた。しかし、魔法の床敷きと数々の書物（ともに某オカルト研究家の家から仕入れた品だった）が彼の想像力に火をつけてしまい、もうほかのことは考えられないようになった。手掛かりを得た神秘の秘密を学びたいという一心で、昼も夜もなかった。人がこのような不可思議の手段を用いて探求するものはいったいなんなのか？ どうやって探求しているのか？ また、探求者たちはどういう人間なのか？

ある晩、魔法の家具覆いをもつと貴重なガラクタの上にかけていると、窓越しに覗きこんでいる顔が見えた。あつという間にその顔の持ち主が店内に入ってきた。そしてみだしなみの悪い無骨なその人物は、家具覆いの値段を聞いてきた。ルーカスが数字を言うと、客は躊躇することなく金を出した。それから彼は若者を奇妙な目で眺めた。

「おまえさん、この種のことをなにか知っておるかね？」と客は聞いた。

ルーカスは、肩肘張って生きていたいがいの人間と同様、きわめて言葉使いに慎重なほうであったが、この客にはなにか反発と魅力の双方を感じさせるものがあつた。ふと気付くと彼は初対面の相手に魔物召喚とその後のナメクジ大行進の話をしていった。相手は欣喜雀躍といった様子であり、あれよあれよという間に、ルーカスと本と床敷きは客のねぐらに連れていかれてしまった。そこで彼らは一緒に防護田のなかにしゃがみこみ、声を合わせて召喚の呪文を読みあげた。ルーカスの見るかぎり、なにもおきなかつたが、客は顔をしかめながら、定められた場所に《力》がちゃんと出現していると宣言した。それから彼は腕をあれこれと振り回す儀式を始めた。どうやら、呼び出すのも大変だが、

追い払うとなると、いよいよややこしいらしいのである。しかし数分後、あれこれ喚いたり動いたりしたあとで、もはや室内に《存在》はいないとの宣言が出された。それから彼らはソーセージの夕食の席についた。

ソーセージは、その後が続くことになる一連の食事の第一回目であった。ルーカスはどうしてもこの人物に対する反感を覚えずにはいられなかったのだが、その学識は彼を魅了するところ大であった。彼は毎晩足を運び、次々に繰り広げられるパラケルススやロジャー・ベーコンやロバート・フラッドの話や、そういった達人とともに滅びた知識の話に聴き入った。また客の部屋には多分野にわたる蔵書があり、明晰なる若者はすぐに読破して要点をまとめ、独自の結論を出すようになった。本にはごちやごちや書いてあっても、ちよつとした実験をやれば、字面の裏にある真実を明らかにするのは簡単であった。しかし彼はまた、物事のコアは書物に記されていないと見抜いた。知識が欲しいとなれば、その知識を所有している人物をさがす必要があるのだ。

そしてある晩、古本屋の店先で掘り出し物をあさっているとき、ルーカスはたまたま同好の士と会話を交わすことになった。

この新しい知り合いは、床敷きを購入した男とはまったく違うタイプの人物であった。なにを隠そうこの人物は、委員会の席でいつも議長の左側に座っていた、あの白髭の老人であったのだ。彼はみすばらしい青年の器量を測り、並々ならぬ知的能力を見て取ると、彼を手元で育てる決心をした。老人の書物は自由に閲覧していいことになり、また学者でもあった老人との会話は必要な刺激をもたら

した。そして生まれてはじめてルーカスは思いやりに満ちた雰囲気というものを知ったのである。ほどなく《団》の外陣への参入ということになり、ルーカスは長らく求めてきたもの自分の手に入ることを知った。それが善のためか悪のためかはともかく。

あちらからこちらへと人に紹介され、ルーカスはフリート街で新聞記者になり、迅速に昇進していったが、《団》の秘書に任命されたとき、彼のジャーナリストとしてのキャリアも終わった。

それから野心に燃える若者と団員の理想主義とのあいだの熾烈な闘争が始まった。ルーカスは彼らのあいだにいたが、彼らの仲間ではなかったのである。ルーカスは驚くほど詳しく話をしていった。決して自分に都合のいい話ばかりではなかった。いままで胸のなかにわだかまっていたものを、一気に吐き出してほっとするため、ヴェロニカを聴罪師かわりにしていたといえる。

話が終わりかけたころ、月はすでに沈んでしまい、二人は暗闇と夜露のために家に入ることを余儀なくされた。フランス窓の階段のところでは立ち止まった。涼しい夜を離れて蒸し暑いランプに照らされた部屋に入りたくなかったのである。

ヴェロニカは手を上げた。「聞いて」と彼女が言う。「狐狩りみたい」

「あほな」とルーカス。「今は狩りの季節じゃない。とにかく、夜のいまごろ狩りをするわけがないだろう」

「でも、聞いて！」と娘が叫んだ。「とつても近いわ。吠えてる方角に耳をすましてみて」

彼女の耳には迫りくる猟犬の吠え声が森を抜けてどンドン近づいてきた。そのとき彼女は連れの腕を突然つかんだ。

「ミスター・ルーカス！」と彼女は叫んだ。「地面じゃない！ 頭の上よ、空中で吠えてる！」

彼女は突然ひったくられるように室内に連れ込まれ、後ろで扉が激しく閉められた。ルーカスは幽霊を見たような顔色になっており、一言もしゃべらずに彼女を見ていた。それからテーブル脇の椅子に身を投げ出し、両手に顔を埋めた。

かわいそうにヴェロニカは、ただ彼を見つめたまま、どうしようもなく、うちひしがれていた。頭上高くから聞こえてくると思える猟犬の吠え声は信じられないほど不吉な感じがする。おびえてテーブルにつつぷした男の姿に恐怖と不安を感じる一方、彼の不可解な悩みに同情して心を痛めるヴェロニカであった。

彼女はおずおずと彼の肩に手を置いた。「あれはなんなのですか？ どうなさったの？」

答えるかわりにルーカスは手を伸ばしてヴェロニカを引き寄せ、彼女のスカートひだのあいだに顔を隠した。長いあいだ二人はそのままの姿勢でいた。男は身をこわばらせて動きもせず、娘は男の

肩に手を置いて背広のツイード布地を撫で、どう表現していいかわからない慰めの気持ちを伝えていた。

ついに彼は顔を上げた。表情が奇妙に変化していた。それからヴェロニカを見た。

「あれは星幽界の獵犬だ」と彼は言った。「《天狼》というんだ。あれで裏切り者を狩り出している」

「裏切り者を？ いったい誰が？」とヴェロニカ。

「団員たちだ。連中に方法を教えてやったのはぼくなんだ。そしていま、ぼくを狩り出している。《団》の新気風は気にいらなかったくせに、使えれば平気で利用しやがる」

「でも、あなたを獵犬で狩り出すなんて不可能よ！」

「いや、獵犬で狩りをするわけじゃない。ぼくの位置を知るために使っているだけだ。ぼくを殺すとなれば、《光》を使うだろう」

「そんなのできっこないわ！ みんな悪い夢よ！」

「夢じゃないんだよ、ヴェロニカ。やつらはぼくを殺す気だし、正義はやつらにあるんだ。ぼくは死んだほうがいいらしい。きみさえいなかったら、喜んでいくところだが、きみを知ってしまった以上、もういきたくない」

ルーカスは立ち上がり、彼女と向かい合った。彼の瞳孔は収縮して針の一点となり、表情は邪悪の極みになった。彼女が長いこと見ていなかった悪の表情であった。

「だが、ぼくはいかない」と彼は言った。「少なくとも、たいして遠くには」

彼はポケットをまさぐり、ペンナイフを取り出すと、刃を開いた。そして彼女が気づくまもなく、彼女の腕に刃を突き刺していた。

ヴェロニカが痛みと恐怖に悲鳴をあげ、思わず逃げようとしたとき、「怖がらなくていい」と彼が言った。「怪我をさせようというんじゃない。こんなまねをするのも、向こう側に行つてからもきみと接触していたからだ。これは血の絆といって、野蛮人がよそ者を種族の一員に迎えるときにやる習慣なんだ。この絆は死をも乗り越えるし、結婚よりも強い」ルーカスはそう言うと、抵抗できないようにしつかりヴェロニカの腕を握り、傷口に口をつけて血を吸った。

彼女は驚愕と恐怖におののきながら彼を凝視した。これは以前のルーカス、ほとんど忘れかけていたルーカスだった。腕は解放されたが、手首はしつかり握られていたので、逃げることはできなかった。

「腹を立てないでほしい」と彼は言った。「たいして怪我をさせなかつただろう、ほら？」彼はヴェロニカの肩に両手を置き、まっすぐ目を覗きこんでいた。「いいかい、ヴェロニカ、ぼくは行かなければならぬらしい。でも遠くは行かない。戻ってくるから、待っていてほしい」

彼女は言葉もなく彼を見ていた。以前の恐怖が音もなく眼前に浮かびあがった。彼はヴェロニカを引き寄せ、頬と頬を重ねた。「ヴェロニカ、ぼくにやさしくしておくれ。もうすぐ行かなければ」

その声の調子、室内の不吉な静寂、すべてがヴェロニカを圧倒した。彼女は泣き出し、彼にすがりついた。しばらく二人はそのまま立ちつくしていた。やがて彼がやさしくふりほどいた。「あれは真夜中の鐘だ。もう行かなくちやならない。ロッジの奴らは真夜中に集会を開くんだ。おやすみのキスを、ヴェロニカ」

ヴェロニカは自らの意志でルーカスの首に腕を巻き、キスをした。

第八章

ヴェロニカは不吉な夢にうなされていた。夢のなかにルーカスの姿がさまよい、ときにブルームズベリーの屋敷にいたころの男として現れた。また、あるときには、川辺の森のなかで人生について語った男として現れる。彼が展開す生命観は、彼女の理解力の地平をはるかに越えるものでありながら、白い道が旅人を誘うように、彼女を誘うのであった。しかし彼女にとって、彼は首都してなにか理解しがたい欲求に駆られていて、自分でもそれを説明できず、そのくせ彼女に助力を求めているようであつた。なにを求められているのか、彼女もわからなかつた。彼は夢の迷路のなかに忽然と姿を現し、懇願の手を差し出す。そういうときの彼の目は黒い湖のようで、彼女のやさしい心をかきたてるのである。彼女は一生懸命手を差し延べるが、彼はつねに指のあいだからすりぬけてしまう。彼が困っていると思うので、彼女は茫漠たる空間を苦勞して突き進んでいくが、それでも彼は見つからない。心騒がすこの夢から、彼女は一時間ごとに目覚めるのだが、わかることといえば、差し迫る惨劇の影が意識の入り口で待ち受けていることだけだつた。

しかし夜明けのちよつとまえ、変化が生じた。それまで曖昧模糊としていた不吉な影が急速に明確な形を備えはじめた。それは濃密化し、細く伸びて、巨大な十字柄の剣の形になつた。その剣は一旦構えるかのように静止すると、一気に下方へ突いてきた。背後になにか宇宙的な《腕》があるかのよ

うな勢いだった。一瞬それは生き物の心臓に突き刺さったかのように刀身を震わせ、再び上がっていった。そしてヴェロニカは死のような眠りに落ちこみ、それ以上覚えていなかった。

彼女は夢も見ずに重苦しい眠りに就いていた。番人の老婆に荒々しく揺さぶられなかったら、昼過ぎまでそのまま寝ていたことだろう。老婆の顔に浮かぶ恐怖の表情を見て、なにかが起きたとわかった。歯のない口からもれる言葉ではわけがわからない。ヴェロニカは着物をひっかけると、老婆のあとについてルーカスの部屋に行った。

彼は寝台に横たわっていた。仰向けで体を伸ばし、両腕は胸のところ、左手を上にも組まれている。まるで墓所にある彫刻像のようであった。顔に陽光がさしている。窓の外で咲いている蔓薔薇の花弁が室内に舞い込み、白いベッドカバーに散っていた。シーツはしわひとつなく、枕は黒髪のある場所だけがくぼんでいる。室内はまったく完全に静かであり、ヴェロニカは部屋には自分ひとりきりなのだと思った。まるで静かに服を脱ぐように、ルーカスは夜のうちに自分の体から引き取り、影の領域へと移っていったのである。あの剣の一突きを待っていたのか、それとも自分から扉を開けて出て行ったのか、彼女にはわからなかった。わかっていることは唯一、いま眼前にあるものは、これまで教えられてきた死の概念とは異なるものだということだった。ルーカスは行ってしまった。かつて二人が出会う場所として用いてきたオリブ色の肉体は、もはや使われることはないのだ。彼がもう一度連絡してくるのか、彼女にはわからなかったが、ルーカスがそれっきり消えてしまったとは思えなかった。彼女の心中にあるものは悲しみでも損失感でもなく、ただ当惑だけだった。あの人はどうやってあたしと再接触をはかる気なんだろうか？ あたしを覚えているかしら、それとも忘れるのか

しら？ 室内には騒がしい気配がなかった。彼の旅立ちとともに鬨争の物音は消え失せており、室内にはただ虚がもたらす平安だけが漂っていた。

ヴェロニカは窓脇の椅子に腰かけ、陽光にきらめく庭を見ていた。ときおり寝台の上の陽光に照らされる顔を見た。

ほどなく彼女の孤独は妨害された。男が部屋の入り口に立ち、室内を見回していた。その手には商売道具が入った茶色の鞆を下げている。老女が呼んできた医者のものである。彼は枕の上の平安な死に顔を眺め、それから窓脇の女を眺めた。こちらにも同様の平安が見てとれた。それから彼は寝台のほうへ歩を進め、一言もしゃべらずに検査を始めようとした。

「その方に触れてほしくありません」と彼女は言った。この日最初の発言だった。

新来者はやさしく返答した。「そうはいかないと思えますよ。やらねばならぬことがたくさんあるのです。だが、ご安心ください。この方にとつても、あなたにとつても、最良の便宜を計らいますよ。教えてください。こちらのご親戚ですか？」

「秘書でした」とヴェロニカは言った。

「なるほど」と医師は言った。「まあ、ともあれ、できるかぎりのことはいたしましょう。ところで、こちらのご親戚の連絡先をご存じですか？」

「いいえ」とヴェロニカ。「親戚はいないと思います」

「ここに長らくいらっしやったわけではないでしょう？　以前はどちらに？」

ヴェロニカは教えてやった。

「それで、ここでなにをなさってらした？」

思わずヴェロニカは答えそうになったが、すぐにそれはできないと思った。そこで彼女は単なる事実陳述に終始することにした。

あたしはミスター・ルーカスに雇われていました。彼は辞職して、あたしを連れてここにいらっしやいました。辞職の理由は知りません。誰に雇われていたのかも知りません。なにかの研究会みたいなものだと思います。とにかく、先生ご自身でブルームズベリーの屋敷にお問い合せになれば、あちらが教えてくれるでしょう。あたしには関係がないことです。給料が良かったから、あれこれ詮索しなかったのです。いいえ、あたしはミスター・ルーカスの親戚じゃありません。そう言ったでしょう。いいえ、彼のクリスチャン・ネームは存じません。年令も知りません。書類にはJ・ルーカスと署名なさってました。いえ、Jがなんの略か存じません。ジェームズ？　ジョン？　さあ、わかりません。あたしの知ったことではありませんし、考えたこともありませんでした。いつもミスター・ルーカスと呼ばせていただいてました。死因？　いいえ、まったくわかりません。昨夜はともお元気

のようでしたけど。病気のことなんか、おっしやってませんでした。ただ、最近疲れがちだとこぼしてらっしゃいましたけど。

医師は最後の台詞でようやく死因の手掛かりらしきものにありついた。そしてヴェロニカは、質問されなかったので、ルーカスの疲労の原因を通知する義務を感じなかった。事物の秘められた側面を扱う者たちは、自らの民族から離れた場所に立ち、身内のもめごとは身内のやりかたで片付けてしまふのである。ヴェロニカはルーカスが殺されたと見ていなかった。強制的に体を放棄させられたのだと考えていた。しかしあの人はしつかりした人だから、きつと大丈夫だと思っていた。それに彼から受けた指示のことも頭にあつたので、彼女はなんら行動を起こさずとはしなかった。最終的に医師がヴェロニカをなだめすかして部屋から追い出し、番人の老婆の手にあずけた。哀れな老婆はヴェロニカの周囲でおろおろし、不明瞭な音声で弔意を伝えようと躍起になっていた。

長い午後はゆっくりと過ぎていき、ヴェロニカは覚醒夢状態に陥った。次にどう行動すればいいのか、推測もつかない。しかしゲームはこれで終わったのではなかった。それは確実である。そして彼女は期待感を抱きつつ、次の出来事を待っていた。

審理の様子は地方紙に長々と報告された。医師の診断は、過労による心臓麻痺が死因であるとしていた。そうとしか言いようがなかったのだ。ヴェロニカに徹底的な事情聴取を試みても、慎重に分析してみても、当該人物の死因が明らかにならないのである。単に生きるのをやめたとしかいよう

がなかった。それでもなお、この事件にかかわった者全員の脳裏には、まだまだ明らかにされていないことが山ほどあるという奇妙な印象が残ったのであった。

死んだ男の連れだった若い女が、いろいろしゃべりたくない。それは全員がわかっていた。また全員が、ロンドンからやってきて死者の雇用主であったと証言したいかつい顔の男が、法廷ですべてをしゃべったとも思っていないかった。そして死者の懐に最近作成された遺言状があり、すべての財産を前出の若い女に残す旨が記されていたことが全員の知るところとなると、謎はいよいよ深まった。しかしその謎の回答を発見できる者はいなかった。全員がお手上げとなり、自然死という評決が下された。

審理終了後、いかつい顔の男がヴェロニカに会いにきた。彼の足音が砂利道で聞こえたとき、彼女はテラスにいた。彼は石の手擦りに腰をおろし、膝に肱をつけて前屈みとなり、ヴェロニカの目をまっすぐ覗きこんだ。

「さて、ミス・メインウェアリング、私は本当のところを知りたい。あなたとルーカスの関係はどういうものだったのだ？」

「あたしは秘書でした」とヴェロニカが答える。

男の目に変化が生じた。彼はヴェロニカを見透かすように眺めた。彼女を見ているのではない。男の視線は焦点を外れ、ぎらついていた。

「あなたは霊能者だな。体の外に出るのに慣れてる。教えてほしい。自分の意志で自由に出来るのか？ それとも誰かに催眠術をかけてもらい、押し出してもらおうのか？」

「お言葉の意味がわかりません」とヴェロニカは言い、できるかぎりしらばつくれた。

「意味がわかるうとわかるまいと、どうでもいいんだよ、こっちは。あなたの心にイメージが浮かべば、それを読むだけだ。ほんとうは、私のいいたいことは完全にわかっているくせに。さあ、ミス・メインウェアリング、信用してもらえないかな？ 私は友人として来たんだ。敵じゃない。われわれはちゃんとわかっている。あなたの能力がああいう使われかたをされたのは、あなたの責任じゃないとね」

ヴェロニカはそれでもしらばつくれることにした。すると男はきびしい声を放った。「知らないふりをしてもむだだ。ルーカスはすべてを白状したんだからな。それに、あの晚ロツジで物質化したあなたを見たのは私だったんだ。あなたが証人席にあがると、すぐに面が割れたんだよ」

この台詞を聞くや、ヴェロニカはハンカチを取り出し、避難場所を涙に求めた。いかつい顔の男は腹だたしげに口髭の端を引っ張った。こういった場合、女のほうがずっと有利にゲームを運べる。

「どうやら話し合いにはならないようだ」と彼は言った。「だが、覚えておくがよろしかろう。あなたがどれほど記憶されているか知らんが、それを口にせぬほうがいい。裏切り者の身になにが起きるか、とくと見られただろう。これ以上裏切り者を増やさぬよう、注意することだ」

ヴェロニカはハンカチから顔をあげ、男をまっすぐ見据えた。ここ数日で彼女のなかに新しい精神が芽生えはじめており、その精神が彼女を口を開かせた。

「あなたはそこまでお偉いのですか」と彼女は言った。「あなたには自ら法を執行する権利はないはずです。あれは処刑じゃありません。ただの殺人です。あなたはその報いを受けるでしょう。あの人に時間さえ与えてあげれば、きっと正道に立ち返ったでしょうに。でもその時間が貰えなくて、あの人は死んでしまった」

「それこそまさに、わしの意見での」と彼らの背後で声がした。驚き振り返ってみると、白い顎髭の老人が芝生をいつのまにか彼らのそばに来ていたのだ。

「わしはあの坊主には責任があつた。あれが自分の喉を裂いたナイフは、わしが持たせたようなものでの。じゃから、あんたはわしの手に一件を任せるべきじゃつた。あれはあれなりにわしのことを好いていてくれたし、わしの言うことはたいいて聞いたものじゃつた。じゃから、わしとこのお嬢さんとで——」老人は皺だらけの手をヴェロニカのほうに向けた、「あれを引き戻すこともできたじやろうに。あんたは今や派手にやらかしてくれて、おかげでこっちは成り行きの計算も立たぬわい。おまけに、このお嬢さんに対するあんたの態度はなんじゃ」

「強情な女だ」いかつい顔の男は吐き捨てると、かつてなく怒り狂つたように口髭を引っ張つた。「私はこの件からきつぱり手を引かせてもらう」

「もつと早くそうしてくれなかったのが残念じゃ」と老人が冷たい声で応酬した。そしていかつい顔の男は踵を返し、なお髭を引つ張りつつ、小道を歩いていった。

「さて、お嬢さん」と老人がヴェロニカのほうを向きながら言った。「この件を話し合つて、お互い打てる手があるか、見てみましょうかの。わしらはすべてわかつております。じゃから、おしやべりになつても、ルーカスとの約束を破ることはありませんぞ。その心配はありません。わしらが知らないのは、この件に於けるお嬢さんのお立ち場じゃ。なにをなさつておられたのか、おわかりでしたかな？ それとも、単にあれに操られていた道具にすぎなかったのかな？」

「なにもお話できません」とヴェロニカが答えた。「お話しなければならぬとも思えません。あなたがたはミスター・ルーカスを殺しました。その気ならあたしだつて殺せるでしょう。でも、なにもお話ししません」

老人は溜め息をついた。「お嬢さんはあれに借りがありません。となれば、これ以上無理強いはできませんでしょう」

ヴェロニカは驚いて顔をあげた。

「借り？ なんのことでしょう？」

「すると、あれは言わなかつたのですかな？ 打ち明けておらんかつたのですか？」

「あの人はまったくくにも教えてくださいませんでした。あたしは五里霧中です。推測するだけだったのです」

「ならば、パートナーでなかったのなら、どうしてあれにそこまで忠義をつくされる？ お嬢さんはただの道具、犠牲者だったのですぞ。わしの知るかぎり、一番えげつない生体実験に使われたも同然じゃったでしょうが」

ヴェロニカはかなたの夕日の残照を見やった。「おはなししても、おわかりになれないと思います」彼女はようやく口を開いた。「自分でも理解しているのか、あやしいんです。でも、あたしたちのあいだにはある絆があったのです。どういうものかわかりませんが、そう感じました。それに、あたしがついてあげなければ、あの人はひとりぼっちです。ひとりぼっちになれば、あの人は完全におしまいになってしまおうでしょう。あの人のなかにも良いところがあったと思います。だからあたしは、チャンスさえあれば、あの人はもっと良くなれたのと思うのです」

老人は手を差し出した。「あれを信じてやってください」と彼は言った。「あれを救えるものがあるとすれば、それはあなたの信仰心だけじゃ」

ヴェロニカは気がついた。この老人もまたルーカスを生きている存在と見なしているのだ。思わず質問が口について出そうになったが、なんとか押さえた。下手な質問で、知らないうちに重要事項を漏らしてはいけないと思ったからである。

老人はすでに前来た道を数歩戻りつつあったが、再度振り向いた。「あれはのう、お嬢さんのような子供には想像がつかぬほどずつと悪い男じゃった。あれを再生させようと思うなら、できるかぎりの信仰が必要となりますぞ。じゃから、お嬢さんの信仰を強めるために少し話をさせていただきますよう。大変つらい話じゃろうが。ルーカスがお嬢さんの身代わりになって死んだのをご存じかな？」

ヴェロニカは目を丸くした。

「わしの所属する《団》での、誰かが秘密を盗んでおるとわかりましたの。それで、その人間を撃つことになりましたのじゃ。向こうは知らんでも、わしらにはそれができます。するとルーカスがこれを知って、立ち上がり、こう言ったのじゃ。“その人間は道具にすぎない。自分に責任がある”と。そこで団員たちはお嬢さんをほっておいて、あれを撃ちました。それは大変な誤りじゃったとわしは思っております。告白した男は光に顔を向けていたのだから、再び道を歩み直す時間を与えるべきだと、わかつてよさそうなものじゃった。

「お嬢さん、どうやらあなたは《秘密の叡知》の暗い側を見てしまわれたようじゃ。それが悪用される場所もご覧になったし、情け容赦ない裁きに用いられる場所もご覧になった。じゃが覚えておいてもらいたい。もうすでに内なる意識で気づいておられるかもしれないし、わしの見るところ、お嬢さんはこの種のことにもまったく無知ではないようじゃが、ともあれ、団員たちの背後にある力そのものは善なのじゃよ。無意味に善と唱えて誤った用い方をする者もおるじゃろう。なぜならばとて、その力を背負って、なおかつ身をまっすぐ保てるのは力量を備えた人間だけじゃ。じゃから、オカル

トの道で失敗する者をきびしく裁いてはいかん。わしらの過ちや先見の明のなさを見て、間違つた判断をせんでもらいたい。無意味に怖がつて、そのために残酷にならんでほしい。わしらはある真実に奉仕しておるのじゃよ、お嬢さん。ただ、わしらはいつもそれをはつきりと感じてゐるわけではないのじゃ」

ヴェロニカは立ち上がり、老人に手を差し出した。「あたしはあなたがたとは違う人間です」と彼女は言った。「でも、あなたを信用できるように思います。あたしには頼る人がいません。なのに、よくわからない書類仕事が山のようにあるのです」

老人は彼女の手をとつた。「それは引き受けましょう。わしが引き受けたルーカスはあのさまになりましたが、今度引き受けた仕事はうまく処理するようがんばりましょうぞ」

老人はヴェロニカと三日を過ごし、彼女のためにいろいろと手続きをしてやった。たいしてややこしい作業ではなかった。明らかにルーカスが死を予期していたらしく、すべての準備を整えていたからである。彼の死の五日前のソウベリー将軍の死去により、ルーカスはかなりの資産家となつていたので、それがまるまるヴェロニカに引き継がれたのである。資産には川とその周辺一帯及び家が含まれている。無論、ヴェロニカが完全に遺産相続するにはさまざまな手続きが必要だった。そして老人はヴェロニカをひとり惨劇の舞台となつた陰鬱な家に残すことを大変心配していた。そこでせめて相続手続きの期間中、自分と妹の家で暮らさないかと主張した。しかしヴェロニカは固辞した。ルー

カスがこの場所からさして離れていないところにいると感じていたから、ここを去ってしまえば、絆が切れてしまうと思っただのだ。生前彼がいかに邪悪であろうとも、またこの家がいかに不吉であろうとも、彼女はどうしても離れられなかった。

そういうわけで彼女は老人に別れを告げ、なにかあれば連絡すると約束した。彼女は番人の老婆を唯一の相手として、孤独な生活に落ち着いてしまった。医師は、この件すべてをうさんくさく思っていたので、面倒から足を洗えてせいせいしていた。そして教区牧師はヴェロニカを黒羊と見なしており、彼女のもとに現れて魂を救おうとする気すらなかった。自分の率いる白く肥えむくった羊の群れから白眼視されなくなかったからである。

かくして日々は過ぎ去った。ヴェロニカはルーカスとともに過ごした短い時の日課を忠実に守っていた。午前中は敷地内を散歩して、川辺の丸太に腰掛ける。夕方にはテラスをそぞろ歩く。ほかのときは、あるいは居間にすわり、またルーカスが死去した部屋にすわる。ルーカスはきつとよく知っている場所をさまよっているにちがいないから、そこにいれば遅かれ早かれ出会える―彼女はそう信じていたのである。しかし幾日たっても、彼の存在を感じることはなかった。彼女の心に冷たい恐怖が忍びこんでいた。あの人は本当に死んでしまったのだろうか？ みんなが使っている意味での、死なのだろうか？ 彼が肉体を放棄したことはわかっていたが、それでもヴェロニカは、人格としてのルーカスの生存をかく信じていたのである。彼の性格を規定していた思考と感情の総合体は、いまだ願望によって活性化され、目的意志によって統御されているはずだ。そして彼女の連れであったものはこの総合意識であり、いま教会の墓地に埋まる五フィート九インチの肉と骨ではないのである。

夏は秋に移りゆく。そして夜雨の翌朝に目覚めてみると、ヴェロニカは冷たい風が吹いているのを知った。なにもなしで庭の散歩をするには寒すぎる。そこで壁にかかっていたよれよれのトレンチコートを手にした。ルーカスの手でロンドンから連れてこられた際に、彼女を包んでいたコートである。彼女はこれを着込むと、森のなかに入ってしまった。

衣服は不思議なものである。それを着る者の人格の一部を吸収するように思われる。ルーカスが放っていた霧囲気に包まれたような気がする。すると突然、ヴェロニカは彼の墓のところへ行きたい気分を覚えた。それまで一度も行ったことがなかった。村人の好奇の目が怖かったからである。しかし、いま、帽子もかぶらず、古いトレンチコートに身を包み、彼女は冒険に乗り出した。

ヴェロニカは回り道して森を抜け、教会に到着した。人に見られないように墓地に入る。男が一人、墓穴を掘っていた。小さい穴だったから、子供用である。その向こうには、他に三つの小さい土饅頭が並んでいた。こんな小さな村なのに、どうして子供がそんなに死ぬのかしら、おかしいわ、とヴェロニカは思った。彼女は墓掘り人夫と顔を合わせないよう生け垣越しに歩を進めたが、近くを通った際に会話の一部が聞こえてきた。

「―検死に四日もかかってよう、おまけにルノンの医者意見の聞くつてんで、また一週間も延期になつたんだぜ。やつとこさ Sampson が棺桶に入れることになつたんだが、手伝つたジョー・ウォレンが言つてたよ。仏さんは死にたてはやはやみてえで、斑点ひとつ出てなかつたつて―」

ヴェロニカがルーカスの墓をさがして教会の裏手に回りこんだとき、彼女の肘に触れる手があった。振り返つてみると、快活な顔をした血色のよい若者が、帽子を手にして彼女に話しかけていた。

「あ、あの――失礼ですが――ミス・メインウェアリングでらっしゃいますね？」

ヴェロニカは頭を下げた。

「でしたら、よろしければ――こちらです」そう言うと若者は彼女を案内してくれた。藪を抜け、墓地のはるか彼方の隅のほうに行く。村人たちはルーカスが自分たちとは違うと本能的に感じていたため、できるかぎり自分たちの親兄弟と離れた場所に彼を埋葬していたのである。

ヴェロニカは立ちつくしたまま、荒っぽい造作の新規土饅頭を眺めていた。人の知るルーカスのすべてがここに眠っている。すると心のなかに冷たい恐怖の潮が満ちてくるのを感じる。イチイの木陰にあるこの土饅頭に直面すると、死、世間という死というものが疑念の余地なく迫ってくる。風がおぞましい常盤木のあいだを吹き抜けていく。ヴェロニカは重いコートの襟を立て、ぬかるむ泥から足を抜いた。十二ヤードほど離れた場所では、案内してくれた若者が、帽子もかぶらず、ただ彼女を見ながら待っていた。そして彼女が墓から振り向くと、彼はぎこちない同情を示しながら近づいてきた。彼女の立場の曖昧さゆえに、いかにもぎこちない同情であった。ルーカスとかいう男とこの女性の関係がどんなものであろうとも（この点に関して村の見解は一致していた）、若者は孤独な娘がいよいよ孤独な墓に参っている光景に心動かされていた。

「ええつと—あの農場に一人お住まいとは、心細いでしょう」と彼はおずおずと口を開いた。「特に、あんなことがあったあとでは。一番気候がいいころでも、あそこはひどいもんです」

ヴェロニカはしばらく返事もせずに彼をじっと見上げていた。彼はがっしりした体格の、血色のよい青年だった。「お心使いください」と彼女は言った。「でも、一人じゃありませんから。それに、もうごたごたはおさまりましたし、静かなのが一番です」

「でも、あの農場は若いご婦人にはひどい場所ですよ。いつまでご滞在の予定で？」

「さあ」とヴェロニカ。一時間前なら、生涯とどまるつもりだと答えたであろう。しかしルーカスは死んでしまった。すべて終わったのだ。もうとどまる意味はなかった。

「いまから農場にお戻りですか？ よろしければ、森を抜ける近道をお教えしましょうか。村を通らずにすみますよ」そう言うとは彼はヴェロニカを案内していった。教会の庭を囲む低い石垣の崩れから、小道が森に続いていた。「ぼくはアレックス・バトラーといいます」と彼は言った。「父はこの村の医者です」

「お目にかかりました」とヴェロニカ。「ミスター・ルーカスが死んだときにいらっしやった」

「ああ、そうですね」とアレックスがぎこちなく言った。「おや、手をごらんなさい！」と彼が叫んだ。「血が！」

ヴェロニカは驚いて手を上げた。手首のあたりに細い血の糸が流れていて、爪の先から大きな血の滴が足元の枯れ葉にしたたり落ちていく。崩れた石垣の灰色の石にも、同じように深紅の染みがついている。ヴェロニカはトレンチコートの袖をたくしあげた。すると血は前腕の静脈からどくどくと噴き出しているのだ。ルーカスが死ぬ前夜につけた傷が、どういう理由でか、再び口を開け、鮮血を流しているのである。

「これはひどいな」とバトラーが言った。「どうしたんです？」と言うと大きな白ハンカチを取り出し、意外と手際よく手当をした。しかし彼は急いで手当をする様子ではなく、ヴェロニカが察するところ、ちよつと言葉をかけてやれば、さらなる奉仕をいとわぬ風であった。彼女は毅然としてコート袖をおろし、怪我した腕をふところに押し込んだ。しかし、しばらく二人はその場に立っていた。男は見下ろし、女は見上げていた。彼らのいる場所は窪地であり、ゆえに風から遮られていた。樹冠をゆらす風があつても、下草はそよもしなかった。しかし、彼らが立ちつくしていると、風がまよいこんできて、周りで吹きはじめた。小さな風の渦が枯れ葉を巻き上げ、小旋風と化した。この迷風には奇怪な冷たさがあった。まるで洞窟から吹き上がる風のようなのだ。ヴェロニカは震え、コート襟を立てた。そしてバトラーは、どういう衝動に駆られたのか、自分でもわからなかったが、肩越しに背後をちらりと覗いた。それから二人は同時に小道を早足で歩きはじめた。

バトラーは錆びだらけの鉄門脇までヴェロニカを送ってきた。それから決心がつかない様子で立ち止まり、お入りなさいという言葉を待っていた。しかしヴェロニカは考えることがいっぱいあったので、一人になりたかった。結局彼はしぶしぶさよならを言い、戻っていった。

灌木を抜けるあいだも、ヴェロニカの周囲では冷たい風が吹いていた。背後で枝を鳴らす風の音が聞こえた。頭上では生え放題のライラックが風にゆらぎ、シャワーのように葉を散らす。テラスに面した窓のところで彼女は立ち止まった。掃除されていない石段の隅で木の葉の渦が舞っている。鍵のかかっているガラス扉を開くと、血のように赤い蔦の枯れ葉が一陣の風とともに流れ込み、床を這うように走り進む。枯れ葉は暖炉の前で目がくらむような旋舞を舞いはじめた。

ヴェロニカは大きな革張りの肘掛け椅子に身を沈め、くすぶる炎を眺めていた。風の助けを失った枯れ葉が、色あせた絨毯の上できらめいていた。すべては静かだった。

ヴェロニカは行く末を考えていた。女の直感でわかった。バトラーとバトラーが代表している物事に心を傾ければ、彼女は魂を普通の世界に戻せるだろう。しかしルーカスの手で見せられた世界は、《未顕現》の暗い海から《宇宙の炎》へと続く魂の道であった。それが忘れられないのだ。誰だって無理である。彼女は心のなかで思っていた。遅かれ早かれ、《不可視》からの誘いがかかるにちがいない。それにすぐさま応答できるよう、彼女は身構えていなければならないのだ。

彼女の気分は次々に替わっていった。庭師からの挨拶。道端で遊ぶ子供たちの歓声。ルーカスは死んでしまい、葬られ、悪い夢は終わった。すると陽光は薄れ、宵の風が家の周囲を吹き抜ける。木の葉は螺旋に踊り、暖炉の燠火から発せられる淡い輪のような光。部屋の方の暗がり。すると不可視の世界が彼女の身にひしひしと迫り、両界をわけるヴェイルがきわめて薄くなっていく。裂け目から

影を落とす偉大な《存在》の影が揺らいで見える。遅かれ早かれ、渦巻き過ぎ行く空間のはざまから、彼女の知人が現れ、彼女を召喚するのだろう。

やがて番人の老婆が朝刊を届けにやってくる。そしてヴェロニカは夢想を払いのけ、現実へと戻っていくのであった。

第九章

そういうわけでヴェロニカの気分は交互に入れ代わっていたが、それでもかびくさい陋屋にとどまっていた。一方バトラーはせつせと足を運び、出来立ての墓の前で始まった交友を育んでいた。顔を出す時間は決まっておらず、午前中のこともあればティータムや夕食後のこともあった。しかし彼は食事をよばれようとはしなかった。たとえすでに準備されていてもである。食事を取れば、家に帰ってからいろいろと言いつけることになるからである。自分が農場やその孤独な居住者のもとによく顔を出していることを、バトラーは家族に知られたくなかった。世間のやり口に不慣れたヴェロニカは、彼が拒否するのを不思議に思っていたが、理由を推測できなかった。バトラーは逆境の美女を雄々しく守る擁護者であったが、それもある線までである。その線を越えれば、自分の世界のほうが大事であった。

それでもなお、数々の困難にもかかわらず、彼は頻繁に教会の裏手の森の小道を歩いてやってきた。そのため、ヴェロニカの農場の裏庭を守っている、樽に鎖でつながれた巨大なマスチフ犬も、彼の足音を覚えてしまい、吠えるのをやめるようになった。ヴェロニカと一緒にランプに明るく照らされた部屋にすわっているとき、バトラーは何度も求婚しかけたが、そのたびにためらっていた。彼女はくつたくなく子供時代や職業訓練校時代のことを話してくれたが、ルーカスの話となると、検死官に語った以上のことを話してくれないのである。

あたしはミスター・ルーカスの秘書でした。ええ、あの方がロンドンで比較民俗学研究会のお仕事をなさってらしたときのことです。あの方がロンドンを離れられたとき、あたしもお供してベツカリングに来ました。とつてもよくしていただいたので、御恩はずっと忘れないつもりです。

このあたりの住人全員を同じく、バトラーもこれ以外にいろいろとあるはずだと思った。しかしヴェロニカはヒントすらくれなかったし、彼には直接質問する勇気がなかった。

日々は実に快適に流れていった。バトラーは正式の婚約者なみの頻度でヴェロニカに会っていた。それでいて彼は人目につくこともなく、ゆえにさまざま不快から免れていた。競争相手など影も見えなかったから、慌ててがつつく必要にも駆られなかった。ヴェロニカのほうも、バトラー同様のなりゆき作戦を採用していた。昔ならばバトラーは十分に白馬の王子様にして竜殺しの役を演ずる資格があつたであろうが、昔は昔、今は今である。王子様がいない間に、短い嵐のような事件があり、ヴェロニカは生命力の炎に燃える男を知ってしまった。その熾烈な火炎の前では、他の男はすべて子供か老いぼれに思えるほどであつた。ルーカスだけが力を備えた男であつた。バトラーは子供であり、あやつり人形である。ヴェロニカは彼と一緒にいるのが好きだつたし、自分に好意を抱いてくれるのが嬉しかった。だが、バトラーは彼女のなかに火をつけることがなかった。

事態は永久にそのまま推移するはずだったのであるが、ある日、不意に訪問してきたバトラーは、ヴェロニカがペンを片手になにやら法律書類らしきものと悪戦苦闘している場面に遭遇した。手いまいましいという申し出は受諾された。すぐに彼は、自分がなみなみならぬ資産の問題に取り組んでい

ることを発見した。こうなると事態の様相は一変した。バトラーは金銭づくで動きたくはなかったのだが、ヴェロニカが個人資産、しかもかなりの資産を持っているという発見は、一考に値する要素であった。

バトラーは椅子をテーブルまで引き寄せ、ヴェロニカが配当金支払証にいろいろ書き込むのを手伝った。ランプを点灯する必要がある程度に暗かったとはいいいながら、おそらく彼の顔は必要以上に彼女の顔に近づいていた。突然、窓ガラスに枯れ葉がぶつかるとかサカサという音がした。突風がすべての窓をガタガタとゆらしはじめた。二人は驚いて顔をあげた。それまではまったく静かな夜だったからである。

「嵐が近い」とバトラーは言った。そう言うあいだにも、新たな突風が勢いを増して窓を撃った。窓は膨らみ、ゆれ、金具が吹っ飛んだ。フランス窓が爆発したように開き、枯れ葉まじりの強風が室内になだれこんできた。ランプは消えたが、暖炉の火は燃え上がり、灰は枯れ葉とともに暴風の舞を舞っていた。バトラーが窓枠をつかみ、むりやり閉めた。それからマツチを擦り、ランプに再び火をつける。新たに輝く光のなかに、床に点々と落ちる赤い枯れ葉と、ゆっくり下降する灰が映しだされた。ヴェロニカは飛び散った書類に囲まれて、ただうつろな目で虚空を見つめていた。なにか外の荒々しい夜のものが突風とともに室内に入りこんだ。騒ぎはおさまったが、闇の雰囲気はまだ部屋にとどまり、息をひそめている。ランプの明かりは暗くなり、暖炉の火は熱を伝えなくなる。そして不可視のものを隠すヴェイルはほころび、軽く息を吹きかけるだけで四散しそうである。ヴェロニカは感じた。室内に漂う奇怪な雰囲気、もう一段階濃度を増せば、二人の肉眼でもなにかが見えるだろう。

しかしバトラーは、なんともおめでたい無神経のおかげで、なにも気づかず、散らばった書類をかき集めると、パイプに火をともし、再びテーブルについて仕事にとりかかった。

さいわい仕事はほとんど終わっていた。ヴェロニカはこれ以上署名を必要とする書類に注意を注ぐのが困難だった。バトラーもまた、夕食の時間が迫ってきたので慌てていた。家族との夕食に遅れて行動に不審の念を抱かれなくなかったのである。そこで仕事は大急ぎでやつつけてしまい、いざ帰宅と立ち上がった。しかしヴェロニカは彼を行かせたくなかった。しかし、いくら一緒に夕食をとせがんでも、彼は渾身の抵抗を示した。彼女はフランス窓を開け、テラスに出た。驚くことに、風は吹きはじめと同様、ぴたりと止んでいた。生け垣に囲まれた庭に大気の動く気配はなかった。突如、谷一帯に悲しげな犬の遠吠えが響きわたった。その音は老番犬が住む離れ家のほうから聞こえていた。バトラーは本能的に犬の苦悶の叫びに応答し、テラスの角を猛スピードで走っていった。ヴェロニカはすぐ後ろから追いかけていった。

犬小屋がわりの樽の外の敷石の上で、老マスチフ犬が脇腹を下にして横たわっていた。黒い鼻面から少し泡を吹いており、息が荒かったが、それ以外には問題がないようだった。犬は二人の存在に気づいて少し頭をもたげたが、すぐに敷石に頭をおろした。完全に疲労困憊しているみたいだった。

バトラーは膝をついて犬を調べた。「かわいそうに」とバトラー。「きつとなにかの発作を起こしたんだ」そう言うと言重量級の犬を腕に抱いて、なんとか犬小屋のなかの藁に寝かせてやった。

「いったいどうしたというのかしら？」とヴェロニカ。「昨晚も、とつても妙な吠えかただったのよ。犬があんなふうには吠えるの聞いたことないわ。一声悲しげに鳴くの。庭師が教えてくれたけど、あれは死の遠吠えっていうんですって。だから下の小屋のほうじゃみんな大騒ぎだったそう。死人の魂が通るのを見ると、あんなふうには吠えるそうよ」

「あほくさ！ そんな話、まじめに受け取ってるんじゃないだろうね、ヴェロニカ」とバトラーが叫んだ。それから彼女を連れてテラスに戻り、彼女が無事に室内に戻るのを見届けると、彼は村のほうに歩を進めた。

頭は星のあいだにあり、足はほとんど地についていない。バトラーは有頂天で歩いていた。ヴェロニカは手を伸ばせば届くところにいる（プロポーズして拒否されるなどまったく念頭になかった）。そして彼は森の小道を歩きながらメンデルスゾーンの結婚行進曲を口笛で吹いていた。教会の敷地に足を踏み入れたとき、昇ったばかりの月が暗いイチイの木々のあいだに光の湖をつくりだした。その銀色の水面のひとつに、粗末な土饅頭が浮かびでていた。いまだバトラーの選んだ娘に影響を及ぼしている男がその下に眠っている。バトラーは土饅頭のよこで立ち止まった。ここにはどんな秘密が埋まっているのだろうか？ この件に関してははずれヴェロニカからはつきり聞かなければならない。夫婦のあいだに隠しごとはよくないのだ。

「あばよ」と彼は声に出し、下に眠る男にあごで挨拶した。「幸運を祈ってほしい」。そして彼は再び口笛を吹きながら立ち去った。

ヴェロニカは農場に一人残され、孤独な夕食をとっていた。それから火に当たりつつ、炎を見つめ、それまでの人生を振り返っていた。サリー州の丘で過ごした、なにも起きなかった子供時代。職業訓練校時代の緊張の日々。そしてルーカスと過ごした日々では起きたことが多すぎた。そしてこの見捨てられたような場所で彼が死んでしまい、奇妙に離れられない。それからバトラーのことを考えた。彼が近々結婚を申し込んでくることはよくわかっていた。ルーカスさえいなかったなら、きっと彼が好きになったにちがいない。バトラーは大きくて、ブロンドでハンサムで、性格もよい。彼女に接近してくるにあたって彼が採用した方法は、なかなか礼儀正しいものであり、それも彼女の気に入っていた。しかし彼の背後にはルーカスの暗い人格が薄気味悪く浮かびでている。ブルームズベリーの屋敷に入る前の彼女であれば、きっとバトラーに魅力を感じたであろう。しかし彼女の本質のある側面が、バトラーが理解すらできない生に目覚めてしまっていた。バトラーでは、彼女は満たされないものである。

ルーカスは時ならずして人生の最高潮のときに逝ってしまい、仕事は終わらぬままで、まだこの世に未練が残っている。彼女にはわかっていた。もし可能ならば、彼は戻ってくるだろう。ブルームズベリーのころ、ルーカスに抱いた恐怖は忘れていた。彼女がおぼえているのは最後の四十八時間のルーカスであり、感じるものは二人のあいだに存在する不思議な絆なのであった。

ヴェロニカがひとり物思いに沈んでいると、その砂利を鳴らす音が注意を引いた。カーテンを引いていない窓に影が現れ、なかを覗きこんでいる。それは巨大なマスチフ犬であった。犬小屋から抜け出してきて、いま明かりのついた室内を覗きこんでいるのである。緑色に輝いく犬の目のなかに、

ランプの明かりが反映している。その不思議な白熱した光を見てみると、催眠術をかけるときのルーカスを思い出した。彼の目も、まったくに内なる光りに輝いていたものだった。実際、今夜はルーカスがとても近くにいるように思われる。

ヴェロニカは犬をまったく恐れていなかった。犬は好きだった。なかに入れてやろうかどうかどうしようかと迷っていると、マスチフは後足で立ち上がり、窓に前足を押し付けることで問題を解決した。がたがたの留め金具は開いてしまい、犬が入ってきた。巨大な毛むくじやらの四足獣であり、黒い鼻面には白いものが混じっている。老犬だったからである。

夜風が寒かったから、ヴェロニカは部屋を横切り、犬の後ろで窓を閉めた。犬は暖炉のほうに歩いていき、敷物の上にすわると、室内を見回した。普通の犬ならば、知らない場所に来たときは、あれこれ匂いを嗅いでまわるものだが、この犬は鼻よりも目を用いており、あちらこちらを向いては状況を確認している様子で、特にヴェロニカをじろじろ見ていた。

ヴェロニカは暖炉脇の椅子に戻った。すると犬もやってきて、彼女の前に立ち、茶色の犬の目で彼女の顔を覗きこんだ。彼女は前屈みになり、覗きかえした。「昨夜はなにに吠えてたの？」と彼女は言った。犬はフンと鼻を鳴らし、ウウと低くうなった。そして無骨な前足で彼女のスカートをつかいた。それから近づいてきて、巨大な黒い顎を彼女の膝に載せた。ヴェロニカは背を曲げて犬の目をまっすぐ覗きこんだ。「ミスター・ルーカスにまた会ったら、あたしが会いたがっつると伝えて」

犬は安堵したかのようにウウウとうなり、その場にすわった。口を開けると大きな赤い舌を見せ、犬にできるかぎりの笑いを見せた。ヴェロニカはその笑いがまったく気に入らなかった。口のきけないこの獣が笑うなかに、なにか邪悪なものを感じたのだ。「おすわり」と彼女は暖炉前の敷物を指さしながら言った。犬はおとなしく彼女の指示に従った。彼女はそれから刺繍をはじめた。犬は足元にすわって、じつとしたまま、しかし彼女の動きを逐一眺めていた。やがて寝る時間となり、彼女は立ち上がった。

「おいで」とヴェロニカは連れに言った。「今夜はつないでおくからね」

犬はおとなしくついてきた。ヴェロニカは犬の太い首に手を置き、誘導して庭を進んでいった。巨大な生き物は彼女のよこをパタパタと歩いている。犬小屋のところにくると、マスチフが鎖を外した方法がわかった。首輪ごと頭を抜いたのである。そこで彼女は慎重に首輪を締めなおした。この大きな獣を野放しにするのはいただけないからである。たしかに、いまのところは実に友好的な生き物である。だが、窓辺に音もなく現れたときの姿は、なんとも邪悪な感じがしたのだ。

彼女は明かりのついた部屋に戻ったが、彼女のいないあいだに暗闇が入り込んでしまったように思えた。暖炉のなかで薪がうごめくたびに、炎が勢いを増したり衰えたりする。そのたびに室内は発作のように明滅し、暗闇を身近なものに感じさせる。ヴェロニカは不吉な影から逃れるように、急いで階段を上がっていった。

翌朝になつてみると、神経質になつていた自分が馬鹿のように思える。それでも、巨大マスタフが家の周囲をうろつくことを考えると、ヴェロニカはぞつとした。なにせ巨大で強い犬であるから、いざ機嫌が悪くなれば、それはもう歓迎されざる客となるであろう。朝食後、ヴェロニカはお犬様に表敬訪問してみた。昨夜の奇妙な発作の後遺症がなければよいが、と思つていたのである。

いざ犬小屋に着いてみると、お犬様は挨拶しに出てこない。彼女が樽の入り口前に膝をついたとき、ようやく応答するように顔を突き出してきた。太陽がまぶしいらしく、かすんだ両眼をしばいたが、すぐに頭を引つ込めてしまった。もういくら呼んでも出てこない。しかし、暗がりのなかでは犬の目が獣特有の奇妙な緑色に光っていた。犬や犬小屋やその周囲の“感じ”が、なんともいやなものだったので、ヴェロニカはすぐに退却し、あわてて裏庭とその居住者をあとにした。

テラスの前の芝生のところにやつてきたとき、戻ろうかと考えた。犬にあんな感じを覚えるなんて馬鹿げている。昨夜はあの愉快な老犬がとても楽しかったのだし、ともあれ、あれは明らかに病気のようだ。灌木のあいだに庭師がいるのを見つけると、彼女は犬の件で話をしにいった。すると庭師の言うことには、今朝は餌を口にしないという。しかし庭師とて、あの巨大犬を単独で診察する気はなかつた。しかし、村のほうには腕のいい獣医がいるという。よければ、ひとつばしりして呼んできましようとのことだった。

ルーカスのコートに身を包み（氣候が寒くなって以来これが彼女の必需品となつてる）彼女は川沿いの散歩に出かけた。歩いていくうちに、小道から少し離れたところにある労働者の小家屋の脇を過

ぎる。数人の子供たちが、どこかおびえの混じる好奇の目で彼女を眺めた。年長者たちは戸口のところから覗いている。その視線にヴェロニカは、一部憐憫、一部敵意を感じた。彼女はそのまま歩いていった。彼らがどう思おうと関係なかった。

アレックス・バトラーに関しては決心がつかない。昔の自分であれば、彼の気楽で愉快な外見に十分満足したであろうが、いまの自分はルーカスを知ってしまった。彼女は二人の自分のあいだで引き裂かれていた。もう一度サリーの丘のヴェロニカに戻りたいのなら、バトラーが眼前に広げてくれた道を歩めばいいのである。彼女は秘められた王国に深く入り込んでしまっていたから、外界の住人とすっかり結ばれることだけが、彼女の帰還を可能とするのである。日に日に強くなっていく内なる直感によって、彼女はこれすべてを悟っていた。偉大な《手》が彼女の後ろで不可視の世界への門を開き、《十字の印》で封印したことを、彼女は覚えていた。もう一度あの世界を求めることは禁じられたのだ。しかしいま、うまく言葉にできないし、具体的に感じることもないのだが、なんとも玄妙な方法で、あの世界のほうが彼女に近づいてきているように思われる。

ヴェロニカが受けてきた教育、家庭生活、宗教教育、すべてが声を揃えて、ここ数カ月の奇怪な夢を忘れてバトラーに象徴される健全かつ正常な生活に戻れと命じていた。しかし彼女はルーカスを知ってしまった、忘れることができない。彼は地平を越えて続く道の光景を彼女の魂に見せつけていた。バトラーに運を賭けてしまえば、彼女は防護壁に囲まれた狭い空間に押し込まれるだろう。そこに落ち着けるはずもなかった。しかしヴェロニカは、このままひとりきりでいれば、一步一步、わずかに垣間見た深遠な不可視の世界にはまっていってしまうこともわかっていた。この恐怖もあいまって、彼女はバ

トラーの良い面だけを見ようとしていたといえる。バトラーが提供できるものを、死してなおルーカスが与え得る高みと恐怖に対する代替案として考えたかったのである。

こういったことを考えていたため、その晩アレックス・バトラーが会いにきたとき、彼女はあめつたにないゆつくりとしたモナ・リザの微笑を浮かべてしまった。そしてこの微笑が彼の決意を固めたのである。

「ヴェロニカ」と彼は言った。「ぼくがなんのために来たかわかるかい？」彼はヴェロニカの大きな灰青色の瞳を覗きこんだ。すると疑惑の念に駆られた。彼女の瞳にはヴェイルが掛かっている、なにかを隠す遠い瞳であった。この女性には彼が理解できない深みがあった。「ヴェロニカ」とバトラー。「妻になつてもらいたい」

ヴェロニカは答えなかった。ほお杖をつき、身じろぎもせずすわったまま、炎を見つめていた。彼女の想像力は石炭のあいだにルーカスの顔を描きだしていた。

部屋の隅から聞こえるかすかな物音が彼女の注意を引きつけた。枯れ葉が迷いこんだ風に煽られたの、窓枠を越えて磨きあげられた室内の床に落ちた。

「窓の野郎め」とバトラーは叫び、ドタ靴で部屋を横切ると、荒つぽく窓を閉めた。暖炉に戻ると彼は再びヴェロニカの前に立った。「さあ、ヴェロニカ」と彼、「どうだろう？」

ヴェロニカには、見えざる闇が開いた窓から室内に流れ込んだように思われた。《不可視》に対する昔日の恐怖が、新たな力を備えて蘇った。彼女はバトラーのほうを向くと、両手を差し出した。しかし彼の目を覗きこんでいると、突然、自分は彼に与えるものをなにも持っていないことを悟った。彼女の魂はすでに別の男を追って闇のなかに消えていたのである。彼の背後に、部屋の四隅から闇が湧きあがり、暖炉の周囲に集まりつつあるのを見た。突然ヴェロニカは、相手の手を強く握った。

彼女は不確かな足取りで立ち上がった。「考える時間があるわ」と彼女は言った。「明日の朝、来てちょうだい。そのときに返事を」

バトラーは彼女のよこで背筋を伸ばし、彼女を抱きしめると、キスをした。一瞬、ルーカスの顔が、怒りによがんだ顔が、ヴェロニカの目に浮かび上がった。バトラーが彼女を放した。「さよなら」と彼、「明日の朝一番に来るからね」

後ろ手で窓をしつかり閉めると、彼女はたたずんだまま、砂利道に響く足音が遠くなっていくのを聞いていた。彼は森の端に到着したらしく、柔らかい土の道では足音はしなくなった。突然、ヴェロニカは心臓が止まる思いだった。音もなく、影のようにつつと、マスチフが窓のそとを動いていたのだ。地に鼻をこすりつけ、バトラーの臭路を追っている。

ヴェロニカは、五感が麻痺したまま、窓枠にもたれかかった。大声をあげて彼に警告するべきか？手近の武器をつかんで後を追うべきか？ 近所に助けを求めに走るべきか？ 逡巡するうちに、夜を

引き裂く悲鳴が響きわたった。凄まじい、恐怖に満ちた悲鳴は、途中でとぎれた。それから静寂がおとづれた。ヴェロニカは膝から崩れ落ち、近くの椅子のクッションのなかに身を投げ出した。

しばらく彼女はクッションに顔を埋めたまま横たわっていた。それから顔を上げる。目を闇に据えたまま、彼女は待っていた。ぼうつとした影が芝生の上を動き、続いて大きな頭がテラスに続く石段の上に現れた。犬は窓のそとに立っていた。

鼻面から暗い色の泡が糸を引いており、横腹は起伏を繰り返している。犬は年老いており、格闘は体にこたえた。ヴェロニカの目が犬の目を覗きこんだ。奇妙な蛍光を放つ獣の目であった。マスチフは後足で立ち上がり、前足を窓に当てた。ヴェロニカは金縛りにあつたまま、がたがたの留め金具が押されて内側に曲がり、窓がバンと開くさまをただ眺めていた。とらぶちの両肩が入り口をふさぐ。犬は招待を待っているかのように立ち止まっていた。ヴェロニカは物音ひとつたてなかつた。すると犬は入ってきた。

マスチフは近づいてきて、ヴェロニカの膝のうえに鼻面を乗せた。それでも彼女は動かなかつた。奇妙な麻痺のために動けなかつた。その麻痺感が犬の心にも伝わつたらしい。犬の首筋の毛が怒りに逆立ち、歯のあいだから低い唸り声が発せられたからだ。それから、ヴェロニカの目の前で、犬の瞳孔がゆつくりと収縮していき、緑茶色の不透明円盤となり、彼女を睨みかえした。ある男の顔が犬の顔に重なって見えた。はるか昔に聞いた狼男の話が脳裏に蘇る。半人半獣、魔術師の魂が宿る獣——童話と怪談がいっしょくたになつて心を駆け抜けていった。

そのとき、ヴェロニカは気絶した。我に戻ったとき、犬はすでに消えていたが、窓はまだ開いていた。ヴェロニカは震える手でそれを閉めた。目が眩む。五体に感覚がない。彼女は自分を引きずるように、寝室へ上がっていった。

第十章

ヴェロニカが目覚めると、暖かい開きの陽光が部屋に差し込んでいた。耳に小鳥のさえずりが聞こえる。一瞬、気分が高揚したが、すぐに陰がよぎった。ルーカスを思い出したのだ。彼は死んでいない。彼女はある種の内的確信でそれがわかっていた。さらに、彼がヴェロニカを求めのをやめていなかったこともわかった。目には見えないけれど、どこか近い場所で、かつてルーカスであった暗黒の霊が、冷たい旋風と化して枯れ葉を巻き上げたのである。しかもそれは、フランス窓のひ弱な金具を突破するほどの力を備え、怒れる手でなぎたおすように、彼女の書類を床に散乱させていた。

いまや彼女にはすべてがはつきりとわかった。ルーカスは肉体を失い、不安定な利他的形でしかこの世に顕現できないのであるが、なにが起きているかはすべて知っていて、生前同様、得体の知れない意志によって活性化されているのだ。どれほどの嫉妬とやり場のない愛憎に駆られたのか、彼は犬の体に憑依したのである。ブルームズベリーで過ごしたころ、ヴェロニカは狂人の夢としか思えない世界で動いていた。ルーカスが彼女の首にはめた見えない首輪は、ありふれた暗示の所産であったといえる。しかし、人の目と意図を有するこの犬の件はどうとらえたらいいのか？ しかし、ヴェロニカはもはやルーカスを、自分に対して心を開いた男ではなく、自分のあやしげな目的のために容赦なく彼女を用いた男として考えるようになっていた。あたしの魂に手をかけることができれば、きつと

あたしを闇の世界へ引きずり込むだろう——陽光きらめく寝室にひとり、すでに闇の冷氣をあたりに感じるがごとく、ヴェロニカは震えていた。

しかし、彼女はそう長いことひとりではいられなかった。番人の老婆が現れ、身振り手振りで、誰かが面会のため階下に来ている旨を伝えた。あわてて服を着ると、ヴェロニカは階段をおりて陋屋の荒れた広間に出た。二人の男が立つており、一人の顔には見覚えがあったが、もう一人は初顔だった。前者はルーカスが死去した際にやってきた医師であり、同時にアレックス・バトラーの父親でもあった。医師がそこにいるということは、この一件に関するすべての恨みつらみが、今から展開されることを意味していた。ヴェロニカは自己弁護もできず、説明もできず、まして真相を教えることもできないので、検死の際の戦術に頼るしかなかった。彼女の尋問官たちは、尋問では明らかにならない事情が本件に存在することを確信していた。また彼らは、特に医師は、二つの死になんらかの関連があるとはつきり言つてのけ、その根底にはヴェロニカがあるとまで言った。そして医師が彼女に示す態度は軽蔑に満ちており、たとえ手を血に染めた彼女を前にしていたとしても、少し言い過ぎではないかと思われるほどのものであった。彼の連れは、この敵意剥き出しの態度に居心地が悪いらしく、突つ立ったまま、乗馬靴を鞭でつついたりしながら、この娘をじっと眺めていた。それまで土地の噂にさんざんのぼった相手と、彼ははじめて直に会つたのである。

ヴェロニカとしては、単に質問された事実を述べるだけで、なんのコメントも差し挟まなかった。二人の訪問者がすべての件をを根底で結びつける隠された連環に気づくはずがないとわかつていたからである。

尋問で最終的に判明したことは、アレックス・バトラーが農場の常連客であったという事実だけだった。で（ヴェロニカは尋問官に対して彼の息子がプロポーズした件を省略していた）、バトラーの父親は自らの失敗に怒り狂い、連れのほうを振り向くと、こう叫んだ。「さて、ハーグレイヴス、この異常な事件をどう思うかね？」

もう一人の男がはじめて口を開いた。「私の意見を申し上げるとですぞ、先生、別に不思議な点は見当たりませんな。よくある狂犬病でしょう。打つ手はひとつ、伝染を防止するために犬を処分するだけですな。はつきりしない点はただひとつ、まずどうして鎖につながっていた犬が狂犬病に感染したかでしょう。犬を処分する件には異議をお唱えにならないでしような、ミス・メインウエアリング。そうしなければならんです。苦しませないようにやりますから。ご存じかしれんが、私は獣医です」

ヴェロニカは頭を下げた。「よろしいように」と言った。「ただ、あの犬をずっと離れた場所に、深く埋めてください」そう言うのと彼女は振り向き、撞球室に消えていった。

しばらくのあいだ、彼女はひとりすわったまま、虚空を見つめていた。かつてはとても近かったルーカーカスが、いまはとても遠くに感じられる。犬の姿を破壊されたら、あの人の身になにが起きるのだろうかと考えた。いまの隠れ家から追い出されても、もう一度自分に接触できるのだろうか？

そんなことを考えていると、台所のそとのほうから大変な大騒ぎの物音が聞こえてきた。誰か女性が凄まじいヒステリーを起こしており、その金切り声が狼狽する男声の声をバックに響きわたった。ヴェロニカは台所に続く長い通路を走った。すると床に番人の老婆がはいつくばっていて、腹の奥底

から金切り声を発しているではないか。白い顔をした一団の田舎者たちが、ヴェロニカが入ってくる
と、横目で睨みながら数歩下がった。

「どうしたんですか？」と彼女は面と向かって質問した。

誰も答えなかった。そして一団は半分開いた扉からそくさと出ていった。庭では当然、子供がこ
との成り行きを覗き見していた。ヴェロニカは飛び出していくと、逃げるその子のぼろ着の襟をつか
んだ。

「なにがあつたの？」と彼女は質問した。

「犬を撃つたんだよ、おねえちゃん」と少年はもがきながら答えた。

「それは知ってるわ。でもなんであんなに怖がっているのよ？ あがいたってだめよ。教えてくれ
るまで離さないから」

「で、出たんだよお、あの旦那が」と少年はかすれ声で言った。

「旦那って、だれが？」とヴェロニカ。

「黒い髪の旦那。おねえちゃんと一緒にいた人。犬を撃つたら、犬小屋から出てきたんだ。おいら、
この目で見た。みんな見たよ。犬小屋から出てき、その日なたに立ったんだ。それが、平たいんだ。

まったく平たいんだよ。おいらたちに笑って、それから煙みたいになんか消えちまった。少しづつ消えて、最後はぼわっと。でも、おいら見た。みんな見たよ。離してよ、おねえちゃん」そして思いっきりもがくと、少年はヴェロニカの手から飛び出して遁走した。

ヴェロニカは撞球室に戻ったが、扉を開けたときですら、誰かが待っているように感じた。見回すが、誰もいなかった。部屋を横切ると、フランス窓からテラスに抜ける。自分がなにをしているのか、ほとんど気づくこともなく、ヴェロニカは後に続く者のためにフランス窓を開けてやっていた。「そう、戻ったというわけね？」彼女は言った。

彼女はまるで返事を期待しているように待っていた。しかし返事はなかった。それから彼女は再び口を開いた。「あなたがアレックス・バトラーにしたことは許せません。犬の一件もそうです。あなたにしたことは許せません。もう過ぎたことですし、忘れました。でも、あの犬はひどい。あれは許せません」

再び沈黙した。ヴェロニカは言わねばならぬことを言ってしまった。しかし彼女の五感には返事が伝わってこなかった。彼女は振り向き、再び砂利道を歩み、フランス窓から室内に入ると、後ろ手でぴしやりと窓を閉めた。それから立ちつくしたまま、眺めていた。あたりは静寂にして陽光はきらめいている。しかしほどなく、彼女が思ったとおり、石段の隅にたまっていた枯れ葉が風にさざめきだした。枯れ葉は小型の竜巻きのように舞い上がり、窓ガラスにぶつかった。窓は内側に膨れあがり、留め金具はすべりだしたが、ヴェロニカは窓枠に両手を当て、それを思いつきもとに押し戻した。

それから重い肱掛け椅子をつつかえ棒かわりに押しあてた。怒り狂った風が最後に吹き荒れたあと、枯れ葉は挫折したようにテラスじゅうに舞い散り、ゆっくりと落ち着いていった。

それからというもの、ヴェロニカは孤独というものを知ることがほとんどなかった。まるでブルームズベリーの日々のように、ルーカスがどこかにいるのである。しかし、印象の鮮烈さという点では異なっていた。太陽輝く日中は、彼の影響から免れられるのだが、曇りの日や、特に黄昏時になると、彼の存在が手にとれるようにはつきりしてきて、宵闇せまれば、ルーカスその人がそばにいるも同然だった。彼女には、なにも見えないし聞こえない。なんの意志伝達も行われないのだが、それでも彼女はルーカスの気分というものをひしひしと感ずるのであった。

ヴェロニカに自分の存在を意識させ得たことで、ルーカスの力は増大しているようであった。彼女の霊能力が強くなっていたのか、彼が我意を通す点でさらに達人になったのか、彼女にはわからなかった―しかし、たしかに二人のあいだにある共感がうちたてられており、その共感が強くなっているのもたしかなのである。

ルーカスが邪悪であり、しかも自分が彼の手のうちにあると知ったヴェロニカにとって、あの闇の存在はあらゆる恐怖の悪夢の成就といえた。ルーカスのやり口はわかっているが、彼の考えは読めなかった。そしてほどなく、彼女の考えは実に簡単に彼に読まれてしまうことがわかった。思いをアレックス・バトラーに馳せれば、彼女の周囲の雰囲気はおびやかすような怒りに満ち、しょっちゅう枯

れ葉が舞い上がっては、やり場のない不快感を表明すべく、あちこちにぶつかるのである。しかし、逆に、ルーカスとのわずかな心暖まる数時間に心移せば、室内には奇妙な暖かさが満ち溢れ、彼女は見えない光のマントに包まれるのである。

ヴェロニカは徐々に見えざる訪問者の気分を知るすべを学んでいった。そして当初は未知の恐怖だけしか与えなかった存在が、慣れるにしたがい、当然のこととして受け取られるようになったのである。無論、それを恐れる気持ちは変わらなかつたが、その恐れはルーカスを恐れていたころの気持ち以上のものではなかつた。そして時の経過とともに、あのころの奇怪な魅惑が再び彼女の心を占領しつつあつた。宵闇迫れば、彼が接近してくるのを見張るようになっていた。それでいて、彼女は潜在意識のどこかで、彼の顕現に手を貸しているのである。彼が怖いのだが、現れないと寂しいのであつた。

万霊節近くになり、ルーカスはついに未顕現の境界線を越えるのに成功した。ある晴れた寒い日、ヴェロニカはしばらく散歩していたい気分に戻られた。夕暮れとともに帰宅し、疲れた体を暖炉脇の肘掛け椅子に投げ出す。暖かい部屋が心地よい。すると全身の筋肉が弛緩し、クッションのあいだで横になる。彼女は睡眠と覚醒のはざままで、燃え盛る石炭をじっと覗きこんでいた。突如、急に外宇宙にほうり出される感覚をおぼえた。ルーカスの手で出発させられた、あの不思議な魂の旅のまえに、いつもおぼえていたあの感覚であつた。しかし、今回、彼女の意識は忘却の彼方に沈むことがなかつた。彼女は自分の周囲を意識したままであつたが、不思議にも、あらゆる力の運動が禁じられているみたいなのである。しばらく彼女はそのまま夢見るように横たわっていた。不快ではなかつた。それ

から新しい感覚が彼女の身に生じた。最初はくすぐったいような、そのうちに奇妙な血が引く感覚が生じる。すると彼女は、足元に白い霧のようなものが溜まっているのを見た。徐々にその霧は横に広がり、立ち上がり、彼女の前で形をとりはじめた。それから、顔が形成されだすと、それはルーカスの顔であった！

ヴェロニカは生命力を引き出され、意志に横たわったまま、死者が眼前で生命を得るさまを見ていた。この奇妙な顕現は長いあいだ続かなかった。ルーカスも敢えて引き伸ばそうとしなかつたのだ。数分後、生命力が低下していた娘は、ふたたび生気が体内に還流するのを感じた。同時に、眼前の姿は収縮し、輪郭はぼやけ、足元の無形の霧のプールに沈みこんだ。すると彼女は夢から目覚めるように目覚め、いまの不思議な経験が、自分の想像力の所産だったのかどうか、自問していた。

夕食後、先程の経験がいよいよ現実でなかつたように思われてくる。そして翌朝、重苦しい眠りから目覚めてみると、漠然たる記憶しか残っていないなかつた。その日は一日こまごまとした仕事に追われたが、突如ヴェロニカは弁護士への返信を書かねばならないことを思い出した。文机に向かい、ペンを取ると、一生懸命書きはじめた。彼女は筆まめではなかつたし、業務通信など手に負える代物ではなかつたからである。“拝啓”を書き終えると、もう彼女はつまってしまつた。ペンは紙の上空で停止した。そのとき、驚くべきことに、ペンが勝手に動きだし、白紙の上にゆっくりと文字を書き出したのである。

“ヴェロニカ、元気かい？　こちらジャスティン”

彼女はただ呆然と、眼下で文章がゆっくり成立していくさまを眺めていた。ペンは彼女の力を借りずして書いている。彼女の手で書かれた文字ではあるが、彼女の筆跡ではない。しかし奇妙にも見覚えがある字体である。男の筆跡であり、ジャスティンは男の名前である。彼女にはジャスティンと言う名の知り合いがいなかったが、不思議にも聞き覚えがある名前だった。それから彼女は思い出した。これはルーカスが語っていたローマ人の名前だった。いにしえの世界帝国の日々に少女を愛し、失った男の名前なのだ。

“そのとおり。彼の名前はジュステリアヌスだった。英語版にすればジャスティン、これがぼくの名前だ。もともと、J・ルーカスといったほうが、きみにはわかりやすいだろう”

再びペスが勝手に動いていた。ヴェロニカはその場に釘づけになったまま、ただ凝視していた。紙の上で自由に綴られていく言葉は、考えを口に出さずともすぐに応答するのである。

再び筆記がはじまった。“ぼくの味方になってくれないか、ヴェロニカ。ぼくはきみ次第だ、わかるだろう”―それから抜け目なく、彼女にもっとも訴える言葉を選ぶように―“きみが助けてくれなかったら、ぼくはおしまいだ”

最初はパニックを起こして庭に逃げ出そうと思ったヴェロニカであったが、いまはただ、動きもせず、じつと耳をすまして待っていた。

またペスが動きはじめた。彼女の目は筆記を追っていった。

“ 昨晩はよくやってくれた。きみの濃密体から微細なエーテルを分離するのは簡単だ。ぼくはエーテルを引き出して、それで自分の形を作ることができる。だが、きみから頻繁に引き出していると、きみにとってはひどい消耗になると思う。ぼくに出せる案といえば、きみから一部分材料をもらって物質化し、それから他人にできるかぎり近づいて、そいつらから残りの分をいただく。そいつらが眠るまで待てば、十分やれると思う”

ヴェロニカはペンを投げ捨て、急いで窓を開けると、テラスに出た。あの人はなんて恐ろしい実験を考えているのだろうか？ 彼女はこういった方面にまったく無知であったし、ルーカスが用いる不思議な力や、さらに不思議な目的や意図は、完全に彼女の想像力の範囲を越えていた。ルーカスは死んでいるのではなく、単に体を持っていないだけであり、自分の目的に合う手段であれば、容赦なくそれを用いて、自分の不足分を補うつもりでいるのだ。

ほどなく暗闇が広がり、肌を刺す風のために室内に退却せざるを得なくなった。その晩は時のたつのが早く、すぐに就寝時となった。突如、《存在》が室内に現れ、彼女はそれをすぐ脇に感じた。ゆっくりと彼女は椅子に身を沈めた。体の力が抜けていくにつれ、魂が虚空に放り出される。再び彼女の生命にほかならない奇妙な物質が、彼女の体の左側から流れでていく。その白いひだのなかから、ルーカスの両眼が彼女を見つめていた。しかし過程はここで中断された。それ以上の濃密化は起こらず、両眼だけが完全に物質化していた。残りは煙の輪のように宙に漂っていた。

ヴェロニカは、まだ身体機能を十分に保持していて、奇妙に体が軽くなったように感じた。彼女はゆっくり椅子から立ち上がり、彼の前に立った。強制されつつも、すすんで彼の意図を行いたい気分である。彼のあとについて、部屋隅に移動する。そこには椅子のうえにトレンチコートがかけてある。彼女はそれを手にすると、肩にひっかけた。

ルーカスの両眼はこの世のものでない光をたたえていた。なかばやさしく、なかば勝ち誇るかのような両眼であった。そして灰色の形が窓のほうに動いていくと、ヴェロニカもそのあとを追った。漂う霧のような形のすぐあとについて、彼女は暗いテラスを降りていった。

薄い蒸気のような銀色の紐が、ヴェロニカと前をすつといく影をつないでいた。この紐だけは、なんとしてもつないでおく必要がある、と彼女はわかっていた。それから彼女は、別のさらに不思議な現象に気づいた。周囲は漆黒の闇であるはずなのに、鉛色の薄闇のように見えるのだが、それでいて影というものが存在しないのである。

二人は素早く、苦もなく草ぼうぼうの車道を下って行って、川沿いの道に出た。それから左に曲がりこむ。ヴェロニカの見当では、目的地は小道からちよつと入ったところにある労働者の長屋である。息もつけぬまま、彼女は銀の紐に引かれて影のごとき姿のあとを追ひ、ついに付近の小屋の塀の下までたどりついた。彼女の案内人はようやく停止した。

しばらくのあいだ、黒い水溜まりのような両眼がヴェロニカに向けられていた。それから一条の煙のごとく、その形は彼女の頭上高くあがっていった。彼女の見るところ、それは小屋の軒下にある鉛引きの窓枠に我が身を押し付けているようだった。どこかにひび割れが見つかったのである。漂う霧は徐々に消えていき、最後には彼女自身の肉体とつながる銀の紐だけが残っていた。

待っている時間が永劫のように思われる。小屋のなかからはなんの物音も聞こえなかった。やがて彼女はかすかな軋む音を耳にした。彼女の頭上の窓が開き、手が一本、窓のさんのところに現れた。ひび割れから漂い入っていったものは無形の霧であったが、出てきたものは明らかな肉体であった。それが地に降りたときにたてたドサリという音からも、ある程度の重量を有しているにちがいないと、ヴェロニカは思った。それは冬の枯れ草の上をこちらにやってくる。そして彼女が見たものは、灰色の柔らかい頭巾付き長衣に包まれた、生前そのままのルーカスの姿であった。

昔と変わらぬ仕草でヴェロニカと腕を組み、彼は急いできた道に戻り、庭からテラスへと彼女を連れていった。

撞球室の暖炉にはまだ燠火が赤く残っていた。そこでヴェロニカは火掻き棒を手にとると、火を燃え上がらせようとした。冷氣と恐怖に震えていたからである。しかし、完全に物質化した手が彼女の腕に触れ、よく知る声が耳元でささやいた。「落ち着いておくれ、ぼくは強い光に耐えられない」

いかにも主導権を有するがごとく、彼はヴェロニカの手を取って、椅子にすわらせた。彼女は抵抗せず、クッションのなかに身を沈めた。彼は前屈みになってヴェロニカの顔を覗きこんだ。

「さあ、いまから借りていたものを返すことにしよう。いまの状態ですつといると、きみのためにならない」彼がそう言っているあいだにも、ヴェロニカは部分的に抜かれていた生命力が自分に還流するのを感じていた。しかし今回は、眼前の姿は完全に非物質化しなかった。彼女が通常意識状態に復帰したとき、以前はつきりした姿があった場所には、漂う霧があり、両眼があった箇所には暗黒が残っていた。寝ていた小屋の住人から奪ったものを、彼は保持していた。

その漂うものは別れを告げるように彼女のそばに近づき、それから窓のほうに滑空していくと、腐った窓枠の隙間からゆっくり消えていった。一方ヴェロニカは、眩惑感と困憊感を覚えつつ、ランプをつけ、いまや誰もいない部屋を見回していた。

第十一章

翌朝ヴェロニカは、すべての出来事は悪い夢だったような気がしたのだが、泥だらけの湿った上靴が目に入った。それでも彼女は、あれが現実であるという可能性すら認めたくなかった。朝食後、川沿いの小道を散歩しているとき、背後から自動車の音が聞こえてきた。振り返ってみると、あの医師すなわちアレックスの父親が草の生えた車道を運転してくる。彼はヴェロニカをちらりと見ると、敵意と反発以外のなんの表情も示さず、すぐよこを通り過ぎていった。最近の二つの死に関してこの人物が診断できた死因は、ルーカスの場合は心臓麻痺、息子の場合は犬の咬傷による頸動脈からの出血多量であった。それでも彼は、二つの事件の根底でヴェロニカがからんでいると直感していたから、理屈抜きで彼女を憎んでおり、しかもその直感の間違っていなかったのである。

ヴェロニカは散歩を続け、草ぼうぼうの小道を下っていった。ほどなく昨夜の怪夢の舞台であった労働者の長屋の前に出た。白昼にあつてすら、思い出すだけで恐怖を覚えざるを得ない。いまだに恐怖の影が彼女につきまとっていた。昨晚彼女が立っていた蔓薔薇のポーチがある。その上のほう、軒下には、ルーカスが入っていった小窓がある。

物音がしたので、そちらのほうに視線を移した。するとあの医師が長屋の門のところに立っていて、彼女をじっと睨んでいた。「昨晚、この小屋で子供が一人死んだ。ほかに四人の子供が重体だ」と彼は言った。「昨晚寝るときはまったく大丈夫だったのに」

二人はお互い睨み合ったまま一步も動かず、なんのコメントも出せなかった。いまや身近なものとなったあの冷たい風が舞い上がり、秋の落ち葉を道路に散らせた。ヴェロニカが肩を少しすくめた様子は、謝罪ともおびえとも無力感の表明ともとれるものであった。そして彼女はゆっくり歩き去った。医師は立ちつくし、彼女を追うかどうか決心がつかぬままだった。結局彼は怒りにまかせて頭を振ると、長屋のなかに戻った。

農場に戻ったヴェロニカは、問題に直面していた。もはや一連の出来事を悪い夢と片付けるわけにはいかなくなった。あの小屋では子供一人が死亡しており、四人が重体なのだ。死者が生命を維持しようと思えば、それがたとえルーカスが達成した影のごとき生命であろうとも、これだけの代償を支払う必要があるのだ。無慈悲な個人主義者であるルーカスが生命を盗んだ相手は、もつとも弱い相手すなわち子供だったのである。ヴェロニカは思い出した。はじめて墓地に行ったとき、小さな墓がいくつも並んでいた。ルーカスが物理次元に足場を得ておくために、どれほどの生命が犠牲にされたのだろうか。

しかし彼女はひとつのことに關しては決意を固めていた。自分が防ぐことができるのであれば、これ以上子供たちに害を及ぼさせはしない。ヴェロニカは母性本能が強かった。ルーカスとしては、彼女にそっぽを向かせる方法数あるなかで、子供を襲うことくらい確実なものではなかったのである。かくもおぞましい目的に転用され得る物質化などに、彼女はもはや手を貸すつもりはなかった。

その日ずっと、ヴェロニカは夕闇の到来を待っていた。その時刻になればルーカスがやってくるこ
とがわかっていたからである。彼女は対決する覚悟を決めていた。彼がどういう態度をとるか、彼女
にはわからなかった。しかし彼女はある一点に於いて頑強ともいえる決意でいたのである。なにがあ
ろうともこの部屋を出るような真似はしない―彼女が出なければ、ルーカスも出られないはずと、抜
け目なく思っていた。物質化が起きる際に二人を結ぶあの薄い銀色の紐のせいである。ルーカスがど
ういう報復に出るか、それはわからなかったが、実に奇妙なことに、彼女はもうどうでもよくなつて
いた。

その晩、夕陽が雲に隠れたため、闇の訪れは早かった。最後の残照が消えるか消えないうちに、ヴ
エロニカは頭巾姿の暗い影の存在を意識した。その影のなから、暗く輝く目が形成されつつある。
あきらかにルーカスは、いまや自由に顕現できるに十分な量のエクトプラズムを手にいれたらしい。
もつとも、自由顕現は低光量条件下に限られているらしく、また彼が得たエクトプラズムは、しゃべ
ったり明確な行動をするには不十分な量であった。この不思議かつ精妙な物質を、もつと多量にほか
から入手する必要がある、ヴェロニカはなんとしてもそれをさせまいと思っていた。どういう手段で
妨害するかはさておいて、協力だけはすまいと決意していた。

これは気力の勝負である―彼女はそう思い、全身で身構えた。灰色の布のあいだから覗く暗い瞳が、
彼女側の態度の変化に気づいていることを物語っていた。瞳には驚愕と非難の色が浮かんでいたが、
ヴェロニカが予期していたような怒りの色はなかった。

いまやおなじみになった墜落感覚が、ヴェロニカの神経を駆け抜けていった。すると再び、彼女から霧のような物質が流れ出ていき、それがルーカスを生者に近い形に変えていった。この状態を達成するのにたいした量がいらなかったため、ヴェロニカはきわめて通常意識に近い状態でルーカスが眼前に物質化するのを見た。

石炭の燠火に赤く照らされ、灰色の頭巾付き長衣に包まれたルーカスがその場に立っていた。両手は指が揃っており、顔色は浅黒い皮膚の下で生気を放っていた。

ルーカスは物質化過程をぎりぎりまで敢行した。二人は向かい合った。一人は半ば物質化した男、もう一人は半ば非物質化した女であった。

「さあヴェロニカ、ぼくに会えて嬉しいかい？」

彼女は答えなかった。彼へ恐怖、彼の再出現の奇怪な方法への恐怖は圧倒的なものであったが、それでも彼はヴェロニカにとつて魅力的な存在であった。彼はその点を見抜いたらしい。影のようなくちびるが歪み、微笑を浮かべたからである。

「まったく不愉快というわけじゃないね？ いっしょに行こうか、ヴェロニカ」

お互いを観察しているあいだ、沈黙があった。彼は手に入る物質を上半身の形成に集中利用したらしい。頭部、両肩、両手はよく物質化されていたが、下半身はゆらめく衣のように宙で途切れていた。

それからルーカスが再び口を開いた。「さて、次は昨晚始めた作業の仕上げだ。村の向こう側の一軒に目をつけておいたから、そこに行きたい。きみが靴さえ履いてくれたら、出発できるんだが」

しかしヴェロニカは身じろぎもしなかった。そして影の衣に包まれた暗い両眼が驚愕に見開かれた。練達の催眠術師であるルーカスの知るところ、簡単にトランス状態に陥る人間がかくも暗示に不従順な態度を示す例など、まったく経験したことがなかったからである。彼は知らなかったことだが、ヴェロニカは部屋を出まいという観念に精神を集中したまま“外出”してしまったのであり、まえもつてなされたこの自己暗示が、それ以降のあらゆる命令を無力化していたのである。四方を壁に囲まれた室内なら、彼はヴェロニカを思いのままに動かせるが、壁の外側に行かせることはルーカスにも誰にも不可能であった。

ことの展開に驚いて、ルーカスは足場を変更した。

「ぼくを助けてくれないのか？」と彼は言った。

ヴェロニカは椅子のなかで彫像さながらに不動のまま、顔だけをルーカスに向けた。瞼は閉じられていたが、ものが見えるかのようにだった。

「子供たちの一人が死にました」と彼女は言った。「それにほかの子供たちも重体です」

「死んだとは気の毒だ」とルーカス。「限界以上にとつてしまつたんだな。ほかのは二、三日で回復するだろう。すぐに元気になるさ」

「あなたのせいで死んだ子供たちがほかにも何人かいます」とヴェロニカが言った。

「いたかな？ 子供つてのは簡単に死ぬんだな。ちよつと生気を抜いただけで空っぽになつちまう」

「もうたくさんです」ヴェロニカが答えた。

「そう、ぼくもそう願うよ」とルーカス。「だが、さあ行こうよ。そろそろ始めよう。もう一回遠征すれば、うまくいくはずだ」

「もう遠征などはありません」とヴェロニカ。

「いや、あるさ」とルーカスが言った。そして暗い顔を灰色の頭巾の下でしかめながら、ヴェロニカに視線を集中した。生前と同じ、長い指と平らかな掌を持つ手が彼女に向かつて突き出され、顔の前でゆつくりと撫でるような仕草をした。ヴェロニカの体はびくりとも動かなかつたが、ルーカスの操作のもとで催眠トランスが深まっていくにつれ、彼女の魂は再び暗い藍の深淵に沈んでいった。

この深度トランス段階で再度ヴェロニカに命令してみたが、ある基調にセットされている彼女の心はやはり抵抗した。それではとばかりにルーカスは、再度彼女をさらに下の段階に落としてみたが、それでも彼女はつかまらなかつた。そこで怒りにまかせて慎重さを忘れ、もう一度彼女を追いかけた

ところ、驚くことにヴェロニカの体は硬さを失ってしまった。彼女は幼子が眠るようにクッションのあいだに沈みこみ、顔には緊張した不安げな表情のかわりに、素晴らしい安息の表情が浮かんでいた。ルーカスはやりすぎてしまったのだ。ヴェロニカを自分でも手の届かない領域へと追いやってしまったのである。彼女は彼の支配から脱出してしまった。彼女の魂は催眠トランスという主観的状况を通過して、意識の高次領域内の客観的存在となっていた。潜在意識が超越意識に場所を譲ってしまい、ヴェロニカは逃げおおせてしまった。彼女の魂は主観的状况へと深く深く追い込まれたが、突然すべてを突破して自らの場所へ行ってしまう、自らの仲間とともにいるのである。

ヴェロニカのくちびるが割れ、微笑を浮かべた。彼女は歓迎に答えているようであった。ルーカスは彼女を眺めながら、悟っていた。彼女が入ってしまった領域は、彼の手の届かぬところであり、そこに入る権利のかわりに彼は魂を売り渡していた。彼女の心のなかにあった本来のなにかが、門を開く鍵を彼女に与えてしまったのであり、しかもその門は彼には閉ざされたままである。彼はただ眺め、待つしかなかった。彼女が行ってしまった場所についていくことができなからである。ブライトンへ通ずる道路上で、未知の《力》がヴェロニカのために干渉してきたときのことを思い出す。あのときは不意に一撃をくらって張りたおされたものだった。子供のようなヴェロニカの人格を通して機能する魂とは、いったいどのような魂なのだろう——ルーカスはそう自問していた。

不滅の魂がヴェロニカ・メインウェアリングに受肉している、というよりは、むしろ、彼女を覆っているというほうが正しい。そして一回の人生経験だけで構築された人格は、その背後になが控えているのか、これまでほんの片鱗しか見せていない。ルーカスは推測した。彼女はもはや自分のため

に転生してくる必要がなかったのではないか。この世には、このタイプの魂に教えることなどないの
だろう。彼女の場所はほかにあるのだ。彼女の欲のなさと、あらゆる恨みつらみの欠如という面から
も、そう推測できたであろう。とすれば、いったい彼女はなんのためにここにいるのか？ なにかの
絆が彼女をここに縛っているのだ。この存在という領域と彼女のあいだに、まだなにかつながらりが残
っているのだ。過去世に於いて自分たちが同じ道を歩み、同じオカルト作業に従事してきたことを、
ルーカスは十分意識していた。これほど強い絆はない。愛や憎しみの絆が切れたとしても、この絆は
残るのである。ルーカスはアヴィニヨンでの宿命的な転生以降、彼女の足跡を見失っていた。あのと
き、彼女ははっきりと《白の道》を選択したが、彼は《黒の道》を選び、自らの命で代価を支払った
のであった。

ヴェロニカの魂が手の届かぬ光の領域をさまよっているあいだ、ルーカスはいらいらしながら待つ
ていた。彼の王国は影であり、また元素的質量を生む深淵の暗い水であった。

ヴェロニカは子供が眠りから目覚めるように、自然にトランスから目覚め、室内が奇妙な暖かさに
満ちているのを知った。ひとりきりだったが、ルーカスの存在の芳香が室内に残っており、過敏感覚
状態にある彼女には簡単に知覚できた。室外は嵐の夜となっており、そのどこかにルーカスは追いつ
かれてしまったのだ。宇宙の風が彼を吹き飛ばしたのである。生命の法を犯してしまったルーカスは、
その法の迷流に足をとられたのである。とるにたらぬ利己的な目的のために進化の大いなる潮流をね
じまげようとした結果、その偉大なる流れは大渦巻きと化し、彼を飲み込んでしまった。

ヴェロニカは奇妙な高揚感と解放感を覚えていた。体のなかで生命が脈打っているが、きわめて眠くもあつた。彼女はふたしかな足取りで寝室に向かった。

翌朝、彼女は目覚め、夢をおぼえていた。しかし、この夢はほかの夢とちがひ、かつて経験したことのない夢だつた。しかし、忘れていた子供時代の記憶のように、どこか見覚えのある夢だつた。どこだつたのか、いつだつたのか、彼女はあの背の高いゆっくり動く人影を見たことがあつたのだ。彼らは上着の色で見分けることができる。彼らの深く響く声にも聞き覚えがあつたし、彼らの言語も初めて聞くものではなかつた。そのなかの一人が彼女に、自分を信用して身をまかせよと語つていた。信じよ、されば導かれん。いづれ明らかになろう。人が派遣されよう。しかし、なにが明らかになるのか、誰が派遣されるのか、その点は曖昧だつた。漠然たる印象は残っているのだが、細部が欠落していた。ともあれ彼女が理解したところ、いままで彼女が孤軍奮闘していた戦いは、より高次の力の手に委ねられることになつたのである。彼女はもはや孤立無援ではなかつた。はた目には孤独な生活を送るかもしれないが、彼女の身边には不可視の世界があり、彼女もそれを意識しているのである。

彼女は昨夜の経験が現実だつたのか、執拗に自問してみたが、その真偽を確かめる手段はなかつた。記憶の教えるところ、自分がなにか偉大な組織の一員となつたような感覚が残つていた。その組織はさまざまな次元に支部を有しており、必要とあればその組織員が彼女を援護に現れるのである。

その日はこれということもなく過ぎ去り、ルーカスが現れる時刻はまだ先だった。彼は暗くなるまで活動できない。ヴェロニカは彼が顕現する時間を知っており、待っていた。以前と同様、薄暮が闇に変わるところが顕現の前触れであった。残照が消えたとき、室内に彼の存在が感じられた。再び例の過程が繰り返された。手近な力が分割され、不可視と可視の中間にある場所で、二人は出会った。

頭巾姿の像が形成され、しゃべった。

「ヴェロニカ、はつきりさせようじゃないか。きみは、ぼくを助けてくれるのか、くれないのか？」
ヴェロニカは生前の彼とそうしていたように、向かいあった。「あなたを助けるためならなんでもします」と彼女は言った。「でも、二度とふたたび子供たちにあんな恐ろしいまねはさせません」

「ほかにどうすればいいというんだ？」と頭巾姿が言った。「生気を補充しなかったら、この姿だつて維持できない。そしたら、ぼくは《第二の死》を迎えることになる。それがどんなものか、きみは知らないだろう、ヴェロニカ」

彼女は首を横に振った。「なにも知らないわ」

「そのほうが身のためだ。だが、ぼくに言えることは、とにかく《第二の死》を迎えたくないんだ！」
彼は必死の様子で彼女のほうに揺らいできた。生前同様の手が彼女の腕に触れた。

ヴェロニカも手を差し出した。彼女の指に触れた柔らかい衣は、彼女の知るいかなる繊維とも異なる感触だった。「あなたに危害を加えたくはありません、ミスター・ルーカス。でも、あなたに子供たちを傷つけさせることもできません。あれは本当にひどい。どうしてあんなことを？」

「あれしかないからだ」とルーカスが答えた。「こちらは食うか死ぬかなんだ。できるなら死にたくない」

「でも、あなたは死んでるじゃない！」とヴェロニカは叫んだ。

「きみの考えるような死など、存在しないんだよ」と彼が答えた。「ぼくは生きている。完全に生きているんだ。もう一度自分を乗せる機械を構築できれば、きみと同じように生きていける。だが、いまのぼくは中途半端だ。だからもつと生命がいる。手に入るところから取るしかない」

「二度と子供たちから取らせはしません」とヴェロニカ。「あたしにできることならなんでもします。でも、子供たちはだめ」

ヴェロニカは彼と対決していた。若く、年の割りに不思議なほど幼い彼女である。ヴェロニカは本能の命ずるままに動いていた。しかしルーカスは、彼女を背後から動かしている力の正体を知っていた。

「ミスター・ルーカス、あたしにはむつかしいことはわかりません。でも、あなたを助けられるのなら、なんだつてします。なにも怖くありません。あたしにはわからないけど、なんだか知ってるよな気がします」

「知ってるだろうね」とルーカスが言った。「終わるころには、もっとたくさん知ってるだろう。ぼくが頼んでいるのは、とにかくきみのエーテルをちよつと貸してくれというだけだ。そうすれば、ぼくは材料を集めて体を作ることができる。つまり、生きられる。しかし、きみがいやだというのなら、手の打ちようがない。ぼくたちは行き詰まりだよ」

「あたしの力ならよろこんで貸します」とヴェロニカ。「でも、子供たちには手を出させません」
「しかし、子供から直接力を得ていればこそ、いまみたいにしっかりしていられるんだ」と彼が答えた。「きみから力を抜きつづけたら、きみをこつちに引き寄せてしまう。そうなればきみも不死者の仲間入りだ。ヴェロニカ、ぼくといえども、そのあたりは一線を画している。きみはぼくを近づけないし、ぼくはきみを引き寄せられない。いまの状況はそんなところだろう。きみのほうで解決法を見つけてくれ。ぼくにはできない」

ヴェロニカは答えを持っていなかった。眼前の灰色の影が、風に揺らぐ蠟燭の炎のように揺らいでいた。影にもいまだ人間的な感情が残っていたからである。

ルーカスが再び口を開いた。「きみを愛していなかったら、なんの問題もなかった。だが、愛している。だから、ぼくにはできない。きみがどうなろうと気にならないのなら、あのときやつらにきみを撃たせて、ぼくは逃げられた。そうするつもりでいたんだが、いざその場になってみると、できなかったんだ」

暖炉の炎が消えつつあるため、室内は闇の洞窟のようであった。ランプは点けられていなかった。この世界にはならない存在が侵入している。そのために炎は勢いを失い、邪悪なものとなつたようであった。彼の性格の一部が炎に入り込み、燃焼にまで影響を及ぼしていた。それはもはや人間を元気づける暖かい暖炉ではなく、ちらちらと燃えて呪いを放つ鬼火のごときものとなつていた。不可視の世界から舞い戻つたルーカスは、単独で帰還したのではなかった。彼が開いた扉の隙間から、なにかの大群が抜け出てきたのである。他の生命系統に属するなにかが。

両界を別つヴェイルが薄くなり、靈的浸透過程が進行するにつれ、不可視の世界のさらに活発な存在たちが、顕現領域の生命を吸収しつつあった。これが危ないのだ、とルーカスは以前からわかつていた。定められた場所への移行を拒むことで、彼は不可視と可視のあいだにある控室に居を定めてしまった。この領域には形相がなく、ここに物質の根本材料が引き寄せられる。そして魂を吹き込まれた生命が根本材料を消耗しつくしてしまつたなら、この領域で再び根本材料を与えられ、戻つていくのである。この場所では別の創造系統に属する生き物が機能している。一番近い比喻を用いていうなら、腐敗寄生バクテリアであろう。創造に伴う残りものを始末する掃除屋といつてもいい。それらは

再生産過程に於いてそれなりの役割を果たしているのであるが、定められた領域をはみ出してしまった場合、もつとも恐ろしい現象を生み出すのである。

ルーカスが棲息している場所は、この深淵の世界であった。そのおぞましい諸力に、彼はこの世でただ一人愛した存在をさらしているのである。彼はかつてないほどに分解という冷たい地獄に近づいていた。その恐ろしさは、彼が学んだ流派の教義からも、肉体を離れてから得た自分の経験からも、よくわかっていった。また、この顕現の世界の足掛かりを失えば――つまり、生命力の減衰のために薄い影の姿を維持できなくなれば、彼は宇宙の法に再び引き寄せられ、それまで知識の力で延期されていた死の過程が再度開始されるのである。物質世界に彼をつなぎとめていた最後のエーテルの糸はちぎれ、彼は裸の魂として審判の広間に出廷し、それまでの所業の清算と直面することになる。各転生の終わりに善行悪行の帳尻合わせが行われるからである。そこで主観の現金化ともいうべき作業が行われ、差引残高調整が済むと、魂は再び物質世界へと新たな旅立ちをするのである。経験は能力に変換され、魂の性質の善悪の収支決算も行われる。いわば、資産は現金化され、負債の総額が宣言されるのである。ルーカスは行方をくらました債務者であり、敢えて法廷に出たいわけがなかった。彼は不可視の力を背任横領していたからである。彼は宇宙の諸力を個人的な目的に使っていた。彼は収支明細の提示を求められるだろうが、それを出すことができない。その後の事態に直面する気は毛頭なかった。

栄養消化という手段でエネルギーを補給する肉体器官を有していないため、彼は出来合いのエネルギーを他の者から獲得するしかなかった――かくして彼は他人の生命力にすがる寄生虫になってしまっ

た。中世にあのような子供の変死が起きたなら、死因はすぐに特定され、すぐに精力的な吸血鬼狩りが始まったであろう。容疑者の死体が掘り出され、腐敗が進行していない兆候が見られたなら、その死体は灰になるまで焼かれるのである。

第十二章

ヴェロニカは目を覚ました。暖炉の火は灰に包まれ、窓には夜明けの光があった。夜のうちに霜が降りていて、太陽は銀色の世界を照らし出していた。ルーカスは去ってしまったが、彼の雰囲気は室内にまだ漂っていた。ヴェロニカは窓を開け放ち、秋の夜明けの清冷な大気のなかに進みでた。東に顔を向け、太陽が丘を越えて上昇するのを待っていた。空はすでに明るくなっていたが、谷は影のなかにあったからである。

しばらく彼女は耳をすましていた。鶏が遠くの農場で鳴く。本道のほうから重い蹄の音がパコパコと聞こえてくるのは、鋤鍬隊が仕事に出掛けているからだ。静かな、霧をたたえた谷間の大気は朝の喧噪とともに脈打ちだす。ベツカリング連絡駅を出発して坂道に立ち向かう蒸気機関車の喘ぐような轟音がリズムを刻んでいる。ヴェロニカはテラスをゆっくりと歩み、老婆が朝食の準備をする時刻まで暇をつぶしていた。

ヴェロニカには考えることがいっぱいあった。かつてなかったほどの明晰な意識が彼女の心中に生じていた。そのため、彼女は一連の記憶画像の背後にすべてをつなぐ原因を見いだせることができた。彼女の意識内のなんらかの扉が昨夜の経験のあいだに解放されていた。新しく開けゆく潜在意識の領域のなかで、彼女はさまざまな環境下の自分の記憶を得ていた。これらは過去の転生の記憶である――

そう彼女は認識した。その転生のどこかでルーカスとの絆を作ってしまったのだ。その絆の影響をいまでも感じている。ヴェロニカにはそれがわかった。

夢の画像を子細に検討しているうちに、だんだんはつきりしてきた。神殿、森、大いなる朗々たる儀式が、精緻な幻想として彼女の心眼に浮かびあがった。その光景には見覚えがあった。ルーカスが自分の《団》の高位階儀式を盗聴するために、彼女に霊的バリアーを越えさせたとき目撃した儀式に似ていた。両者は形式こそ同一でないが、用いている力は類似しており、なんらかの関係が存在すると思われた。

しかし、彼女の心のなかに開いた新しい部屋には、記憶画像だけが貯蔵されていたわけではなかった。忘れられた伝承も大量に貯蔵されており、ひとつひとつ連想でつなげていくと、記憶に蘇るのである。潜在意識は顕在意識となり、その深みに過去世の記憶が蓄えられているのがわかった。人類の黎明期、不可視の世界がまだずっと人類の身近にあり、司祭王たちが民族を治めていたころ、彼女は当時栄えていた密儀の流派に参入した。そこで彼女はともに学んだ一人と絆を持ち、生まれ変わってはまた一緒に作業をした。やがて二人に危機の時代が到来し、一方は権力欲に目がくらんで墮落し、他方は信仰を堅持した。ヴェロニカはいまやこういう事件の裏を読めるほどの洞察力を得ていた。彼女が悟ったところでは、一人はガリラヤの丘から世界に注がれた偉大な霊的生命の新しい潮流に乗ることができたのだが、もう一人のほうは古き異教の密儀を追い求めて、未来に顔をそむけて過去に向かい、原始へ先祖返りしてしまったのである。

現世に於いて二人が出会ったのだ、とヴェロニカは思った。しかし物語はまだ終わっていない。直感が明らかにするところ、一方は精神の力を扱い、他方は心の力を扱ってきた。そしてお互い、相手なしでは挫折していた。一方は良心なき精神であり、他方は理解なき感情である。二つは一緒になつてはじめて高みに昇れるのであった。

その認識がヴェロニカに到来し、またルーカスにも芽生えつつあったのだが、過去世が巻き起こした数々の因縁のために二人は五里霧中であつたのだ。気づいたときにはもう遅く、現世では解決不能なのかもしれない。ヴェロニカには迷路の出口がわからなかつた。そしてルーカスは、奇怪な死中の生、あるいは生中の死の状態をさまよつており、それも自分が招いた災厄であるから、天地人のいかなる助けも及ばぬ境遇といえよう。そして彼はいづれ《混沌》の深淵に引き込まれ、ゆきてかえらぬ人となるのだろうか。

台所の煙突から煙が昇りはじめ、やつと朝食の準備が整いつつあると知れる。ヴェロニカが家のほうを振り返ったとき、足音に気をとられた。すると彼女は見た。露のたまつた灌木を抜けながら近づいてくる人影がある。えらく古風なインバネスで膨れあがるように身を包み、古色蒼然たるグラッドストーン靴を下げた人物である。次の瞬間、ヴェロニカの前にあの白髭の老人が立つており、彼女と挨拶の握手を交わしていた。

このまったく予期せざる訪問に言葉を失うほど驚いていたため、ヴェロニカは礼儀作法すら忘れてしまった。老人が彼女を連れて撞球室に入り、上着を脱ぐまで、彼の旅の目的を尋ねるのを忘れていたほどだった。

老人は分厚い灰色の眉毛の下から彼女に鋭い視線を飛ばした。

「だれかを待っていたのではないかね？」彼は言った。

しばらくヴェロニカはぼかんと老人を眺めていた。それから幻視夢で約束されていた訪問者のことを思い出したが、口に出すべきかどうかわからなかった。彼女自身は、自分の経験の現実性を確信するようになっていて、想像力の所産と思わなくなっていたのだが、他人がそれを共有できるなど思いもしなかったし、自分の知識を披露して我が身を嘲笑や疑惑にさらすのは怖かったからである。

「ええ」と彼女はゆっくり言った。「だれかを待っていましたけれど、はつきりしたことは――あなたとは思いませんでした――お目にかかって、驚いております」

老人の目は皺くちやの顔のなかで奇妙に輝いていた。彼はヴェロニカをさらに観察していた。

「誰かを待つように言ったのは何者だったのじゃな？」彼はおだやかに尋ねた。

ヴェロニカは老人の視線を真正面から見返した。自分が試されているとわかったのだ。老人の考えが彼女に伝わってきた。自分の考えも伝わっているだろうと彼女は思った。隠し立ては無益にして無意味だった。

「彼らに教わりました」彼女はあっさり答えた。

「では、彼らを知っておるのじゃな？」

ヴェロニカは頭を下げた。それで十分だった。二人はお互いを理解した。

老婆が朝食を盆に盛って現れたが、第三者がその場にいると知ると、新たな卵をゆでるべく、あわてて出ていった。別段動転したふうもなく、好奇心を抱いたふうでもなかった。ヴェロニカがタターの王族と談話している現場を発見したとしても、老婆はきつと質問もせず、卵をゆでるにちがいない。ルーカスはよく仕込んだものである。

食事中はありきたりの会話が交わされた。お体の調子はどうですか、景気はどうなるんでしょう云々。二人とも、ものを食べながら語るにはあまりに重大すぎる懸案があるとわかつていたのである。しかし食事が終わるとすぐ、老人は巨大な革張り肘掛け椅子に身を沈め、パイプに火をともし、対面の肘掛け椅子にすわったヴェロニカに向かって話しはじめた。

「いろいろと起きておる、と思っておりますがの？」

老人には信頼を呼び起こす雰囲気があった。ヴェロニカは一大決心をして、打ち明けることにした。

「ラティマー博士」とヴェロニカ。「本当のことをお話しします。あたしを狂人とお思いになるかもしれませんが、本当なんです。信用なさらないかもしれませんが」

「信用しますぞ」と老人が答えた。

「この前お別れしてから」とヴェロニカが話をはじめた。「しばらくはなににも起きませんでした。それで、あたしは間違っていたのではと思いはじめました。つまり、死というものは、みんなが考えているようなものだったと思っただけです。でも、心のどこかで、そうじゃないとも感じていました。そうしたら、しばらくたってから、あたしは呼ばれているように感じたんです」

「なににも聞こえず、なににも見なかったのじゃな？」老人が質問した。

「なにも。ただ、なにか感じたというか。でも、それはとても曖昧で、かすかなものだったから、はっきりとわからなかったんです。ある日、たまたまミスター・ルーカスのものだった古いコートを着てみました。すると、ふたたびあの人の雰囲気の中に連れ戻されたみたいで、あの人がお墓に参ってほしいと願っているのがわかりました。それまで行ったことがなかったんです。あの人のことを亡くなったと思いたくなくなったからです。でも、その感覚を得たとき、あたしは言いなりになって、お墓に行きました」

ヴェロニカは盗み見るように、ちらりと後ろを振り返った。

「墓地に行きますと、子供たちのお墓がありました。四つもです。どれも新しくて。でも、この村は小さくて、通りなんかひとつしかないんですよ」

彼女は言葉を切り、老人の反応を確かめるように、鋭い視線を飛ばした。老人は頷いた。

「わしは驚かんね」

「その後も、亡くなつた子供たちがいます。あたしが知ってるだけで、二人もです。この子たちの話はあとでします。それより、まずアレックスことをお話しします。彼とは、墓地に行ったときに知り合いました。とても親切で、お墓の場所を教えてくださいました。ひとりきりで行ったら、きつとつかつたでしょう」

「ジャステインは聖別された土地に埋葬されたのかな？」老人が質問を發した。

「そう思います」とヴェロニカ。「でも、教会の回りにある以前の庭のところじゃありません。最近造成した、川に面した場所で、それも一番端っこなんです」

「それでかなり説明がつかまずぞ」と老人が言った。「近代の国教会の聖別なんぞは、宗教改革以前のそれに較べると、骨抜き同然じゃ。ジャステインを教会の影のなかに葬れば、随分と手間が省けたじやろうに。キリスト教の慈悲の精神は、実は保全措置をも意味しておる」

「アレックスは森を抜けてあたしを家まで送ってくれました。あたしはお墓参りで気が動転していましたし、彼はあたしに惹かれていたんだと思います。その後、彼はよく会いにくるようになりました。最後はあたしに結婚してほしいと言いました。それが原因だと思います」

「なんの？」

「あの人の死の」ヴェロニカはそう言うと、一生懸命声を落ち着かせようとした。「うちには犬がいました。ある夜、それが奇妙な発作を起こして、それで」ヴェロニカはためらった。どうすれば、この突拍子もない推測を語れようか？「それで、その犬がおかしくなると、逃げ出して、アレックスを殺しました」彼女はようやく語り終えた。

「その犬はどうしました？」彼女の尋問官が質問した。

「射殺されました」

「その死骸は？」

「狂犬病だと思われたので、アンブリッジの処理場に送られました」

「よし」と老人が満足げに言った。「こういう場合、それしか方法がない。それで、犬が始末されたあと、まだ厄介事がありましたかの？」

「はい」とヴェロニカがゆっくり言った。「ミスター・ルーカスが、この部屋にやってきて、ちょうど博士がお座りのあたりで物質化したんです」

「あなた以外に目撃者は？」

「いません。でも、犬が射殺されたとき、その場にいた全員があの人を見ました。それで、この近所全部が死ぬほど怖がっています。番人のおばあさんはその日からお酒に走ってしまい、もうずっと飲みっぱなし」

「あれはどうやって物質化をやりましたかの？」

「あの人は、殺した子供たちからかなりの量の物質を得ていて、残りはあたしから借りているのです」

「借りた？」

「ええ、物質化に必要な量を借りて、それからあたしに話しかけます。終われば、返してくれて、それから非物質化するのです」

「しよつちゅうそんな真似をやりましたか？」

「四回か、五回くらい」

「そのために、なにかあなたに影響が出ましたか？」

ヴェロニカはためらった。「そのときはたいしてないんですけど」とようやく言った。「本当のところ、回数を重ねるたびに、影響は少なくなりました。でも、あたしは―あたしは、ほかの人に同じことをしたくなっているのです。この前、道を下っていたとき、小さな子供があたしのほうに走ってきました。それであたしはその子を抱き上げて、ほおずりしました。その子から生命力が発散してるのを感じるような気がしました。でも、母親が駆け寄ってきて、その子を奪いとりました。そうしてくれて、有り難いと思いました。あたしにはわかりました。あたしはミスター・ルーカスとまったく同じことをしようとしていたんです」

老人は火の消えたパイプをしばらくひねりまわしていた。ようやく彼は口を開いた。

「人目につかずにルーカスの墓を掘り返すことは可能じゃろうか、それとも内務省から許可を取らねばならんだろうか？」

「それは十分可能だと思います」とヴェロニカが答えた。「でも、あたしとしては、ミスター・ルーカスを傷つけるようなことはしてほしくありません」

老人は彼女を鋭く睨んだ。

「あなたとルーカスの関係は、どういうものなのじゃ？」

「古い絆があるのです」娘が答えた。

「そうじゃろうと思った。して、その絆とは、いかなる代物じゃろうか？」

「あたしたいはどこかの古い神殿で一緒に修行していました。それから、問題が生じて、お互いはなればなれになりました。実のところ、問題の大部分は、二人がはなれていることにあると思います。あの人はあたしにとつて頭脳です。あたしはあの人の心なのです。それで、現世で再会しましたけど、問題はこんがらがっていて、あたしたちではほどけません。ミスター・ルーカスはあたしにありとあらゆる悪いことをしました。自分のすることに気もとめないのです。いまでさえ、あの人はきちんと死んでなくて、ちゃんと死ぬ気もなくて、生きるための唯一の手段として、他人の生気を奪ってるのです」

「吸血鬼の話をご存じかの？」と老人が言った。

「はい」とヴェロニカが答えた。「それに――あたしは狼男のことも聞いています」

両者のあいだに沈黙が訪れた。

ついに娘が口を開いた。「《第二の死》という言葉の意味をご存じでらっしゃいますか？」

「それは受肉の構成要素である人格の分解を意味するのじゃ。人格が個に吸収されるといつてもよい。進化の一部ともいえよう。人格は肉体同様、死を免れんものじゃ。永遠なるものは霊だけじゃ。」

第一の死は肉体の死であり、第二の死は具体的精神を宿す欲望体の死を意味する。それが終われば、神聖なる霊を宿す抽象的精神が転生の時が至るまで自らの場所で待機する」

「なぜミスター・ルーカスはあれほど『第二の死』を恐れているのでしょうか？」

「なぜなればとて、第二の死は人格が生前の所業の報いを受ける決算日だからじゃ。ルーカスは決算日を恐れておる。それも、理由のない話ではないのじゃ」

ルーカスはけっして日中に現れることがなく、来ると思われるのは夕闇深くなつてであるから、ヴェロニカは老人に自分のささやかな地所を案内し、問題解決に関係ありそうなものをあれこれ見て回つた。彼らはルーカスの寝室に行った。ここでは、赤い蔓薔薇の最後の花が窓枠にかびのはえた葉を散らしていた。老人がその葉をていねいに手のなかに集めていた。老人は自分の五感以外の感覚を用いて現場を検証しているのだ、とヴェロニカは思った。

つぎに空っぽの犬小屋を調べる。そのよこにはまだ鎖につながれた首輪が置いてあつた。続いて、人目につかぬよう距離を置きつつ、小道脇の長屋を観察した。最後に教会に続く森の抜け道を歩み、墓地へ出た。秋の雨のためにゆっくり沈みつつある土饅頭のよこに、二人はたたずんだ。

老人はしばらく帽子を脱いだまま土饅頭のそばで黙想していた。なにを考えているのか、誰にもわからない。最後に老人はひざまづき、死者の寝室を覆っていた蔓薔薇から集めた一握りの花びらを、濡れた土の上に置いた。ヴェロニカもひざまづき、くすんだ赤い花びらを十字架の形に配置しなおした。

その晩、二人はおなじみの撞球室にいた。暖炉の炎は不安定な光を放っていた。そして老婆が夕食を片付けるとすぐに、ラティマー博士がランプを消した。

「通常の場合」と老人は言った。「適切な防護処置を施さずにあなたをトランス状態に落とすことなど、許されぬのじゃ。しかし、現在の状況下では、門を解放したままにしておいて、やってくるものは入れてやらねばならん。そうしないと、肝心の相手を締め出すことになりかねん」

二人は長く待つ必要がなかった。炎が消え、薪が鈍い燠火と化すやいなや、ヴェロニカは自分の物質が流れ出る感覚をおぼえた。自分の生命が体外に引き出されていく。やがて頭巾姿が影のなかに形成されていった。霧のような分泌物が凝縮してひだのある衣に変わり、そのなかから両手と容貌がゆつくりと出現し、最後に無限の暗黒をたたえた両眼が物質化した。

彼の注意はヴェロニカに集中していたが、完全に物質化してしまうと、ルーカスは室内に第三者がいることを知覚した。あつというまに彼の大きさは通常の二倍になり、衣はひろがって巨大な蝙蝠の翼と化した。ルーカスは宙に浮かび、椅子に深々と腰掛け身じろぎもしない白髭の老人のほうに向かっていた。希薄なエクトプラズムは宿主の意図を簡単に反映すると見え、狙う餌食の喉元に伸ばさ

れた指の先から、大きな爪がびんと剥き出された。しかし爪はそのまま、決心がつかぬかのよう、宙を漂っていた。しかし大きな白い眉毛の下の青い両眼は、けっして澄んだ光を失うことがなかった。そのためか、脅かすように宙に浮かんだ姿はゆっくりと退いていき、蝙蝠の翼はたたまれ、ついに守勢に回ったルーカスは、エジプトのミイラそっくりの姿勢となってしまうた。

ついに老人が口を開いた。

「息子よ、我らともにつかえる《彼の君》の御名に於いて、歓迎せん」

老人と対峙するこわばった姿形のなかに震えが走った。薄い衣のひだが、ミイラの包帯から剥離して、ゆるやかな長い袖のように垂れ下がった。

「汝何処より来るや？」尋問する声が儀式の一節のように響きわたった。

「《深淵》より来る」しばらくして、いやいやながら答えた。

「して汝何処に向かうや？」

静寂があった。それを破るものは暖炉の灰が崩れる音とヴェロニカの規則的呼吸だけであった。返答があるまでに薪が何度もはぜた。しかし老人は身じろぎもしなかった。

やつとルーカスが口を開いた。

「我は《外の闇》にあり」と彼は言った。「虚空の風に吹き流されしものなり。我に行き先を問うは無益なり、我告げることあたわず」

「されば去れ、息子よ、去りて安息たれ」と老人が言った。「汝清算すべし。而して汝再び命を得しとき来たらば、正道に立ち返るべし」

衣のあいだから蝙蝠の翼が威嚇するように広げられ、ルーカスは怒りにまかせて答えた。「おれに退去を命じる力はないはずだ。おれは顕現領域にしっかりと足場を築いている。おれと彼女で、あんたなんか打ち負かせる」

老人はヴェロニカのほうを向いた。「お嬢さん」と彼は言った。「わしの方ではルーカスに清算を強制できぬわい。あれがまさに言うたように、あれを今の姿から追い出すとなれば、あなたをも破壊してしまうからじゃ。あれはあなたの一部から出来ておる。じゃが、あなたが自分ではなれてくだされば、あれを本来の場所に送れるのですがのう」

ヴェロニカはゆつくりと椅子から身を起こし、眼前の二人をかわるがわる見やった。霊的状态にある彼女には、両者とも肉を備えた人間ではなく、精神を表現手段とした一種の力であるように思われた。彼女の目には老人がプリズムのように思える。宙にかかる偉大な太陽から発される光を伝達しているようだ。しかしルーカスのほうは、蛍光で輝いている。ある種のきのこのように、自身の腐敗を基盤として光を放っているのである。

「あの人はどこに行くのですか？」彼女もようやく口を開いた。「あの人の本来の場所とは？そこに行ったほうが、あの人のためなのですか？」

ルーカスは笑った。その音に無数の声が呼応したように思われた。陋屋のあらゆる火、あらゆる風が無気味な笑いにさざめいたようだった。

「ぼく本来の場所とは」彼が言った。「《分解の暗い惑星》だ。軌道のない《彷徨する惑星》のさ。そこでぼくは細胞単位、組織単位、原子単位で原初の物質に戻されることになる。ぼくの行く場所は煉獄じゃない。虚無なんだ。ぼくが惜しみなく悪に身を捧げてきたからだ」

「本当にそうか、息子よ、本当に惜しみなく悪に献身しておったと思っておるのか？」老人が言った。

「それがどうしたというんだ！」ルーカスはうなった。

ヴェロニカの声が割って入った。「ラティマー博士、あたしにはできません、あの人を破滅させるなんて。あたしは馬鹿かもしれません。間違ってるかもしれないかもしれません。でもどうしてもできません。あたしが手伝わなければ、あの人は誰にも悪いことができないと思います。そして、時間をあげれば、きっと償いの機会もあるでしょう」

「時間というものは、わしらが与えられないものの一つじゃよ。宇宙の潮流には潮どまりがないのじゃ。あれは行くか戻るかなのじゃ。命を得るか、魂の死に向かうかしかない」

「命を得るとおっしゃいましたね。そんなことが可能なら、どうしてあの人は戻ってこられないのです？」

「その理由はじゃ、あれはあなたを通じてのみ戻ってこられるからじゃ。そして、あなたは今あれがおる場所に移ってしまうじゃろう」

「そんなに恐ろしい場所なのですか？」とヴェロニカ。

「恐ろしいよ」とルーカスが短く答えた。

「もう一度聞こう」と老人が眼前の衣姿を凝視しながら言った。

「息子よ、汝何処に向かうや？」

ルーカスは答えなかった。

「汝清算に向かう志し有りや？」

蝙蝠の翼は折りたたまれた。包帯にぐるぐる巻きされた姿に震えが走ったようだった。

「できることなら、行きたくない」

「ならばおぬしはこの娘の生気を奪って顕現しつづけるつもりなのか！」

ルーカスは決心がつかないようであった。長い沈黙があたりを支配した。

「二つに一つじゃぞ」と老人が言った。

「それはわかっている」とルーカス。

彼は大きな椅子に身を沈めるヴェロニカを見た。彼女は心配そうに身を起こした。

「あたしにはよくわかりません。だけど」とヴェロニカ、「あなたをよそにはやりません。あなたと一緒にいてあげるといいました。いまもそのつもりです。子供たちを傷つけさせはしない。だけど、あなたをよそにはやらないわ」

ルーカスはふっと笑った。

「どうやらぼくがよそに行ったほうがいいらしいな」

老人は椅子のなかで身をかたくした。それから息もつけぬまま、部屋の隅の影から次の言葉が発せられるのを待った。

暖炉の炎が消えて暗闇が広がったとき、言葉が語られた。

「どうやら――」言葉は洞窟に落ちる水滴のようにゆっくりと語られた。「――無理というものもあるらしい」

再び室内に静寂が満ちた。内にも外にも物音ひとつなかった。やがてルーカスの声が再び語った。

「きみでなかったら、ヴェロニカ――いや、それはできない」それから再度力を振り絞り、声が鐘の音のように鳴り響いた。そのなかには喜びともとれる気持ちが入り交じっていた。「これでさよならだ、ヴェロニカ。さよなら、元気でな。自由に、幸せになってくれ。ぼくのことにはなるだけ忘れてほしい、忘れられないことは許してほしい。どうしても思い出すというのなら、ぼくがきみを愛していたことだけを思い出してくれ」

ヴェロニカは闇のなかで立ち上がり、彼のほうを向いた。老人はその様子を見ていて、もはやヴェロニカが子供ではないとわかった。いくつもの時代を生きてきた魂が、ついに彼女のなかに完全に宿ったのである。

「あたしはなにも忘れません、許すことなどなにもないのです。こうなったのも定めです。ともに一緒に歩んできた結果です。あなたが《暗い惑星》にいくのなら、あたしも一緒に行きます。あたしがここにとどまるのなら、あたしのもとに戻ってらっしゃい」

「ぼくたちがどうするかは、ぼくたちが決めることじゃない」ルーカスが言った。「ぼくは《彼の君》のところへ行く。そこで《彼の君》がいいようにぼくを扱うだろう」彼は手を掲げ、なにかを喚起するような声で叫んだ。「―なぜなれば、我は清算に向かうものなり」

この言葉が発せられると、突然の変化が生じた。頭巾姿の灰色の影が火炎流に刺し抜かれ、緋色の噴煙が周囲すべてから舞い上がった。焼け落ちる都市の光のようであった。ふたたび呪われた家のあらゆる影やひび割れから、さざめくような笑いが巻き起こり、月はむら雲に覆われ、空高くから歓喜の響きが何度も轟いた。あたかもすべての闇に勝ち誇る邪悪が潜んでおり、ルーカスはその手に引き渡されたようであった。怒涛のごとき疾風が家の脇腹を撃つと、建物は倒壊するように基礎から揺らぎ、柱も梁も軋んだ。窓は枠ごと吹き飛ばされ、ガラスは豪雨と化して床に散乱した。闇よりも濃密ななにかが疾風とともに部屋に忍び込み、部屋中を見えない触手で撫で回し、目当てのものを見つけると、再び出ていった。突風は開始と同様ぴたりと止んだ。部屋からあらゆる霊的存在がいなくなり、残されたものは、嵐に襲われ倒壊した人間の住居だけであった。忍びこんだ力はもはや気配すらなく、それを呼び起こした人間の激情も消えていた。ただ灰色の頭巾姿が立っていたあたりに、鼻をつく耐えがたい腐敗臭だけが残っていた。

第十三章

不意に巻き起こった恐るべき風は、やはり不意にやみ、室内をまったくの暗闇にしてしまった。ヴェロニカは老人がマッチを擦ろうと苦労している音を聞いた。やっと小さな炎があがり、かすかなあかりが影を照らしだした。ランプは粉々になって部屋の隅にころがっていた。そのため老博士はゆつくりと部屋を見回し、松明がわりになるものをさがしていた。後ろを振り向いたとき、彼は突然絞め殺されかけたような驚きの声を発した。粉碎された窓のところに、人影が立っていたからである。彼らは声もなくただ驚いてその人影を見つめていた。消えかけたマッチが奇妙にも無表情な顔を照らしていた。ちらつく炎のために、羊皮紙のような皮膚に深く刻まれた皺、高い頬骨、がっしりした顎、秀でた額がさらに陰影を濃くしていた。深くくぼんだ両眼は輝いていて、鷹の目のようであった。この人物は恐るべき力を秘め、まったく無関心かつ抑制がきいているという印象を与える。ヴェロニカは神秘的な魔術結社の団員たちにさんざん会ってきた。なにせその本部に閉じ込められていたのである。ゆえに、修行が彼らにもたらず身体的特徴を見分けられるようになっていた。ラティマー博士のきらきらした眼、ルーカスの猫のような身のこなし、いかつい顔をした男の非人間的な力、どれも大変に発達していて、一個人に集中され得るものとは思えないほどであった。いわれるまでもなくヴェロニカは、この闖入者が《団》に関係があると思っていた。しかし彼が、この一件で彼女が出会った誰よりもはるかに高く大きい存在であることもわかった。ルーカスが彼女をはるかに凌駕していたよ

うに、この人物もルーカスをはるかに凌駕している。言われるまでもなく、彼女にもわかる。この人物には服従の対象というだけでなく、信賴の対象でもあるのだ。

老人は言葉もなく、突然現れた幽霊のごとき人影を見つめていた。マッチは老人の指のあいだで燃え尽きてしまった。ふたたび部屋は真つ暗になり、静寂が訪れた。

新来者の声が呪縛のごとき静寂を破った。

「私がわかるか？」

「ええ、あなたは――あなたは、《三世》でいらっしやる」ラティマー博士が言った。

「まさに。私は《三世》だ。さあ火をともしたまえ。きみと話し合いたいことがあるのだ」

ヴェロニカは新来者が寄せ木細工の床をわたる足音を聞いた。まったくの闇のなかを、まるで目が見えるみたいに歩いている。やがて聞こえてきた金属音は、彼が扉のそばのテーブルの上にあつた二基の燭台に手をかけたことを示した。ラティマー博士がマッチを擦ったところに、彼は燭台を持って博士の前に立っていた。

いまやヴェロニカはゆっくり彼を観察することができた。ゆつたりとしたフリーズ生地のコートのために実際よりも大男に見えるが、それを脱いでみると、彼はありきたりの文明社会的な背広を着用していた。ある種のオカルト修行者とはちがい、この魔術結社のメンバーは、真の力と知識を有して

いるために、人目につくような真似は避け、むしろ社会規範のなかに身を潜めたがるのである。そのほうが研究に邪魔が入らないからだ。

彼はくすぶる暖炉のまえで身を屈め、まるで生き物でも扱っているようにやさしく灰を引き出した。彼の手の下であつという間に炎が燃えはじめた。その様子を見ていたヴェロニカには、それが闇のなかを自由に歩ける力の一部のように思われた。彼は普通の服こそ着ているが、およそ普通の人間ではないのだ。

ヴェロニカはまだ大きな椅子に身じろぎもせず座っていた。ようやく男の視線が彼女に直接向けられた。彼の入室以来、ずっと彼女は座ったきりだったからだ。

「こつちにおいで」男は彼女の手を取った。「暖炉のそばにきて体を暖めなさい。きみは冷えきっている」

いわゆる馴れ馴れしさなどかけらもない親切的な触りかただった。ヴェロニカはその感触からさらに新来者の人物を多く学んだ。ラティマー博士には頭脳と親切心があるが、力がない。あのいかつい顔の男には頭脳と力があるが、親切心がない。昔の敵のことをそう評価していると、テラスの砂利のほうから足音が聞こえてきた。噂をすれば影である。いかつい顔の男ががっしりした体格を窓辺に現した。

いかつい顔の男は、《三世》を自称する男を見て、ラティマー博士同様ただ驚いていた。そしてヴェロニカが内心感じたところでは、およそ機嫌が良いとは思えなかった。彼は気安く降参するタイプの人間ではなく、また新来者のほうはいかなる人間集団にいようと支配者となる人間である。一方ラティマー博士のほうは、この見知らぬ人間が介入してきたことで心からほつとしているようであり、よろこんで問題を彼の手に預けるつもりでいたようだ。ヴェロニカは直感でそう思った。

「ミスター・フォーデイス、中に入ってくれないか」と人物が言った。「そうすれば窓を閉められるのだ」

いかつい顔の男はこの至極当たり前の注文にすら腹に一物あるようで、なにやらぶつぶつぶやいていた。それでも彼は要請に応じ、いつ倒れてくるかわからないガタガタの窓枠を定位置に戻す手伝いまでしていた。

誰も質問しないし、答えもしない。しかしヴェロニカは直感で、彼ら三人は無言の召喚に従ってここにやってきたのだと確信した。その召喚を出したのが《三世》だったのか、それとも彼も召喚されてきたのか、それはわからない。彼らはいまや煌々と燃え上がる暖炉の前に集まった。二本のパイプと一本の葉巻のために、室内はすでに煙りはじめていた。しかし誰も一言も発しない。彼女は感じた。彼らは事件の状況を“感知”しているのであり、またお互いを“感知”しあい、およそ彼女にはわからない方法で意見を交換しているのである。オカルティストは肉も酒も煙草も口にしない禁欲主義者である―ヴェロニカはいつもそう思っていたのだが、ラティマー博士は番人の老婆が並べる料理を文

句ひとつ言わずたいらげていたし、《三世》は普通の人ならひっくりかえるほど強い葉巻をふかしている。彼らは靈能者かもしれないが、感受性が高いタイプでないことは確実である。

ついに《三世》が口を開いた。「われわれは可及的速やかにこの件を片付けなければならない。この件では、時間が重要な要素である」

「わしもそう思っております」とラティマー博士が驚いたように顔をあげて言った。「わしの聞いたところでは、ルーカスは自分の定めを受け入れて、オシリスの審判の広間に行きました」

「そして門のところで追い返された」と《三世》が言った。「彼の時はまだ来ていなかったからだ。ルーカスは受け入れられなかった。オシリスは殺された人間を受け入れないし——彼は意味深に言葉を切った。「自殺者もだ」

「お待ちください」といかつい顔の男が口をはさんだ。「法に則って処刑された犯罪者を、殺された人間とお考えですか？」

「土地には土地の法がある」と《三世》が言った。「そして《民族霊》が生命を奪うとき、それは法に則った死であり、ゆえに自然死となる。生命を奪うのが正しいか賢いかは別の話であり、その問題は現在われわれとは関係がない。なぜなら法は呼び起こされていなかったからだ。あれは個人的な復讐だったのだ、諸君。そうでないと言い張っても無益だ。諸君は事を急いだ。そのために生じたさ

さまざまな事態に諸君は直面しなければならぬ。諸君はある魂をして、その寿命がくる前に肉体を離れせしめたからだ。それゆえに、問題の魂は、自殺者の魂同様“さまよっている”」

「どうして自殺という言葉強調なされるのですか？」とフォーデイスなる男が《三世》を鋭く睨みながら質問した。

「自ら自発的に肉体を放棄した男に対して、それ以外に用いるべき言葉をわたしは知らないからだ。辞書の編纂者はわれわれが論じているような事態を想定していなかったのだな。いやいや、きみたちは衆知を集めてもわれわれの友人を“消す”ことすらできなかったのだ。彼はきみたちから逃れてしまった」

フォーデイスはほとんど歯軋りのごとき音を発した。明らかに、自分の魔術が目的を達成できなかったことのくやしさが、犯罪を犯さずにすんでいたという良心の安堵よりも大きかったらしい。ヴェロニカがこのまえフォーデイスに会ったのは、つい先日のことだったのに、短期間で彼の人格は大きく変化を遂げていたように思える。ルーカスが自分の魂から除去した邪悪が、彼のなかに入り込んでしまったらしい。

「問題は、きみたちがわれわれの友をどうする気なのか、ということだ」《三世》が続けた。「彼はきみたちのロッジの団員だ。諸君、きみたちの問題なのだよ」

「あいつが最終清算に向かわないのは、あいつが吸血鬼だからだ」とフォーデイスが言った。「あいつの墓をあばいてみれば、死体は埋葬されたときと同様に新鮮だろう」

「まさに」と《三世》が言った。「それはみんなわかっている。しかし問題は、それをどうするつもりか、なのだ」

「吸血鬼を処理する伝統的な手法を、恐らくご存じでしょう？」と《三世》の論敵が答えた。彼の顔にはあからさまな冷笑が浮かんでいた。

「きみが生まれる以前から知っている」と《三世》が言った。微笑が彼の顔の皺を動かした。「だが、当人が吸血鬼となった状況を鑑みれば、伝統的手法を用いる正当性があるかね、とりわけ、きみに？」

痛いところを突かれて、いかつい顔の男は顔をしかめ、沈黙した。

「わしはいつも思っておりまして」とラティマー博士が言った。「いかにジャスティンが欠点だらけであろうとも、なんの理由もなしにわれらの《団》に入るわけがないと。また、わしの思うところ、あれが他人を救うために自分を犠牲にしたとき、負債は、すべてではないにせよ、かなり取り除かれたはずじゃ」

「吸血鬼になった時点で新たな負債をしこたま抱え込んだのではないか？」フォーデイスが質問した。

「それは認めよう。じゃが、それとて、自発的に《第二の死》に赴いたときに取り除かれたとは思わんか？ 思い出してもらいたいものじゃ。わたしにはあれに幽体を捨てさせる力はなかったのじや。しかしあれは、愛する者を傷つけるよりはと、自分の自由意志でそれを放棄した。あれのおった立場では、《第二の死》に向かうのは、それは怖かろう。それに、その時点では《第二の死》のほうを拒むなど、知り得ようがなかったはずじゃ」

「たとえ知っていたとしても」と《三世》が割って入った。「《中間状態》の宿なしでさまようほうが、地獄で焼かれるよりもっとつらい。煉獄の苦痛をすべてなめさせられ、しかも浄化されることがない。あの魂はいま星幽界に出ている。きみたちがそこに彼を送り出してしまった。」

「さて、諸君、前にも言ったように、この件では時間が決定的に重要なのだ。特定の維持形態を奪われたため、ルーカスはもはや自分の肉体を堅持できなくなっている。となれば、きみたちに残された行動時間は、通常の死と葬儀のあいだの時間と同じだけだ。ルーカスは今頃自分の墓に戻っているだろう。もう鶏鳴は過ぎたからな。おそらく明日もまた戻るだろうが、そのころには使いものにならなくなっているだろう」

「正しい処置法は、“胸に杭を打ち込んで十字路の中央に埋めるべし”ですぞ」いかつい顔の男が言った。浮かんだ冷笑に彼の意図がよく読み取れた。

彼の対話者が鋭い視線を放った。「冗談を言っただけか」と《三世》が言った。「そんなことはまったくこの件に関係ないのだ。いずれにせよ、肉体は分解してしまいうだろう。ルーカスはすでに吸血行為を放棄しているのだ。われわれが決定すべきは、成り行きにまかせてルーカスを地縛霊として放置し、時がくるまでさまよわせるか、それともわれわれの手で肉体に戻らせるべく試みるかのいずれかだ。現在彼の肉体は、墓の下で深いトランス状態のまま横たわっている」

老人がぎくりと身を起こした。「すると——すると、あれは死んでおらんのですか？」

「その通り」と《三世》が言った。「彼は非常に高度なヨガの技法を行ったのだ。彼の体を調べれば、おそらく検死の際につけられた傷ですら再生されていることがわかるだろう。彼は必殺の一撃が到来する少し前に体を離れ、適切な条件下で掘り出せるまでトランス状態になるよう計画し、そのときまで吸血鬼として生きる道を選んだ。ルーカスはきわめて遠大な計画に運を賭けた。この実験が成功する確率は千に一つもなかったが、とにかく自分の姿を維持しておくことができたため、続行すれば成功する可能性もあったわけだ。彼は勇敢な男だよ。自分を維持するために、どんな残虐を働いたにせよ、わたしはその勇氣に免じて多くのことを許せる気がする」

彼は言葉を切り、室内を見回しながら、自分の言葉が一同にどれほど影響を与えたか調べていた。

ラティマー博士が《三世》に向ける視線は当惑と熱心が混在したものであった。彼がどちらの方法を望んでいるか、それは疑い余地がなかったが、あまり期待を抱きすぎると失望も大きいと思っていた。彼にとって、ルーカスはとても重要な存在だったのである。孤独な老境にあっては息子も同然で

あつたから、博士は生涯を費やして得たオカルト知識を一生懸命ルーカスに伝授していた。いつの日か若者が、自分にははかない望みであつた《大いなる業》を達成してくれるものと信じていたからである。

フォーデイスのほうは、修行を積んだオカルティストの不動心を失つていて、神経質に口髭を引っ張っていた。執念深い気性が高飛車な方法を望んでいるのは明らかだつた。自分の判決を覆されて頭に来ていたし、《三世》なるよそ者が自らの優越性を暗黙の仮定としている点にも立腹していた。しかし彼は抵抗は無益と考え、できるかぎり撤退の埋め合わせをする気である兆候を示した。彼は立ち上がった。

「私は意見を申し上げました」と彼は言った。「しかし、あなたの権威に抵抗はいたしません。責任はあなたにあります。私の願いは、事の結末に関して共同関与の否定をお許しただきたく思う、これだけです」

「許せと言われても、赦免する権利はわたしにはない」と《三世》が答えた。「この件の結末は、幾つもの転生の果てに見ることになるからだ。しかし、われわれは無理強いはできない。引き下がりたいたいなのであれば、わたしが許可しよう」

いかつい顔の男は分厚い革製の運転用コートを着込みながら、眼前にならぶ顔にあちこち目を走らせていた。ヴェロニカに対しては憐憫に近い視線が向けられた。ラティマー老博士には忿懣と軽蔑の

視線を向けた。《三世》とは目を合わせるができなかった。それでも、彼は挨拶だけは怠らなかつた。

「お望み通りことが運ぶよう祈っておりますよ」と彼は言った。「もつとも、そうはいかないかも。ルーカスは《破碎の闇の光》から逃げられたのかも知れませんが―果たしてどうか。まあ、ともあれ、彼には検死解剖の残りものでせいぜい長生きしてもらいたいものですな」

そう捨て台詞を吐き捨てると、彼は後ろ手で扉を閉めた。残った者たちは彼の足音がらんだ家のにこだましながら消えていくのを聞いていた。

「もちろん、それがこの件の核心部分だ」と《三世》は言った。「検死解剖のときになに行われたのか？ 墓を開いてみるまではわからない。われわれにとって大至急の実際問題は、どうやって墓を開けるかだ。しかしそれ以前、計画に着手するまえに相談しておくべき人間がひとりいる。さて、ミス・メインウェアリング、この件に関するお気持ちを聞かせたい。また、こんなことから手を引きたいかどうか」

ヴェロニカは答えられぬまま《三世》を見つめていた。ルーカスに会えるかと思うと、脈は早くなり、頬がうつつすらと赤くなるほどである。しかし、その再会の意味を思うと、冷たい手で心臓をつかまれるような気がする。見知らぬ男の暗い鷹のような両眼が、彼女に同情するように見つめている。

しかし彼は助け舟など出す気配もなかった。答えを出すべきは彼女の最深部の本能であり、表面にさざ波を立てるような影響を与えてはいけないのだ。

しかしヴェロニカの答えはすでに出ていた。彼女はこの道を進みすぎていて、もはや引き返せなかった。彼女の背後には百万年分の因縁が控えていた。

「あたしは―ジャステインの力になります」彼女ははじめて邪悪な恋人のファースト・ネームを使っていた。「なぜなら、あの人が戻ったとき、あたしが必要になると思うからです」

「わたしもそう思う」と《三世》が言った。「実のところ、あなたがいないと、彼を引き戻してもほとんど意味がないのだ。しかし、決定はあなたの自由でなければならなかった。憐憫や義務感はその代わりにはならない」彼は腕時計を見た。「ちょうど三時を回ったところだ。日の出は七時半。ゆえにわれわれには現在から二番鶏が鳴くまで約三時間しかない」

「どうやって墓を開きますかのか？」ラティマー博士が尋ねた。「内務省から許可を取っている暇はないし、じゃからというて、盗掘まがいは実情に合わん」

「鍬を使わずとも墓を開く方法はある」と鷹の目を持つ神秘的な男が言った。「長衣を持参しておられるか？」

「もちろんですじゃ」と老人は言い、燭台を一基手にすると、風に軋む家の闇のなかに消えていった。

一基残った燭台では、広い部屋の家具の輪郭を浮かびあがらせるだけの光量しかなかった。《三世》を自称する男は、音もなく腰掛けたまま、しばらく消えゆく炎に見入っていた。赤く鈍い燠火が、彼のけわしい風貌に光と影を与え、忘れられた民族が残したグロテスクな偶像じみたものにみせていた。彼ははるか彼方に思い馳せているようで、まわりをまったく気にしていなかったから、ヴェロニカはゆつくりと彼を観察することができた。一体どのような修行を積みこんだ人物が出来上がるのだろうか？ 突如、彼は顔をあげ、暖炉のまえを横切ると、彼女のそばにある椅子に腰をおろし、彼女の手を取った。

「お嬢さん」と彼は言った。「あなたをなにが待ち受けているか、わかっておられるか？ この件を理解しておられるのかな？」

ヴェロニカはゆつくりとモナ・リザの微笑を浮かべた。「お考えになられている以上に理解しております」と彼女は言った。「この種のことは以前から知っておりました」

「とすると、覚えておられるのか？ そう、覚えておられるのがわかる。結構、実に結構。あなたの助力があれば、この件をやりとおせる見込みがある。ルーカスをトランスから覚ますのは実に簡単だが、そのあと生きてゆかせるとなると、これは問題だ。お嬢さんは、彼と結婚しなければならぬでしょう。それがおわかりか？ そして、オカルティストの交わりとは、普通の結婚よりはるかに意

味が深いのだ。あなたは地の上のみならず《不可視》の世界で彼と交わらねばならない。そして《不可視》の世界では、あなたは男性的力となり、統御者とならねばならないのだ。あなたの霊性は彼の知性と結婚し、彼の知性を受胎させねばならぬ。あなたの霊性を受胎するのではない。それを理解しておられるか？ 《内なる領域》では彼に頼ることはできないのだ。あなたは霊性だけで主導権を握らなければならぬ。彼の精神に二度とふたたび支配力を持たせてはならない。あなたの霊性が優勢とならねばならない。子供のあなたに、それができますか？ 理想に燃えるあのタイプの男を引き留めておけますかな？」

ヴェロニカは彼の目から視線をそらして、遠い目で影のなかを見やった。自分にできるだろうか？ 自分は知らないうちにできもしない責務をしょいこんでしまったのか？ 自分の弱さは自分が一番よく知っている。朴訥で世間知らずだから、簡単に策略の餌食になってしまうし、内気だから知ってることにさえ口を出せない。自信がないから、なにかにつけおどおどしっぱなしである。

とはいえ彼女の内部には奇妙な力感が存在していた。まるでオペラグラスを逆さまに覗いたときのような、小さな、しかし鮮明な輝く画像が、彼女の目の前で、永遠に回転を続ける万華鏡のように、砕けては再生していた。神殿の玄関、陽光に白くきらめく巨大な柱。内部の会釈する静かな会衆、漂う香煙と明暗。そして《至聖の聖》の闇、鼎に赤く燃える石炭、そして香煙のなかに自らを形成する精霊のおぼろな姿。

《三世》がヴェロニカの手をがっしりと握った。彼の目が燃え上がり、その火が彼女の脳のなかに広がった。

「おお、巫女よ！」と彼は言った。「思い出せぬのか？」

彼女は湖の底を見るような目で《三世》を凝視していた。しかし、光がさすにつれ、彼の顔の周囲にエジプトの縞模様頭巾のひだが出来つつあるのがわかった。彼の背後には巨大な塔門の影があった。《三世》は自分の意志をヴェロニカに伝達しつつ、彼女の手を碎かんばかりに握った。彼の手の焼けるような熱が皮膚に伝わってきた。

「おお、インスの女司祭よ、忘れてしまったのか？」彼の声が大太鼓のように部屋に轟き響いた。彼の背後にある影のような塔門がまたたくまに明瞭となり、薔薇のように赤い砂岩でできているとわかる。次の瞬間、それはもつと荒削りの、しかし類似した石造建築物に変わった。色は乳のように白い。彼女のはるか下方、まるで断崖から見るように、家並みが小さく見える。屋根はなにか黄色の金属でふかれているが、黄金ではない。濃霧を通して鈍く光っている。そして太陽は銅の円盤のように中空にあった。「ヘリオス、ヘリオス、クアント・ロパンタネク！」と彼女の耳元で声がささやいた。すると失われたアトランティスのすべてが、太陽神の賛歌に呼応して目覚めた。彼女は白衣をまとった司祭の大神進を見た。そのなかで自分が果たしていた役割も思い出した。聖なる火山から立ちのぼる噴煙を見た。彼女は自分の機能がなんであったかを知った。そして自分の声が交唱に応えるのを聞いた。「クアント・ロパンタネク、ヘリオウン！」

彼女は立ち上がり、両手を掲げて《太陽の敬礼》をなした。《大いなる秘儀伝授者》を召喚する言葉が、彼女の口をついてでた。

我が魂をナラデックの川に流したまえ、

生命と光と愛をもたらしたまえ

《三世》と呼ばれた男が椅子から立ち上がり、応答の敬礼をなした。変わりゆく幻視すべてを通じて、彼の顔だけが変わっていかなかった。エジプトの頭巾をかぶってしようと、アトランティスのバンドを額に巻いていようと、常に同じ顔だった。彼はヴェロニカの目をしげしげと覗きこんだ。

「わたしを覚えているか？」と彼は言った。

「はい」と彼女は答えた。

「最後にあったとき、私をどんな名前で呼んでいた？」

「わたくしたちは、あなたを《伯爵》と呼んでおりました」

彼は頷いた。意志力をゆるめたため、物腰から緊迫感が消えた。

そのとき扉が開き、ラティマー博士が黒い鞆を手にして入ってきた。博士はそれをテーブルの上に乗せたが、ふと見ると、サイズも形も同じ鞆が横にある。明らかに《三世》が持ちこんだものようであった。それから命令されることなく、博士は《三世》あるいは《伯爵》と呼ばれる男を手伝っていた。家具を隅に移動させ、部屋の中央付近をがらあきにする。それから《三世》が真ん中にひざをつき、紐の端を押さえた。博士がその紐の逆の端を持ち、床に円を描いていた。紐の端になにかパテ状の塊が結わえてあり、それが蛍光物質らしく、床に描かれた線は光を放っていた。

「印はどのように？」と博士が鞆からもう一個パテ状塊を取り出しながら尋ねた。

「《空気》の《力》の《王子》たちの記号と紋章を描け」と《三世》が答えた。「私は《嵐の霊》を召喚するつもりだ。掘り出せないなら、洗い出す手もあるだろう。墓は川の土手にあるも等しいのだから」

ヴェロニカはこの準備作業を見ていて、ルーカスが語っていた床敷きのことを思い出した。彼が魔術研究に向かうきつかけとなった、あの品である。老人は神聖文字の仕上げを《三世》に任せ、暖炉の燠火のなかに小さな黒い物質を置いた。それが煙をあげはじめると、火鉢で取り出し、古い細工の銅製香炉に入れた。続いてそのうえに細かい粉末状のものを振り撒いた。すぐに濃密な煙がもくもくとわきあがり、室内に芳香を満たす。香煙は風に乗って幻想的な渦を巻いていた。彼は小さな香炉をヴェロニカの手に渡した。

「これをやってもらいましょうかの」と老人は言った。「なにがあっても消してはいかん。いつもゆっくり振り子のように振っていなさい」

振り返ってみると、《三世》がすでに円の中央に小さなテーブルを置いて、黒布を掛けていた。即席の祭壇である。その上に、ルビー色のガラス容器が置いてあり、聖油を注いで芯を浮かせ、ランプとしている。小さな炎が赤らんだ光を放ち、周囲の奇妙な形をした金属物体を照らしていた。

ヴェロニカの注意はしばらく手のなかの香炉から離れていた。すると煙が出なくなったので、ラテイマー博士の警告を思い出し、何度も何度も振ってみた。やがて石炭が再び香に着火し、煙がのぼりはじめた。顔を上げてみると、室内が一変していた。ラテイマー博士は異端審問官の黒衣とフードを身を包んでおり、温厚な人格が消え失せている。しかし《三世》の場合、長衣をまとったために、彼の個性がより明確になったといえた。フードはあみだにかぶられていて、頭にはエジプト王家の頭飾を着用していたからである。

彼はヴェロニカのもとにやってきて、ラテイマー博士が着用しているものと同じ長衣をさしだした。

「これを着てもらう必要がある」と彼は言った。「われわれがこれから行う作業は危険なのだ。これが防護となる」

ゆつたりした流れるような黒衣にすっぽり包まれてしまうと、ヴェロニカは奇妙な隔世観を覚えた。外界からきつぱり切り離されたみたいなのだ。明らかにこの長衣は長らく儀式に使われてきたものである。ひだというひだに香が染み込んでいた。

「さて」と《三世》が言った。「準備はよいか？ 万端整っておるか？ 知つての通り、開始してしまえば、円外に出ることはできないぞ」

彼はヴェロニカのもとにやってきた。

「ここがきみの場所だ」と彼は言った。「周回を終えたときは、いつもここに戻るのだ。それと、香炉をつねに動かしているように。香の予備はあの箱に入っている。石炭は十分もつはずだ。あの円を横切ろうなどとしてはいけない。なにがあるうと、回り続けるのだ。なにがあるうと、あの線を踏み出してはいけない。香炉を燃し続けることも忘れてはならない。それから、円は太陽回りで三度まわりなさい」

彼は祭壇の前に戻り、背を東に向けて立った。浮き芯から放たれる光が彼のけわしい顔を浮き彫りにした。太い眉の下にある鷹のような両眼は尋常ならざる光を放っていた。長衣のために背がいつそう高く見え、揺れ動く影のなか、彼は巨人のようであった。黄金のエジプト頭飾と、その額から飛びかからんばかりに鎌首をもたげる蛇が、年令不詳の顔にぴったりりの王冠と思える。若くもなく、老いてもおらず、しかしその冷静さが不思議に死を感じさせない男の顔は、あたかも地上のすべての民族の盛衰を見てきたかのごとき叡知と力を感じさせた。

彼は頭上高く両腕を伸ばした。巨大な影が天井に広がった。右手には剣を持っている。聳えたつ姿と輝く刃が影のなかに一際大きく映った。浄化のカバラ十字が額と胸の上に切られると、不思議な静寂が部屋を包みこんだ。

彼の合図を受け、ヴェロニカは円のまわりを歩く作業にとりかかった。フードのために息がつまる。覗き穴からでは前がよく見えない。動くたびに香炉の煙がもくもく顔にあたる。歩を進めることにバランスをとるのがむづかしくなっていた。

その円のまわりを歩くのはおよそ簡単な作業とは言いかねた。目に見えない流れが体を押すように思われるからである。しかし二周目のときはずっと楽になった。三周目のときになると、流れに乗って進めるみたいであった。そして指定の位置に戻ったとき、彼のは自分が歩いた場所に炎の円が燃えているのがわかった。じっと見ていると、それは現れたり消えたりする。彼女は自分が見たものがないのであるのか、見当もつかなかった。最初は目の錯覚かと思ひ、次になにかに實際火がついたのかとも思った。最後に彼女は悟った。彼女の見たものはこの世のものではなくて、現れたり消えたりするのは、彼女の意識が両界を揺れ動いているからなのだ。

《三世》は剣先を祭壇上の象徴に突きおろし、魔霊喚起の吟唱をはじめた。耳障りな子音からなる《振動する名前》が闇の奥へと響きわたり、次から次へと魔霊の名前が呼ばれ、術士に奉仕するため深淵から呼び出された。魔霊は《神の秘密の名前》によっても呼び出された。続いて《元素の大神

使の名前も使われた。そして各《名前》が朗々と発せられるたびに、部屋の雰囲気が変わるのが知覚された。

嵐の魔霊たち、空気の力の王子たち、元素の副摂政たち、そういった存在たちが全員名指して呼ばれていた。

「おお深淵の悪鬼たちよ、汝等この《象徴》への誓いを思い出せ。おお闇の大いなる者たちよ、汝等誰に呼ばれたるかを知れ」

屋外は静かであり、漆黒の闇にして霜降る夜であった。室内は、暖炉で薪のはぜるかすかな音、それに老朽家屋の持病ともいうべき軋み音を除けば、まったく無音といえた。男性二人は石像のように立っていた。ヴェロニカは、古い記憶がよみがえり、やはり同じように不動のままだった。彼女は以前にも儀式魔術を行ったことがあり、不動の行を学んでいたからである。

喚起の吟唱は終わり、まったくの静寂が室内を包んだ。《三世》の剣から《力》が光の川となって象徴に注ぎこまれているようだった。そしてこの魔術師の姿は発電機のもようであり、目に見えないほどの早さを持つ力で振動していた。

永遠に続くと思われた静寂は、ようやく樹冠をかすめるわずかな風の息によって破られた。風はさらに強さを増し、枯れ葉がたばになって霜に固まった大地にぶちあたった。雷雨になるような晩ではなかったのだが、ヴェロニカは突風が雷の前触れだと思った。

再び風がうなりをあげはじめ、灌木の枯れ枝が折れる音も聞き取れた。すると突然、なんの予告もなしに雷の轟く音が頭上で聞こえ、豪雨がなだれおちてきた。

ヴェロニカはこんな雨を見たことがなかった。南洋の嵐なみの激しさでありながら、霜降る大地を直撃しているのである。雨というよりも垂直の水流であった。あたりに聞こえるものは雨音だけであったが、数分もたたないうちに、川の悲鳴が音色を変えた。

雷鳴一斉、部屋にこもっていた力が解放されたようだった。まるで儀式で生じた力が祭壇から雲に移行して、稲妻と嵐という形で解放されたみたいであった。二人の男は警戒をとき、ほっとした様子で唯一残る窓に向かい、嵐の模様を眺めていた。

稲妻が夜空を引き裂いたとき、樹木の隙間から川が見えた。風の吹き荒れるなか、川は小型の海と化しており、すでに路上は浸水している。突如、陸橋を通過する列車のような轟音が、嵐を越えてはるか彼方から聞こえてきた。その音が着実に近づいてくる。まるで川沿いの小道を重量車両が突進してくるような音である。それから彼らの目の前を、泡立つどす黒い水の壁が、特急列車の速度で川面を爆走していった。

「あ、あ、あれはなんだ！」と二人の男が同時に叫んだ。彼らがこれほどの顕現を期待していなかったのは明白だった。

泡を先頭とする怒涛のなかに、突撃する軍隊の槍のごとく、流木倒木が見え隠れしている。干し草の大山が後に続き、農用荷車が回転しながら流れていった。

「上流のどこかでダムが決壊したにちがいない」とラティマー博士が言うか言わないうちに、巨大な水門扉が筏のように流れてきて、彼の言葉を裏づけた。死してなお恐るべきルーカスは、蘇生に於いてもさらに恐るべき男であった。

「急げ！」と《三世》が叫んだ。「一刻もむだにはできぬ！ 洪水で墓地がどうなっておることやら」そう言うと彼は、荒れ狂う闇のなかに突進していった。

ヴェロニカは、香炉をあたかも命綱のように握りしめ、彼のあとを追った。老人はいまだフードをかぶったまま、彼女のすぐうしろにぴったりついてきた。

彼らは悶える森を突き進んだ。目印は稲妻に浮かびあがる教会のずんぐりした塔である。樹木は悲鳴をあげ、咆哮し、衝突し、砕け散った。枝は投げ槍のごとく降り注ぎ、水は凍った大地に浸透できず、足首の深さを流れていった。この大災害を引き起こした原因が、この凍土にあったことは疑いなかった。谷に降った雨水はあらゆる斜面からそのまま川に集まったのである。雷雨は通常干上がった大地に降り、大部分吸収されて大事に至らない。しかし凍土はなにも吸収せず、屋根も同然なのである。

彼らは塀から落ちた石につまづきつつも、ようやく教会の裏にたどりついた。墓地に向かつて敷地はやや盛り上がりつつあり、川の横を走る道はその斜面から切り出された形である。増水した川はその道にまで達して濁流と化しており、土手の壁を護る塀のおかげで何とか方向性を保っている。そして彼らがルーカスの眠る地点に接近したとき、大きな水しぶきが空中高くほとばしり、塀が長区画にわたって基礎ごとねこそぎにされ、水中に没していった。

「ここ！　ここです！」とヴェロニカが叫ぶ。彼女は荒れた土饅頭につまづきよろめいた。そのすぐ先は荒れ狂う濁流だった。

「気をつけて！　戻るのがじゃ！」ラティマー博士が叫び、ヴェロニカの腕をつかんだ。「土手がいつ崩れるかわからんぞ」

「もう始まっている」と《三世》が言ううちにも、土手の一画が大量に剥落して濁流に呑まれていった。疾走する暗雲のはざまから月がちらりと覗いた。するとヴェロニカの目に、黒い物体が黄色の粘土層から突き出しているのが見えた。大地が水の圧力に屈して切り取られると、それがゆっくりかしいでいく。その上にばらけた土くれが、豪雨で洗い流されてしまうと、長い棺の輪郭が現れ、次第に川のほうへすべっていく。

《三世》は跳躍一閃、洗われた墓穴に飛び込むと、月光に鈍く光る棺の金属取手を握りしめた。土手は急速に崩れつつあったが、彼はすでに足場を得ていた。そしてヴェロニカは材木を割る音を聞いた。なにかの道具で蓋をむりやりこじあけているのだ。棺の材質は安物で弱かったから、簡単に屈し

てしまった。そして水が《三世》に手をかけたとき、彼は墓穴からはいだしていた。力強い両腕に白く長いものを抱いている。一瞬の電光がヴェロニカの目にその全貌をさらした。死の安息をたたえ、しかし腐敗のあともなく、汚された墓の泥にまみれた屍衣を身に巻いたルーカスであった。

第十四章

彼らは咆哮する闇のなかを戻っていった。稲妻がきらめくたびに、教会の敷地が青白く浮かびあがり、立ち並ぶ墓石と嵐に身をよじるイチイの木の影が目には焼き付く。地面はいまや泥濘と化し、二人の男は重荷をかかえてすべったりつまづいたりしている。ヴェロニカは一生懸命ついでいこうとしていたが、どうしても遅れ気味だった。それでも香炉だけは離さない。どういう理由でか、まだ火がついているのである。

ヴェロニカは必死で願っていた。なにとぞ、長屋の住人が二階の窓から顔を出さないように、月明かりのなかの自分たちの姿を見ませんように。この黒衣の屍食鬼の行進のさまを見られたら、どう思われるかわからない。しかし、彼女のせいにはされるのは確実だった。この一帯の住民感情は、それだけでなくも暴動寸前の域に達しているのである。

森に逃げ込むにはまだ距離がたつぷり残っていたとき、彼女の不安が現実のものとなった。近くの闇のなかで窓が開く音が聞こえてきた。それからドアの開閉音も聞こえた。彼女の判断するところ、その音は風に乗って聞こえてきた。逆方向ということはあり得ない。とすれば、バトラー医師の家から発せられた音だと見当がつく。医師の家の庭は教会の敷地内に突出しているからだ。

「急いで！ 急いで！」と彼女は連れに叫んだ。「誰かが来ます」。彼らは悪戦苦闘しながら森の陰に向かった。嵐にもがくイチイの並木沿いに進めばよい。石塀の裂け目を通り抜けたとき、ヴェロニカがぎくりとして肩越しに振り返ると、教会の周囲に懐中電灯の光が見えた。仲間がかまわず歩を進めたが、ヴェロニカはたちどまった。誰が来たのか、なにがばれたのかを見届けなければと思つたのである。雲間から月光が漏れた。はつきりと見える。その人影はバトラー医師がよく着ていた白いコートに身を包んでいた。なんとという不思議な巡り合わせだろうか？ ことがルーカスにからむとき、いつでもこの人物が現れる。どんな目に見えない因縁があるのだろうか？

なにかを耳にしたように、彼が突然たちどまるのが見えた。音の方向を確かめようと見回している。なにをしているだろうと彼女は思つた。それから彼は、ヴェロニカが潜んでいるあたりにまつすぐ歩きはじめた。風裏から巻き起こる旋風が彼のもとに、彼女が抱えていた香炉の香を運んでいたのだ。彼女は追われた獣のように藪のなかにしゃがみこみ、おびえて手足が動かなかつた。男はつかつかと歩いてしたが、森の端まであと三十フィートという地点まで到達し、逡巡するように立ち止まった。イチイの並木が巻き起こす風が、香を彼方へ吹き飛ばしていたからだ。彼は原始人ではなく、嗅覚は確実な情報をもたらさなかつた。ヴェロニカの見ているまゝで、彼は決心がつかぬまま立ちつくしていた。そして、自分が暗闇にひとりきりと信じていたのであるが、両腕を頭上高くあげると、祈りと呪いがごちゃごちゃになつた文句を叫びはじめた。ヴェロニカにはよく聞き取れなかつたが、ルーカスとアレックスと彼女自身の名前がいつしよくたになつていった。それから医師は踵を返し、土饅頭

につまづきながら家の方向に帰還していった。一言も発さず、悲嘆と疑惑に心奪われている様子であった。

ヴェロニカは隠れ場所から立ち上がり、なかば消えかけた森の小道をたどつていった。すると突然、自分が嵐の闇のなかにただひとり、周囲には深淵の不可視の存在が跋扈しているのだという認識に襲われた。この嵐はたんなる暴風雨ではなく、言いしれぬほど不吉な代物である。影のなかから巨大な手が伸びてくるように思われる。しかもその闇は、薄い黒の紗のヴェイルを何枚も重ねたような、可触の闇である。しかし、夜に跳梁する微妙な力を認識したときでさえ、変化が感じられた。荒れ狂う嵐の怒声にゆつくりと楽音が混じりはじめた。それが徐々に無数の不協和音を押し込めていく。次第に雑音が音合わせされていく。やがて生じた律動する音声も消えていき、すべてが静まりかえった。嵐は不意に起きたと同様、不意に鎮静した。

ヴェロニカに聞こえるものは、水滴のしたたり、迷走する小さな風の渦、闇にさざめく無数の小水流の音だけだった。暴風雨の轟音の直後に静寂が訪れたため、彼女はまだ耳鳴りしていた。稲妻も停止していたため、ようやく闇に目を慣らすことができる。欠けゆく月の薄明かりでなんとか周囲を判断できる。ヴェロニカは泥濘の小道を急ぎ、膝の深さまである出来上がったばかりの水路を横断し、どろどろの灌木を抜け、芝生から石段に上がる。ちようとそのとき、ラティマー博士が彼女を搜索しようとしてテラスに出てきたところだった。

撞球室ではすでに追儺儀式が終わっていたらしい。祭壇から象徴が片付けられており、ランプは消されていたからである。

ルーカスの体が暖炉脇の長椅子に横たわっていた。屍衣は脱がされており、《団》の黒衣が着せられていた。泥のはねも拭いさられ、ぼさぼさに伸びていた黒髪はぼっそり刈られ、くしけずられていた。ヴェロニカが見るところ、彼の外見に格別ショックな部分はなかったが、ただ瞼を閉じた両眼が落ちくぼんでおり、それがいかにも死の表情を思わせた。それがなければ、ルーカスは横になつて眠っているように見えたであろう。

《三世》はまだ泥だらけの長衣を着ていて、窓辺に立っていた。明らかに彼女の到着を待っていたのである。

「急げ」と彼は言った。「すぐに乾いた服に着替えなさい。蘇生のための時間があまりない。鶏鳴まえに片付けなければならない。さあ、急げ」

二度目の急げは必要なかった。ヴェロニカは自室まで駆け上がり、びしょ濡れの衣服を着替えると、すぐに撞球室に戻ってきた。一方ラティマー博士はまだ震える指でまごまごしており、身づくろいを終えていなかった。《三世》はいまだルーカスの生気のない体のよこに立っていた。彼女がおどおどと長椅子に近寄ると、《三世》は彼女の体に腕を回し、死者の体のそばに引き寄せた。眼下に横たわる男と結婚しなければならぬ――ヴェロニカはそう命令されていたのだ。彼女と《三世》は両眼が落ちくぼんだ仮面のような顔を見下ろしていた。

ヴェロニカは目がくらみ、体がだるく、眼下の男に対する自分の気持ちが変わらなかつた。腐敗していないという事実は《三世》の言葉を裏付けていたから、ルーカスは深いトランス状態にあつて、蘇生も可能なのであろう。彼の死の記憶も葬儀の記憶も彼女の心から消えていた。彼は無意識状態の男であつて、ほどなく意識を取り戻すのであろう。そうしたら、彼女はふたたび不可思議かつ邪悪な気性の男と対決しなければならぬ。自分にとつて彼がどういふ存在であつたか、自分になにをしたか、彼女はすべて覚えていた。そして《三世》あるいは《伯爵》という不思議な導師といふか達人といふか聖人といふか妖術師といふか、とにかく彼の助けがなかつたならば、彼女は不安に満ち溢れ、アハブのように自ら死期を悟つて自殺行為に出たであらう。しかし彼に全幅の信頼を置けると感じる。ルーカスを扱うのは彼女なのだ―ただし、彼は目的を果たすために自分といふ道具に頼らなければならぬ。そして彼女は、自分が彼の期待を裏切らないだろうとわかつていた。ジャステインに対する愛を恐怖のどちらが大きいのか、彼女は自分でもわからなかつたが、この神秘の達人は完全に彼女を支配していた。彼女を操縦しているかではなく、彼女を啓発していたからである。

老人が彼らのもとに加わつた。《三世》は老人を暖炉の隅に座席指定する一方、ヴェロニカを長椅子の足元に配置した。こうすれば、死者が目を開いたとき、最初に目にするものが彼女の顔となるからである。それから《三世》は生氣のない体の上に身を屈め、催眠術師が被験者を目覚めさせるときと同じ種類の按手を施しはじめた。

彼はたいして待たずにすんだ。三、四回目の按手でルーカスの体に震えが走つた。彼はなんとか動こうとしたが、また静かになつた。生命がまだ全組織を活性化させておらず、磁気を放つ手の動きで

は神経に電流を通したただけだったのである。《三世》は掌を広げて死者の胸の少し上にかざし、ゆっくりと上下させはじめた。数分後、胸郭が上下運動に呼応しはじめ、呼吸機能が回復した。心臓が鼓動を開始していたのもすぐに明らかになった。顔から白蟻のような色が消え、正常な色合いを帯びてきたからである。しかしそれは長らく闇のなかにいた生物の皮膚のように、いまだ漂白していた。

《三世》がヴェロニカのほうを向いた。

「彼に語りかけなさい」と《三世》。「名前を呼ぶのだ。戻ってこさせなさい」

ヴェロニカは長椅子に身を屈めた。

「ジャステイン！」とやさしく呼ぶ。「ジャステイン！」

横になった男の顔に震えが走った。彼はぎこちなく動いた。手足がこわばり、つっているようだった。それからゆっくりと身を起こして、座る姿勢を取った。しかしその顔はまだ睡眠者の顔であり、両眼は閉じられたままだった。

ヴェロニカは長椅子の横に移動して、ルーカスの手を握った。彼の手の冷たさは蛇の冷たさであった。握っているうちに、彼の蛇のような指が彼女の指にゆっくり巻きつき、からみあった。《三世》と呼ばれる男がルーカスの背後にやってきて、両の掌でルーカスの頭部両側面を包みこんだ。

「ルーカス！ ジャステイン・ルーカス！」と彼はチェロを思わせる響く低音を放った。

仮面のような顔のくちびるがゆつくりと開かれ、そのあいだからかすれたつぶやきが聞こえた。

「わたしが誰だかわかるか？」とルーカスの背後から男の声がした。

かすかな頷きがあった。

《三世》はルーカスの頭をかかえたまま、背筋を伸ばし、暖炉の上に肘をついた。この姿勢でルーカスの意識が完全に回復するのを待っていたのである。蘇生者の無表情な顔は地下納骨所の彫像のようであったが、血液がゆるやかに血管を循環するにつれ、徐々に幽鬼のごとき青白さを失っていった。ヴェロニカが握っていた手からも、死の冷感がなくなっていく。だんだんとルーカスが生に帰還しつつあることは明らかだった。彼は突如自分の手を握る手の存在を意識したらしく、その肌触りを確認するかのよう握り方を変えた。

「ヴェロニカかい？」彼は言った。

ヴェロニカは口がきけなかったが、彼女の手は彼の手のなかで震えた。ルーカスは前屈みになり、ゆつくりと彼女の手を唇に当てた。それからふたたびクッションに身を沈めた。

ながいあいだ沈黙があった。ヴェロニカは長椅子のよこで腰掛けるともひざまづくともとれる姿勢でいた。ルーカスは死んだように横たわっていたが、しかし以前とは明らか差異があった。彼の周囲の気が完全に変わっていたのである。彼は眠っているのでも死んでいるのでもなく、休息しているので

ある。唯一死んでいるように見えるものは、いまだ開かれていない落ちくぼんだ両眼がある顔だけだった。

ついに彼がふたたび口を開いた。

「最初に目を覚ましたとき——ここにいたお方は、どうしたんだ？」

「まだいらつしやるわ」とヴェロニカが言った。

「どこに」

「あそこ、暖炉のそば」とヴェロニカが返答した。

「こんな真つ暗闇じゃ見えないな」とルーカスは言った。「明かりをつけちゃいけないのかい？」

ヴェロニカは当惑し、なんと答えてよいやらわからなかった。ランプの暖かい光が彼の顔を照らしているし、部屋はまったく明るいのだ。

《三世》が暖炉の前を横切って一人のもとにやってきた。それからルーカスの頭を両手ではさむと、彼の顔を光に向けて、やさしく脛をひとつひとつ開いていった。眼球があるべき場所には空洞しかなかった。《三世》とラティマー博士は互いに顔を見合わせた。

「検死解剖の際に切除されたんだ」と《三世》が言った。

ルーカスは長椅子から足を降ろし、背筋を伸ばしてすわった。

「暗闇にいる必要があるんですか？」と彼は言った。「だれか明かりをつけてくれないか？」

《三世》がルーカスの肩に手をかけた。

「きみにはもう光がないのだ」と彼は言った。

誰も口をきかなかった。ルーカスは両手で顔を触り、指の下にうつろな眼穿を感じた。

「部屋には光が？」ようやく彼が言った。

「明るく輝いている」と《三世》が答えた

ルーカスは両手に顔を埋めたまま、長らく黙っていた。ついに彼が口を開いた。

「文句は言えない」と彼は言った。「これが当然だ」

「よくぞ申した！」《三世》が叫んだ。

ヴェロニカのルーカスに対する恐怖は、彼が盲目になったことを知ったとき、すべて消えていたようだった。彼女はルーカスのそばにひざまづき、熱心に彼の顔を覗きこんでいた。

「そこにいるのかい、ヴェロニカ」と彼は言った。

「ええ」と彼のすぐ近くでささやく声がした。「あたしはここにいる」

彼は彼女のほうに手を伸ばし、彼女も彼に手を伸ばしたが、彼の手は目標を外して彼女の頭に触れた。彼の手はしばらくその場を動かさず、それから彼女の肩に落ち、彼女を抱きしめた。彼はなにか言おうと口を開いたが、そこでやめ、考えこんでいた。盲目という認識が徐々に彼のなかに芽生えつつあった。もはや以前の計画を実行するのは不可能だとわかった。確かに彼は死を免れて復活したのであるが、復活した先は死んだも同然の生だったのである。

一群の鶏が遠くの農場で鳴いた。

「ぼくの葬鐘だ」とルーカスはかすかに微笑を浮かべ、ふたたび沈黙に戻った。

《三世》はマントルピースから肘を外し、大きな革張肘掛け椅子を引き寄せると、腰掛けた。

「過去は過去だ。これからは未来を考えよう。きみにはなにか計画があるか？」

「なにも」とルーカスが言った。「ぼくを好きなようにしてください」

「ところが、わたしのほうには多くの計画があるのだ。きみはわたしに身柄を預けた。ならばわたしの好きにさせてもらおうか。きみには作業を再開してもらおう」

ルーカスは答えなかった。

《三世》が続けた。「知つてのとおり、わたしはながらくヨーロッパを離れていた。すこし離れすぎだったかと思つている。《団》は勢いを失い、消える寸前だったが、そこにきみが再点火しようと試みた」

ルーカスはほほ笑んだ。「たしかに各所で元気づきましたね」

「そのとおり」と《三世》が言った。「きみは正しかった。《団》には新しい刺激が必要だったのだ。しかしきみは一人でそれをやれなかった。ヴェロニカが《内的領域》の作業にぴったりの相手になつてくれるだろう」

ルーカスは驚いた馬のように頭をもたげ、それから自分を押さえた。

「ヴェロニカはその件をどう思つているのか」彼はきわめて平板な口調で言った。

「彼女はこの作業を始める以前に同意している」

ルーカスの腕が彼女を強く抱き締めた。

「そうなのかい、ヴェロニカ？」彼はささやいた。

答えるかわりに、彼女は体をすりよせた。ルーカスははた目も構わず彼女の髪に顔を埋めた。

数分後、彼は顔をあげた。

「もうひとり、会いたい人がいる」と彼は言った。「その昔、いつもぼくにとてもよくしてくれた人だ。ラティマー博士」

「わしはここじゃよ、ジャスティン」と老人が言った。

ルーカスは手を差し出した。それから彼は、片腕にヴェロニカを抱き、片手は老人に預けたまま、黙ってすわっていた。

ようやく顔をあげたとき、そこにはまったく異なる表情が浮かんでいた。

「これほどの機会を与えてもらえるなんて、身に覚えがない」とルーカスが言った。

「きみは自らの過ちを悟り、不平をいわず償ったのだ」《三世》として知られる男が答えた。「きみは振り返り、顔もしかめずに焼けた石炭の上を歩いて戻ってきた。きみは試練を通過したのだ。いまやきみは《道》に戻った。門はきみの前に開かれてい」